

263.3  
385



3

0049731-000

263.3-385

新制尋三書方の新指導

水島修三・著

明治図書

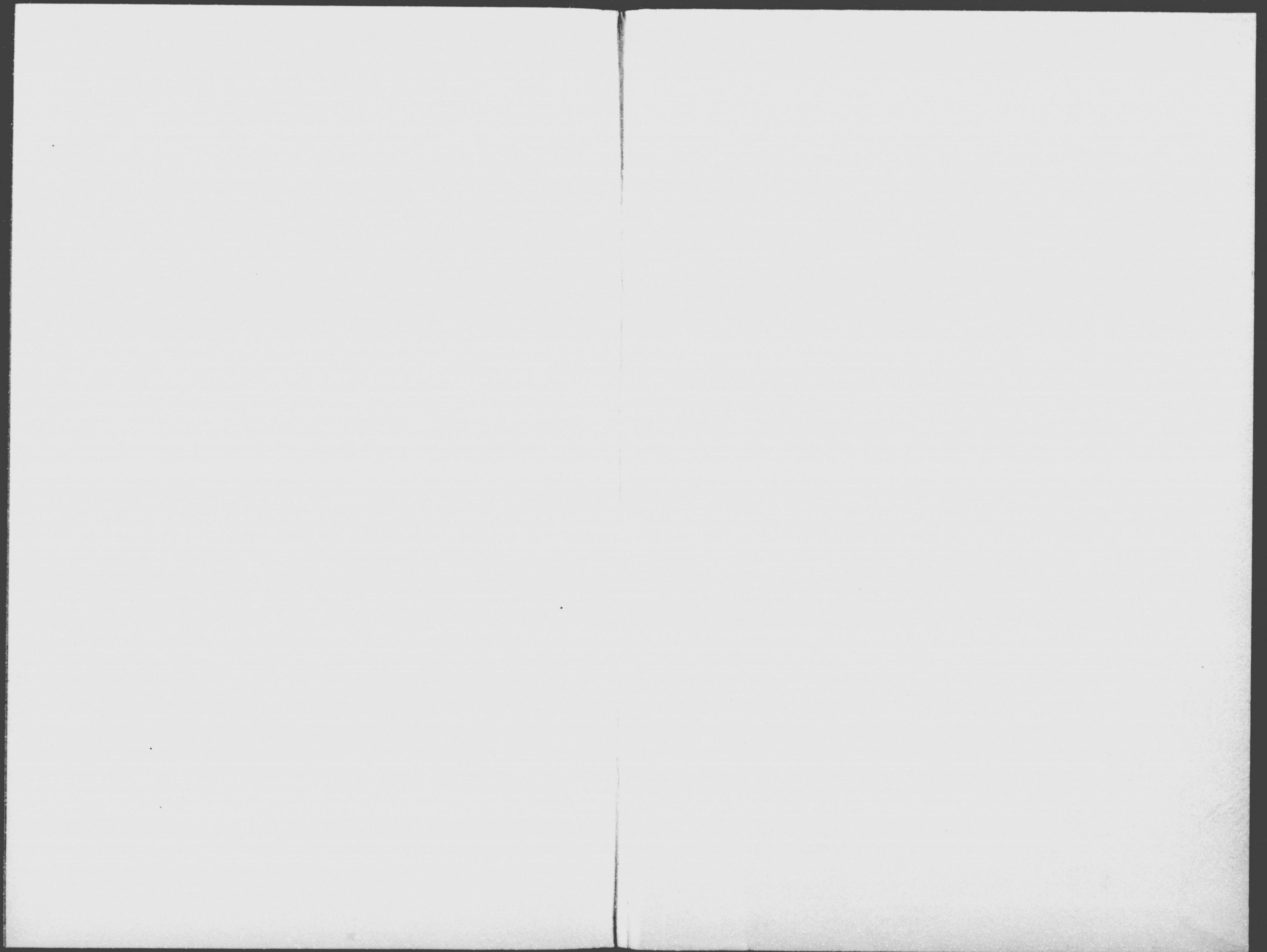
下

昭和10

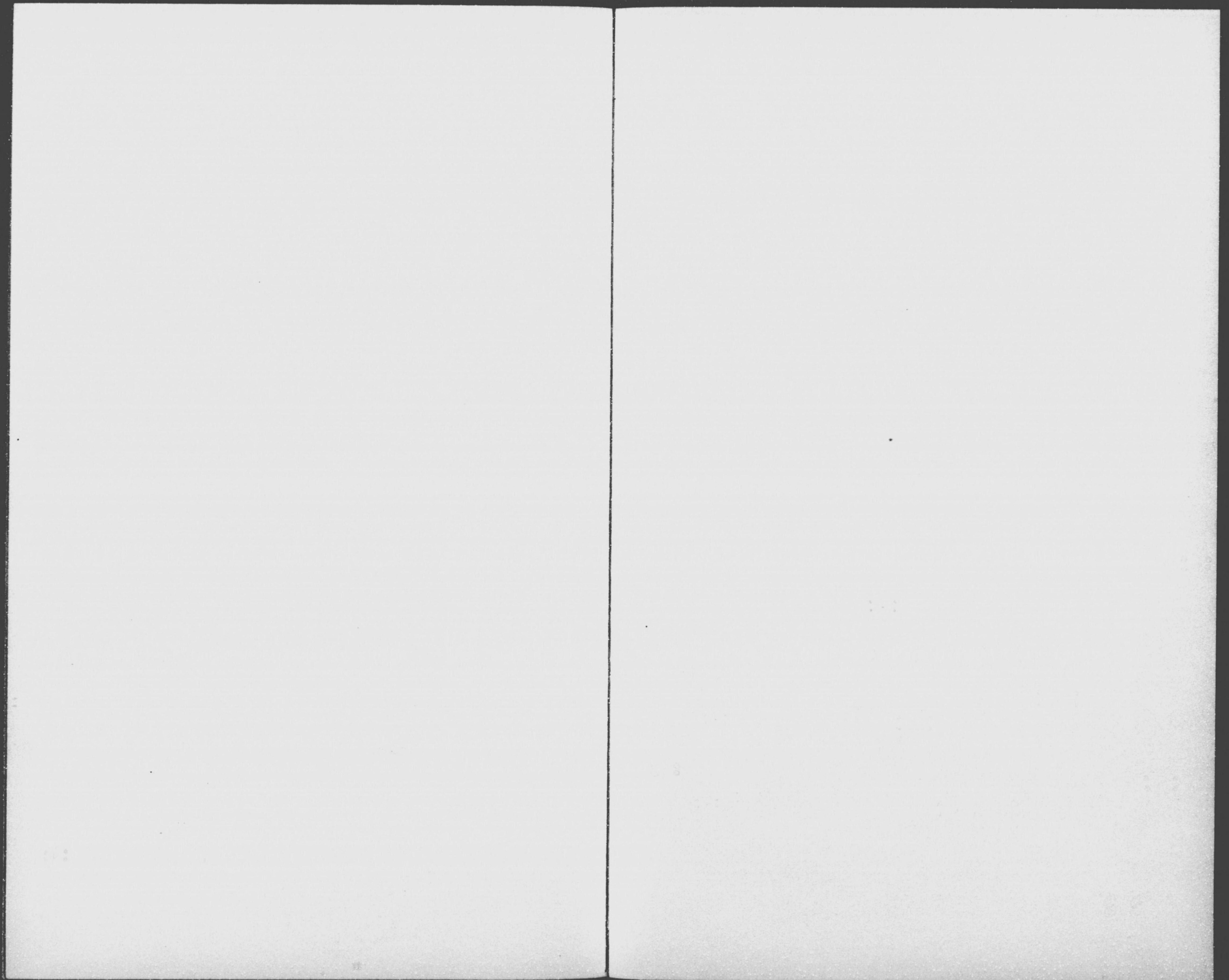
AHJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権  
第67条の規定に基づき、平成12年5月1  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの











エト5F-98.



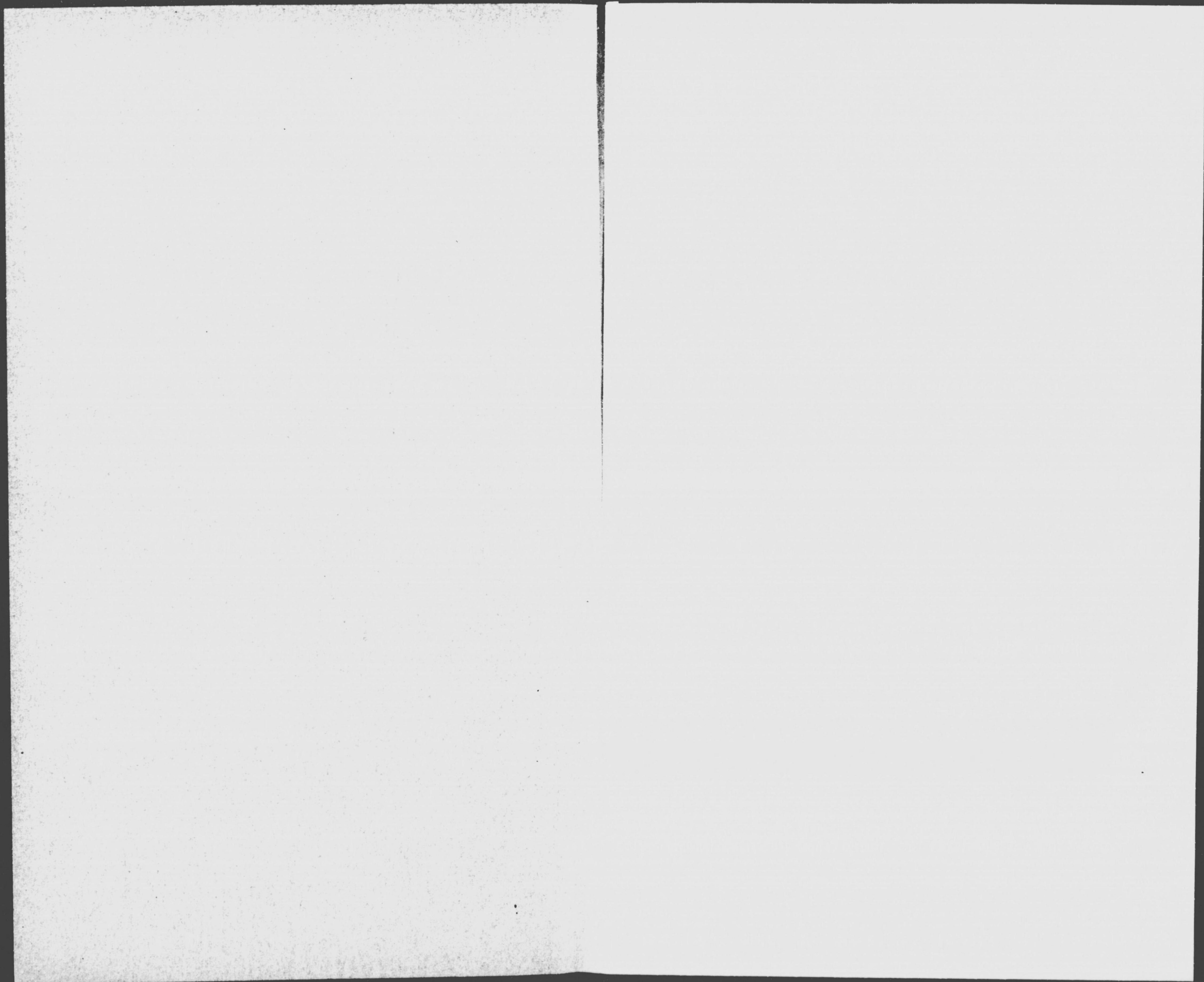
東京高師附屬小學校書方科擔任  
水鳥修三著

書方の新指道寸下

東京明治圖書株式會社









孟法師碑 (唐) 褚遂良筆

望青鳥之來翔以貞觀  
十二年七月十二日遺  
形而化春秋九十有七



雁塔聖教序碑 (唐) 褚遂良筆

乎陰陽而易  
以象也陰陽  
處乎天地而  
難窮



孔子廟堂碑 虞世南書(唐)

書表瑞濟濟焉洋  
宇宙而洽幽明動  
潤江海斯皆紀乎



寸松庵色紙 傳紀貫之書





御物朗詠集 傳 藤原行成書

すしやとらむむらじらむらね  
はあつてふあてらむらむらね  
したうらむらにあらむらね  
むらむらむらむらむらむら









(者著) 眞寫勢姿法書筆毛



263<sub>13</sub>-385

## 序

此度小學書方手本尋常科第三學年用下が、第三學年用上に次いで甲乙兩種共文部省から發行された。三年用下は漢字の學習を主としたもので、讀方に於て既習せし漢字につき、楷書大字の指導を爲して、用筆法の基礎を作ると共に、併せて平假名の復習を爲す様に編纂されてある。

私は多年沈滞せし小學校書方教育刷新の要諦は、國定書方手本の改善にありと信じ、其改訂に努力して來たが、今や着々と實現しつつあるを見て、衷心慶賀の情に堪えぬものがある。

新手本の甲種は漢字を背景とし、乙種は假名を基調とせる二人の筆者に依りて揮毫されてゐるが、何れも其特色を發揮し、和漢の名蹟を根據として、含蓄ある清新の書風を發表された。尙文句は漢字及平假名



交りにて、兒童の環境の中から選ばれ、纏まりたる語を爲してゐるが、何れも精選されて、明朗高雅な氣持よき句に満ちてゐる。

かくて新に誕生したる手本が、廣く教壇上に於て最も有効に運用され、編纂者並に筆者の理想が正しく具現されん事を冀求して止まざる爲、先づ文部當局者より詳細に其編纂方針を伺ひ、甲乙兩筆者の意を體し、其用筆法に従ひて本書の執筆に着手したのである。

素より淺學菲才の身なれば、出來上りしものは誠に貧弱ではあるが、多年書方教育に従事して得た理論を經とし、體驗を緯として解説したものである。多少でも實際上の御参考とならば望外の幸である。

昭和十年十月

著 者 識

### 新尋三書方の新指導 下 目次

#### 第一篇 總 說

##### 第一章 書方教育の再建設……………一

- 一 書方教育の歴史と法令の精神
- 二 時代思潮と書道の盛衰
- 三 書方教育再建設の必要

##### 第二章 國定書方手本の變遷……………四

##### 第三章 書道の興隆と書方教育……………五

- 一 科學の進歩が書に及ぼしたる影響
- 二 民族精神の振興と書道

尋三書方の新指導 下(目次)



第三書方の新指導 下(目次)

二

- 三 物質文明と書道
- 五 書方教育と情操陶冶

- 四 書の實用價值
- 六 書道の勃興と書方手本

第四章 國定書方手本の根本義……………九

- 一 國定手本の具備すべき要件
- 二 書方手本の基準となるべき諸大家
- 三 學書の常道

第五章 新手本の研究……………二

- 一 筆者と其書風
- 二 用筆法と結構法
- 三 編纂の趣意
- 四 手本の採用と其取扱ひについて

第六章 書方指導者としての教養……………三六

- 一 書方教育不振の原因
- 二 書方科研究の必要
- 三 古法帖の研究
- 四 學書の方法
- 五 手本とすべき代表的法帖

第七章 書道史概説……………四一

第一節 支那書道史……………四二

- 一 太古時代
- 二 夏・殷・周時代
- 三 秦時代
- 四 漢時代
- 五 三國及六朝時代
- 六 隋唐時代
- 八 宗以後

第二節 日本書道史……………六六

- 一 上代
- 二 奈良朝
- 三 平安時代
- 四 鎌倉時代以後

第八章 書法……………六六

- 一 書法の價值
- 二 用筆法と結構法
- 三 藏鋒と露鋒
- 四 中鋒説

第三書方の新指導 下(目次)

三



第九章 毛筆書方の指導 ..... 一〇七

- 一 姿 勢
- 二 毛筆の執筆法
- 三 毛筆と腕法
- 四 潤 筆
- 五 運 筆
- 六 手本の學習方法
- 七 指導方法と批正
- 八 示範と練習
- 九 書方指導目標の段階
- 十 基本練習と初書
- 十一 毛筆書方と用具

第十章 硬筆書方の指導 ..... 一二六

- 一 鉛筆書方の手本と指導時間
- 二 硬筆の種類と其特質
- 三 鉛筆細字の目的
- 四 硬筆書方の姿勢
- 五 鉛筆の選定と其の取扱
- 六 鉛筆の執筆及腕法
- 七 鉛筆書方の用筆法と練習法
- 八 鉛筆書方指導上の注意

第二篇 細 説

〔甲〕 甲種手本による指導案

第二學期 〔豫定凡十週 一週二時 約十九時間〕

- 第七週 第一時 新手本學習についての諸注意と書話 ..... 一三三
- 第二時 遠足田・島鳴子 ..... 一三七
- 第八週 第一時 島鳴子 ..... 一三七
- 第二時 遠足田・島鳴子 ..... 一四〇
- 第九週 第一時 町村家・國男女 ..... 一四四
- 第二時 國男女 ..... 一五〇
- 第十週 第一時 町村家男女 ..... 一五二
- 第二時 木の葉が散る ..... 一五五



第十一週	第一時	が散る	二六一
	第二時	木の葉が散る	二六三
第十二週	第一時	麥まき取入れ	二六四
	第二時	取入れ	二七一
第十三週	第一時	麥まき取入れ	二七三
	第二時	落ちぼを拾ふ	二七四
第十四週	第一時	を拾ふ	二八四
	第二時	落ちぼを拾ふ	二八三
第十五週	第一時	屋根庭はつ霜	二八四
	第二時	はつ霜	二九一
第十六週	第一時	屋根庭はつ霜	二九二

第三學期

〔豫定凡九週 一週二時 約十八時間〕

第一週	第一時	冬休竹馬雪鬼	二〇六
	第二時	竹馬雪鬼	二二三
第二週	第一時	冬休竹馬雪鬼	二二四
	第二時	都會工場黒煙	二二六
第三週	第一時	場黒煙	二三三
	第二時	都會工場黒煙	二三三
第四週	第一時	文字を読む書く	二三四
	第二時	ひ書く	二三一
第五週	第一時	文字讀む書く	二三三
	第二時	梅ぼち天神様	二三五
第六週	第一時	天神様	二四一
	第二時	梅ぼち天神様	二四三
第七週	第一時	ひな祭桃白酒	二四四



第二時	桃白酒	二五二
第八週 第一時	ひな祭桃白酒	二五一
第二時	朝風若草小鳥	二五二
第九週 第一時	草小鳥	二六〇
第二時	朝風若草小鳥	二六二
— 補充教材 —		
一	戦争軍旗大砲	二六四

〔乙〕 乙種手本の解説

一	遠足田島鳴子	二七一
二	町村家國男女	二七五
三	木の葉が散る	二七六

四	麥まき取入れ	二八二
五	落ちぼを拾ふ	二八七
六	屋根庭はつ霜	二九一
七	商人賣出買物	二九五
八	日本一富士山	二九九
九	冬休竹馬雪兎	三〇一
十	都會工場黒煙	三〇五
十一	文字讀む書く	三〇八
十二	梅ばち天神様	三一〇
十三	ひな祭桃白酒	三一四
十四	戦争軍旗大砲	三一七
十五	朝風若草小鳥	三二〇



附 録

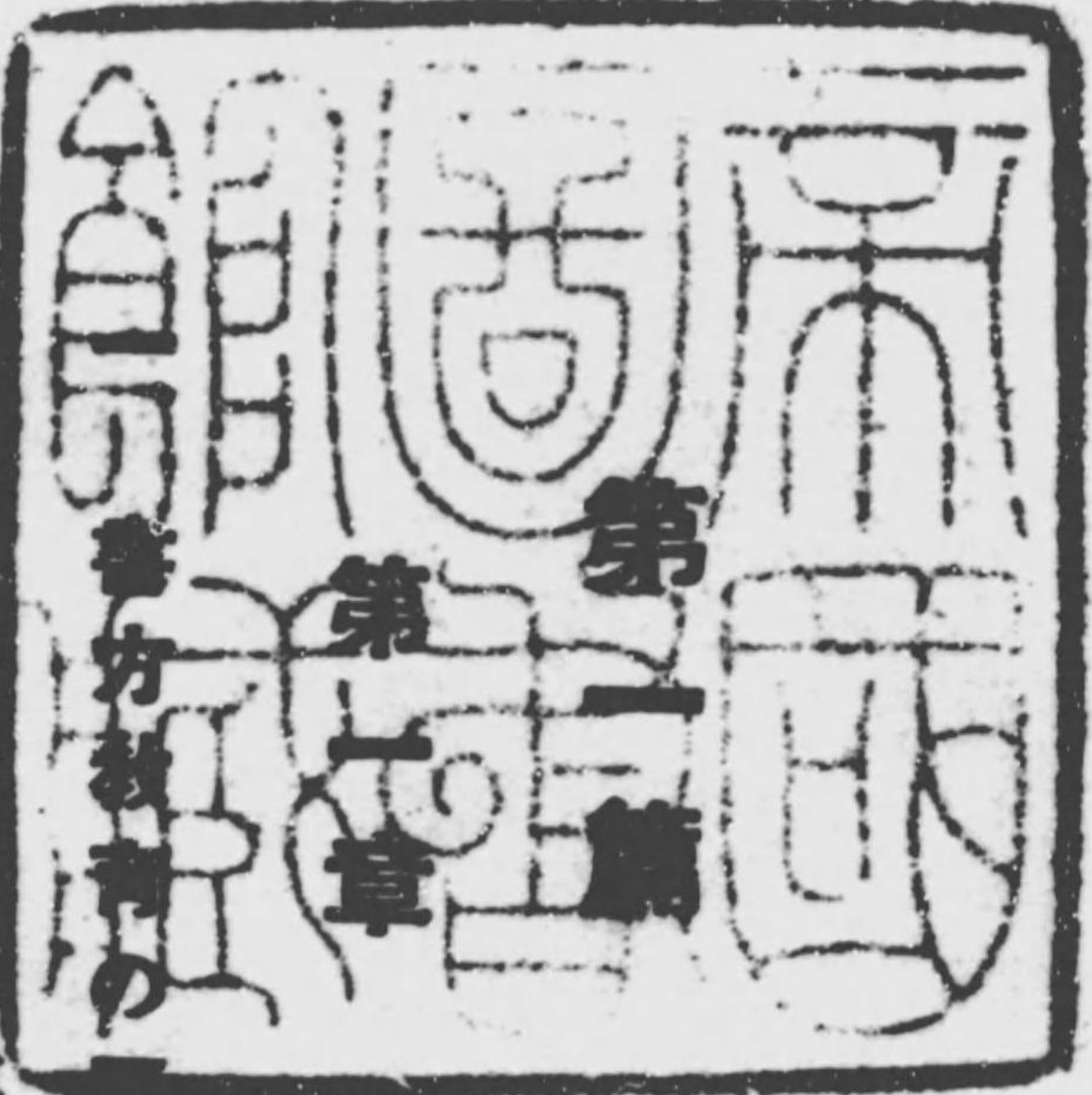
教材配當表

.....三四

—目次終—

新制尋三書方の新指導 下

水 島 修 三 著



總 說

書方教育の再建設

第一章 書方教育の歴史と法令の精神

書方は明治以前には庶民教育の中心をなし、讀書算中珠算と共に最も重んぜられ、農村の子弟は之のみ學びし者もあつた。又士族の子弟は算術を輕んじ、漢籍と共に習字を勉強した。即ち書道は古來六藝の一として、上は帝王より下は百姓町人の末に至るまで、萬民學つて學習せし課程たりしが、明治以後の教育に於ては歐



米の制度に倣ひ、新に各種多様の教課を課する事となつたので、自然従來程書方に力を注ぐ事が出来ぬ様になつた。それでも明治五年の學制には一週四時乃至六時を配當し、明治十四年の教育令では、本課の成績を向上させるための色々な苦心が窺はれ、尙明治二十四年に改正された「教則大綱」には、従前通り獨立科目として重んぜられ、次の様な規定がある。

習字ハ通常ノ文字ノ書キ方ヲ知ラシメ、運筆ニ習熟セシムルヲ以テ要旨トス。  
尋常小學校ニ於テハ片假名及平假名、近易ナル漢字交リノ短句、通常ノ人字、苗字、物名、地名等ノ日用文字及日用書類ヲ習ハシムベシ。

漢文字ノ書體ハ尋常小學校ニ於テハ楷書若シクハ行書トシ、高等小學校ニ於テハ楷書、行書、草書トス。

習字ヲ授クル際ハ殊ニ姿勢ヲ整ヘ、執筆及運筆ヲ正シクシ、字形ハ整正ヲ尙ビ運筆ハ務メテ速カナラシメンコトヲ要ス。

他ノ教科目ニ於テ文字ヲ書カシムルコトアル時ハ、亦常ニ其字形及字行ヲ正シクセシメンコトヲ要ス。

其後明治三十三年の「小學校令」で、習字科は國語科に併合せられ、書方科と改稱して其一分科となつたが、本科の法令上の精神は、大體前記明治二十四年の規定を以つて解釋してよいと思ふ。

## 二、時代思潮と書道の盛衰

處が實際には書方教育は明治以來年と共に衰微に赴き、殊に近年ペン、鉛筆等の輕便な硬筆が普及せし結果は、毛筆書方を一層厄介視する様になり、且世を擧げて歐米風の偏知教育に走りし結果は、情操陶冶を重んずる在來の書方學習を輕視する様になつた。

然し其内に時勢は變つた。近時時局の影響による民族意識の擡頭と、國家觀念の旺盛とは國粹文化に目覺めて、日本精神の發露たる書道尊重の傾向を示し、又寫眞及印刷術の發達によりて、一般人士も古來の名蹟に接する機會を得たので、これに刺激されて興味を起す様になつた。且現代の焦心不安な物質文明に對し、精神の安定を得んとする修養上の見地から、社會一般に書道の必要と其價値を認識する様になり、最近頃に勃興の機運に際會した。



### 三、書方教育再建設の必要

其爲學校教育に於ても書方科振興の必要を認め、輿論の趨く處遂に書方手本の改訂となつたが、時代の要求は低級なものでは満足出来なくなつた。吾々は晉唐・奈良・平安への復歸により、更に一段の研究を爲し、書方教育の再建設に着手せねばならぬ。即ち從來の惰眠を破つて書道の本質的研究に着手し、手本文字の研究に就きても其據りて來る處を尋ねて、精査し練磨し、斯道に對する素養と見識とを啓増せねばならぬ。尙教授の方法に就ても、十年一日の如き臨書一點張を改め、之が根本的研究に着手し、來るべき書道の復興に小國民をして參畫せしめねばならぬ。

## 第二章 國定書方手本の變遷

多年翹望せられてゐた國定書方手本の改正は漸く其緒に着き、鈴木翠軒・高塚竹堂兩氏に依りて尋常科用甲乙二種の手本が揮毫せられ、高等科用には更に比田井小琴女史の手になれるものも出來た。現存の國語書キ方手本が創めて發行されたのは明治三十七年の事で、長三州氏の高弟日高秩父氏が、文部省の委囑により唐

の四大家の一人顔眞卿の筆法にて揮毫されたのである。其後明治四十三年には卷菱湖流の香川松石氏が乙種の手本を書かれたが、甲乙共に筆者が歿せられたので、乙種手本は同派村田海石氏の高弟西脇吳石氏により大正六年書かれ、甲種手本は同流の山口半峯氏により尋常五年以上が書かれたのである。

## 第三章 書道の興隆と書方教育

斯様な次第で明治から大正にかけて出來た國定手本も、今日では時代は移り書道界の趨勢は變つて、改訂手本の出現を要求される様になつたのである。

### 一、科學の進歩が書に及ぼしたる影響

近時寫眞の普及と印刷術の發達とは引いて書道界にも活氣を呈し、全集に講座に雜誌に、古來の眞蹟・碑版・法帖類を滿載して、千古の名蹟傑作の複製品を極めて廉價に社會に送り出した爲に、一般人士の書道熱を翻り、頓に勃興の機運に際會したのである。之は書道興隆の表面的な觀察であるが、裏面には更に深き理由のある事が察せられる。



## 二、民族精神の振興と書道

近時殊に國民意識が熾烈となり、國家觀念が旺盛となりし爲に、我傳統の醇風良俗を保持したいといふ念が一般に強くなつた。書道は實に其傳來以來千數百年間、我民族の好伴路として常に友となり師となりて、國民精神を培ひ育て、來たのである。されば書道の尊重は國民精神宣揚の一形式にして、西歐文化の滿喫に飽き日本教育建設意識の盛なる今日、我民族本來の眞面目たる日本のものに立歸り、外交は勿論學問上に於ても、自主獨立其使命に邁進するの時、書道の興隆する事は勿論當然の事と信ずる者である。

## 三、物質文明と書道

更に明治以來物質文明の攝取に吸々たりし結果は黄金萬能の時代を作り、總てを功利的に打算して精神的方面の價値を没却する様になつた。其爲人々は純美なる精神生活を離れて物質生活の上のみ立つ様になつたので、世を擧げて焦心不安の渦中に投ぜられ、徒に末梢神經のみ尖り、此儘に推移するならば人心の破綻を來すかと思はるゝ程に息詰つて來た。そこで心ある人々は先づ精神の落着を

取り戻し、逼迫せる現状を打開するには手習が最も良い事を思ひ、茲に期せずして一般書道の隆盛を來す事となつた様である。即ち書道は物質文明の弊を救ふ安全瓣として價値ある事が認められたのである。

## 四、書の實用價値

其他實用上からも書道に心得ある者は、生涯にはどれだけ利益だか幸福だか分らない。實用書としてのペン・鉛筆も、書道の素養があれば其揮灑は意のままであり、又中には毛筆でなくてはならぬ場合もある。例へば一片の履歴書や手紙によつて、其人の運命の左右さるゝが如き事無きにしも非ずで、學校教育中に於ける書方教育の不足を實社會に出てから始めて痛感し、卒業後改めて習字を始める者も多くなつた。斯様な次第で社會一般が其必要を認識した爲、翕然として勃興の機運に向つたのである。

## 五、書方教育と情操陶冶

古來書道を精神修養の手段として重んじた事はあまりにも有名である。上は一天萬乘の大君から下は庶民に至るまで、習字は實用以外に魂の糧として尊重



された。今も寫經とて佛典を淨書せしものが多數に現存してゐるが、古くは奈良平安の昔から、白紙に罫を引き墨痕眼もあやに書き記され、或は紺紙に金泥・銀泥等にて淨書されたものが、今猶燦然として輝けるを見ては、當時の人々が如何に書を修養として尊びしかゞ察せられる。

これは現代の兒童に於ても同様で、彼等が白紙に向つて筆を下す時に如何に緊張してゐるか、又紙上に展開されゆく墨蹟に對し、如何に感激し如何に興味を感じてゐるかは、書方教育に従事せる者の常に目撃せる處である。この瞬間こそ彼等の注意力が最も集中せし時で、一度が勝負の書方學習は、實に兒童の學習作業中に於ける意志の力を練る最もよき場面であるともいへるであらう。

かくして書方教育は實用的・功利的方面以外に、意志の陶冶、美觀の養成等、情操教育上の重要性が確認されるのである。

#### 六、書道の勃興と書方手本

最近書道が普及せし結果一般人士の技術を向上させ、其鑑識力をも養ひ得たので、高級なる古法帖によりて啓發された眼は、低級なる書方手本では到底満足出來

なくなつた。即ち晉唐の劇蹟に接しては純古にして規格高きに打たれ、奈良平安の傑作を觀ては清麗溫雅に感じ、かくして書道藝術の幽幻に啓培されし人々は、書方學習第一の要件たる手本の立派さを冀求し、如何にもして書方手本の改正を實現したく感じたのである。

### 第四章 國定書方手本の根本義

#### 一、國定手本の具備すべき要件

さて國定書方手本の理想として、「かくあるべきもの」と思考される條件は、

第一、用筆法が正しく且明瞭で、習ひ易いもの

第二、書風が純正溫雅で品位あり、之を學習する事によりて精神の修養が出来るもの

第三、骨力あり、且運筆速くして實用書に都合よきもの等である。

#### 二、書方手本の基準となるべき諸大家



今これを古人によりて例證せば、漢字では晉の王羲之、隋の智永、唐の褚遂良、歐陽詢、虞世南、我朝の三筆三蹟等を基準とし、平假名では平安朝の藤原行成、紀貫之等を骨子とせねばなるまい。即ち私の考を卒直に申述べると、晉、唐、奈良、平安への復歸であり、古法への還元であるとも云へる。これは一寸考へると時代錯誤で、新時代に處する所以ではあるまいとも思はれるが、實は然らずしてこれこそ後世の俗書を正道に、建直す事となり、書道振興の唯一の大道である。

### 三、學書の常道

總て書道に限らず繪畫、彫刻等の藝術的のものや、倫理、道德、哲學等の規範的のものとは、共同的に、不世出の偉人の業績が人爲を超越して神格を現はし、不滅の光を放つてゐる。書に於ても書聖王羲之を始め、唐以前の先覺者や、我朝に在りても空海を始とし、當時の大手腕家の傑作は、後世人の容易に企及すべからざる境地を開拓してゐるので、我々は先づ其偉業の跡を克明に研究調査し、先人の美點や長所を充分に攝取する處から學書の第一步を踏み出さねばならぬ。此等は何れも滾々として盡きぬ泉の如きもので、汲めば汲む程、後から後からと清新なる情趣が湧出し、

自己の境地の進展につれ、更に眼界の展開するのを感じるものである。

されば學書の方法は、模倣より入りて漸次に自己を形成し、最後に創造の天地に迄到達するのが常道である。

## 第五章 新手本の研究

### 一、筆者と其書風

此度發行された書方手本甲種の筆者は、著者の先師丹羽海鶴翁の高弟にして、常に先輩とし畏友として敬重せる鈴木翠軒氏であるが、氏は唐の四大家（虞世南、歐陽詢、褚遂良、顏真卿）や、我朝の名手僧空海、藤原佐理、嵯峨天皇、紀貫之、僧良寛等の書風を深く研究され、高邁なる抱負を持ち、清新にして雅健なる書風をもつて新興書道界を統率され、現に書方檢定委員である。

乙種手本の筆者高塚竹堂氏は、現代假名書道界の重鎮にして、平安朝の藤原行成、紀貫之等の優麗温雅なる上代假名の研究家として、早くより一家を爲せる大家である。



尙高等科女子用手本の筆者比田井小琴女史は、現代書道界の權威比田井天來翁の令夫人にして、故阪正臣翁に師事して書と歌とを學ばれ、爾來古筆の研究に没頭されて草假名に造詣深く、早くより女流の第一人者として令名高き人である。

## 二、用筆法と結構法

此度發行された書方手本の文字は、何れも吾々が平素考へてゐる様に、古法を基調として揮毫されてある。即ち改定手本は大體唐朝の規格を經とし、和様の溫雅を緯として、用筆は平易を旨とし、簡明に直截に書かれてある。されば學習の第一目標は用筆法の研究にある。

用筆法に就き、世間には色々議論を爲す者があるが、吾々は迷ふ事なく、信ずるままに自由に正しく書の本道を進まねばならぬ。

尙間架結構に就きても、代表的古法帖に依據して、整正穩健な形態に揮毫され、然も兒童の心理に合する様、天真爛漫にして元氣のよい字を書くべく、非常に努力されたのである。

## 三、編纂の趣意

此度發行された小學書方手本尋常科第三學年用下は、甲乙兩種とも第三學年用上に續くもので、更に考へれば、第一學年用から第六學年用下に至る、計十一冊の中の一冊として編纂されたのである。随つてこれが編纂の方針は、三學年前期用の延長であり、もつと廣くいへば全十一冊の編纂方針に基づいてゐるものである。

然し本卷の特質については、三年後期用としての独自の立場があるから、次に文部省圖書監修官各務虎雄氏の談話を其儘掲げて、この卷のために特にめぐらされた、編纂者の周到なる御工案を伺ひ、以つて教材活用の指針としたいと思ふ。

### (一) 分量

新手本の分量は、三年用上までの分と同様に十五頁といふことにした。これは教授の實際に就いて見ると、まだまだ多過ぎるであらうと思ふ。が、この頁數は一年用を編纂した時に既に自ら決つてしまつたもので、今になつてこれを減じてみることも出来ない事情になつてゐるため、多いことを承知の上で、十五頁でとほしたのである。實際教授に當つては、精粗繁簡よろしき指導をするとか、時に多少の省略を試みるとかして、適宜活用してもらひたいものと思つてゐる。そこで今度



の手本と舊手本とを比較してみると、國語書キ方手本の三年用下の方は、三十頁となつてゐるから、これを新手本の體裁になほして數へると十五頁といふことになつて、この方との間には頁數の増減はない。尋常小學書キ方手本になると、三十四頁あるから、新手本はちやうど二頁分だけ減少した勘定になるのである。

以上は教材數の上での比較であるが、字數に就いてみると、これは頁數以上の相違がある。即ち國語書キ方手本は三字詰二行の教材が十五枚で、今度の手本との間に増減はないが、國語書キ方手本と同時に編纂された尋常小學書キ方手本は、五字詰二行のもの十二枚、八字詰二行のものが二枚（尤も内一枚は二行目が七字詰になつてゐる。）八字、十字、十一字、十字詰計四行のものが一枚、十字詰四行のもの一枚といふ工合で、この總字數は二百七十二字になつてゐる。新手本の三字詰二行のもの十五枚計九十字といふのに比べると、正に百八十二字の増減があつて、新手本はこの舊手本の字數の六割六分九厘餘を減少した物になつてゐるのである。かやうに大きな増減のあるのは、畢竟編纂法の相違に由來するものであるから、たと一方からのみこれを觀察して字數が多いとか少いかいふことはできないで

あらうけれども、形に現れたところだけを見ていふと、かやうな結果になつてゐるのである。この尋常小學書キ方手本との相違のことはともかくとして、さて國語書キ方手本とは、紙數に於ても字數に於ても同じであつて、その點だけを見ると、兩者は同じ方針で編纂したもののやうに考へられるかも知れない。けれどもいはゆる分量が同じであるといふことは、私にいはせると偶然の結果であつて、小學書方手本は國語書キ方手本に束縛されるやうなことはなかつた。また將來に於ても束縛されることは、私がこの編纂を進めてゆく以上は絶対に生じないことを斷言し得るのであるが、ともかく新手本は新手本独自の立場から編纂して、しかもかうした暗合をしたものであることを御承知願ひたい。

## (二) 教材

教材としての辭句は、前からの方針に従つて、趣味的なものを多く選んだつもりである。開卷第一「遠足。田島。鳴子。」から卷末の「朝風。若草。小鳥。」に至るまで、何れもこの方針から割出されたものであるといへる。さうして編纂の技術としては、卷頭と卷末に最も主力を注ぎ、中間の「日本一。富士山。」を編纂體系



上の山とし、これらが確乎たる位置を占めるに及んで初めて他の教材が確實性を有するものとして選に入るやうになつたのである。この三教材以外のものは、少し過激になるかも知れないが、いつてみれば、この三教材を活かすためのつなぎにも類するものと見ることができよう。かういふことをいふと、三教材以外のものは、教材としての価値を軽く見てゐるやうで、そこからいろ／＼の誤解が生ずる惧もあらうけれども、要するにこれは編纂の技術上の問題であつて、教材価値を云爲するつもりはないのであるから、何卒この點は間違のないやうに御聞取りを願ひたいと思ふ。

教材を選定するに當つて留意したことの最大なものは、前述したやうに、各教材ともに趣味的内容を多分に包蔵せしめようとしたことである。これはしかし技術の問題ではなくて、編纂者の心の構へ方の問題であるから、茲に詳しく申上げるべきことでもないと思ふのであるが、元來私は書方教育を以て實用主義に立脚する教育をなすべしとする考方には、あまり賛成ができない立場にあるのである。このことは以前にも申述べたことがあつたと記憶するが、初めてこの私の話を讀

んで下さる方もあらうと想像されるので、繰返すやうになるが其點だけをかいつまんでいふと、私は教育、特に技藝科に屬するものの教育は、あまり實用を主にしてなさるべきものではなからうと思つてゐる。書方教育に就いていへば、文字を端正に迅速に書寫する能力を得しめ、陶冶するといふことは、極めて重要なことではあるけれども、一面には書方を通して兒童の藝術的、美的教育をなすことを十分重んずべきものと考へてゐる。従來の書方教育は、この意味からいつて、あまり一方に偏してはゐなかつたか。手本の編纂法にしる、教授法にしる、私には何としても腑に落ちかねるものが多かつたのである。今度の手本は、さういふ従來の實用萬能の教育觀を、一大轉向せしめることをも目的として編纂してゐる。随つて表面的に見る時は、従來のものと同じ變改があるだけに、新手本のねらひ所の不明な方があるかも知れないと思ふのである。私は實用主義を排斥しない。實用にならぬやうな書方教育は、教育としての価値は殆どないといふも過言ではないといへようと思ふ。けれども、私自身の考では、實用といふことは、書方教育を進めるうちに自然と附いて來るものであらうと信ずる。美的藝術的に進めてゆくうち



に、それがそのまゝでやがて實用教育になると信じてゐる。たゞその際には、編纂法に於て、且用筆法などに於て、この目的を達成するに都合のよいものを選ぶべきは勿論であるけれども、さうしてそのためには、今の編纂法や用筆法などは、十分私のこの企圖を達成するに不都合のものではないと確信してゐるのである。手本の表面だけを見ないで、よく裏面をも見ていたゞきたいと思ふ。

思はずも、こんな話で暇をつぶしてしまつたが、私のいはうとする所がこれで盡くされたといふわけではない。ほんの序論みたいなものであるが、まづ大ざつばに見當だけはつけて載ける程度に申述べたつもりである。が、念のためにもう一言述べると、澄神靜慮具在筆端といふやうに、字を書くには澄神靜慮といふことが必須の要件である。随つて書方教育によつて澄神靜慮の教育も出來ようといふのである。この精神教育は美的藝術的教育と互に聯關するところがあるが、書方教育として、これは忽にし難い問題であると思ふ。人間をつくるといふ上から、手本の編纂に當つては、これも極めて重大な問題である。尤も前述したやうに、美的藝術的教育とこの精神教育とは、別箇の存在でなくて同時的に顧慮せらるべきも

のであり、そのことの實質から見ても互に圓融無碍のものであるけれども、今は話の都合上、二つに分けて述べたのである。

さて新手本の教材は、かうした精神を背景として選定したものである。もとより、必ずしも教材の選定といはず、分量の決定にも、字體の決定にも、書風の決定にも、すべての分野に互る問題であることはいふまでもない。今は當面の問題として教材との關係のみに就いていふのである。そこで具體的に教材の内容に言及すると、これは三年上までと同じことであり、この後のものも同じになるはずであるが、小學國語讀本に既出の文字を選んで、それを組合せて教材をこしらへたのである。それゆゑ新手本に出た文字乃至その読み方は、共に讀本既出のものばかりである。一年用に「上下天人」といふのがある。これも、讀本既出の文字であり、よみ方であるから、それを念頭において見れば、讀點や句點がなくても「うへ。した。てん。ひと。」と讀むべきものであつて、「上下。天人。」などと續けてよむべきものでないことは明瞭である。この方針で今度のも教材を選んだのである。尤も例へば「鳴子」といふやうなのは、「鳴」も「子」も讀本で習つてはゐても、「なくこ」とよ



むか「なるこ」とよむかは、兒童には直ちに理會されなないかも知れない。随つてかういふ場合には、教授者に於て十分指導していたゞかなければならぬことは論を俟たぬが。次に文字は、可及的に書易く習ひ易いものから始めることを念願とした。たゞ辭句の關係でどうしてもこの理想のとほりにゆかなかつたものもないではないが、原則としては、かういふ意圖の下に選定排列したつもりである。次に半紙に書く折の、字と字との調和といふことも考へた。あまりに不調和なものは書いても美しくならない。如何に巧に一字々々は書けても、見た眼に快い感じを與へない。さういふ惧のあるものは、なるべく採らないやうに努力したつもりである。次に一教材の中に、同じ文字が二度は出ないやうに努力した。これは書くにも見るにも都合がよくないからである。しかも一年以來既に習つた文字は、特殊のものを除いては、繰返し提出することも避けたつもりである。その上に、内容の方からいへば、清書として眺めるにも感じのよい。少くも悪くない語句でなければならぬ。兒童の十分に興味をもち得る、十分にといかなくとも或程度には、理會し得る語句でなければならぬ。また季節からいつても、時外れでないもの

でなければならぬ。その上、書學の立場からいつて、點畫などのことも考慮しなければならぬ。といふやうなことを考へて選定したつもりである。これは編纂としてはなかく、容易の業ではないので、私はこの教材の選擇には、いつも身も細る思をしてゐるのである。今も四年用上の教材の選定で、日夜苦しんでゐる最中である。かやうにして各方面へ眼を配つた上で、なほ忘れてならぬことは、手本一冊として、教材の上で一つの纏りがなければならぬことである。纏りといつても、たゞ一色にぬられるやうなものといふのではない。變化を多く見せて、しかもそれらを一貫して何處とはなしに、編纂者の氣持が流露するものでなければならぬのである。支離滅裂な教材は、いくら集めてみたところで、手本として上乘のものが出来るはずはないと信ずるからである。かういふ具體的な問題を持出すことになる、と、まだくゝいろゝある。が、あまり細くなるのみならず、徒らに私の苦心談をするやうにもなるので、この程度で止めておくが、教授に當られる方々は、以上申上げたやうな用意がしてあることを御含みの上で、教場に臨んでいたゞきたい。さうすれば、眼には見えない、口ではいへない點で、書方教育の上に何等かの影響も



あらうと思ふのである。そんな意味でながくと違べてみた。

教材としての文字は、三年用上までとちがつて、今度は漢字を主體とした。一年と二年の前期とを片假名、二年の後期と三年の前期とを平假名を本體として來たのであるから、もうこの邊で漢字を本體とするのが至當と信じたからである。この方針はなほ四年へも持越すつもりである。尤も漢字を主體とするといつても、漢字ばかりでは十分と思へないので、間々漢字と平假名との交つたものを載せてこれによつて漢字と平假名との調和を練習させることにした。さうして、本卷全體としては、字數九十字の中、漢字は七十二字とし、残りの十八字を平假名としたのであり、計十五枚の教材の中、漢字のみものは八教材、残り七教材を平假名まじりとしたのである。まづ三年下あたりでは、この程度にするのが穩當だらうと考へたからである。なほ各教材は、漢字のみものと、平假名まじりのものと、配合に意を用ゐた。即ち最初の二教材が漢字のみもの、次の四教材が平假名まじりのもの、次の四教材が漢字のみもの、次の三教材が平假名まじりのもの、さうして最後の二教材が漢字のみものといふやうにして、漢字のみものと平假名まじ

りのものとの交替には、學習上乃至は教授上の都合といふことを考へたつもりである。實際教授に當られる方々が、この事情を含んでゐたいとせば、何かの御便宜にはならうと思ふ。

文字の大きさは、三年用上までと同様にした。即ち字詰からいつて三字詰、行數は二行といふことで、いつてみれば大字主義といふものが、なほ繼續されて來てゐるのである。尋常小學書き方手本が、三年用下に至つて五字詰二行を本體とし、時に中字・細字を加へたことは、深い理由のあつたことであらうけれども、今度の手本では到底採り得ないことであつた。私は三年や四年ぐらゐの兒童には、まだ大字を精習せしめなければ、書方の基礎も確立しないであらうと信じてゐるのである。

用筆は三年用上までと異なるところは殆どないと思ふ。けれども、文字として眼に映するところは、從來のものとは必ずしも同じでない。そこには成長しゆくものの姿がある。一年用に見られたものと今度のものとの間には、既に著しい相違があると思ふ。これは、一年は一年らしく、三年は三年らしくといふ立場に立つて



あるところから、自然に導かれて来たことで、四年五年と進むにつれて、更に益々この傾向は發展してゆくであらう。教授に當る方々は、かうした點にも注意して、學年相當の指導をするやうに努められたいものである。

次に教材を選んだ時の私の心持を述べてみよう。それには卷頭から順を逐ふのが好都合である。

一、「遠足。田。島。鳴子。」——前期用の終の方に、「秋ばれ波の音」といふのがあつた。また「十五夜枝まめ」といふのがあつた。この「遠足云々」はその前期用の教材の氣持を受けたものである。前期用のは、何をいふにもまだ秋も早い頃の教材であるから、何處かに季節の動きとでもいふか、一種の動搖する氣趣が含まれてゐた。本卷のものは、時は既に十月半ば、秋も十分深まつて、見上げる空も見渡す野邊も、靜かに落ちついて、ひそくと秋の呼吸をしてゐる頃であるから、その自然の情感にふさはしいやうに、秋の半ばの感じのどつしりと來るものを選んだのである。もとより田、島、鳴子は、遠足に出た者の眼や耳に訴へて感ぜられるものであるが、さうした景物も、もう秋の深さの中に融合してゐるもので、遠足といふ學校行

事も、深み來た秋と密接なつながりがあつて、氣持の上には相當のゆとりが出來てゐるものと私には見られる。そんなところから、この教材が、十月の季節感、十月の兒童の情感の、十分に現はれたものとして浮んで來たのである。尤も、この場合、「田、島」を「田、畑」としたかつた。が、「畑」の字が讀本にまだ出てゐないので、不満足ながら「田、島」を以て代へたのである。

二、「町。村。家。國。男。女。」——多少公民教材めいた色彩をもつたもので、編纂の氣持としては、しかし前課の遠足から續くものである。遠足に出て印象に残つた町や村や家やの面影、それから發展して國となり、男となり、女となつたのである。しかもこの教材には、いはゆる實用的な氣持があつて、さうしたものを欲する人々への思ひやりが含まれてあるつもりである。

三、「木の葉が散る。」——もう十一月頃にならう、その頃の自然の情景である。逝く秋の感じは、兒童にははつきりわかるまいけれども、散る木の葉を子供心に喜ぶことはあらう。殊にそれが楓だとか銀杏であるとかする時には、子供ながらも自然の美しさは感ぜられるであらう。さうしてさういふ時の兒童の心情は、また



一種特別のものがあるはずである。これは、さうした兒童の環境、兒童の心情を考へて選んだものと見ていたゞきたい。

四、「麥まき。取入れ。」——初冬の農村風景、農村情趣である。木の葉が散つて野山も静かに、しかも何處かに嚴然とした氣分の漂ふやうになつた時、そこに展開される農村の點景である。兒童の心も、自然の推移とともに遷ることと思ふ。その時の兒童の心情にわり込んでみたつもりであるが、また一面には麥まきとか取入れとかいふことは、農村の兒童には忙しい、しかし朗らかな情感の湧くものと思はれるために採つたのである。この場合、實際には「取入れ。麥まき。」とすべきであるかも知れない。その方が行事としても自然の順序である。けれども、「麥まき」を次の行に移す時は、これを半紙に書いた時のつり合がとりにくくならう「取入れ」を取へて次行にまはしたのは、この故である。

五、「落ちばを拾ふ。」——前課の「麥まき。取入れ。」から、すぐ思ひ浮んだものは稲を刈りとつた跡の田の有様である。其處に落穂のあることを眼に浮べて選んだ。しかも、これは、私個人のことであるから、一般的の問題にしてもらふことは願

下げにしたいが、私は、この時ミレーの落穂拾ひの畫を想つたのである。前課に同じ人の晩鐘の畫の感じがあつたところから、かうしたことにもなつたのであらうと思つてゐる。これは私一人のこと。農村兒童にとつては、落穂拾ひは、また恐らく印象の深いことと想像せられる。落穂を拾ふといふ、そこには農村兒童の生活と密接なものがあり、感興もあることと思つたのである。

六、「屋根。庭。はつ霜。」——初冬の情景である。屋根も庭も一面に白く霜が降りた。さうしてその霜は、この冬初めてのものであつたといふ、初霜の朝の眺めであるが、この裏には、初霜を見出した時の喜や驚きの感じを織込めたつもりである。

七、「商人。賣出。買物。」——年末大賣出を想像して選んだ。今までが農村的なもの乃至は自然の風景といふやうなものが續いたために、やゝ都會的なもの、人事的なものを採つたのである。こゝには歳末のあわたしい世の人心を映したつもりである。

八、「日本一。富士山。」——書初教材のつもりで、新年嘉儀のめでたいものを選



んだ。文字は比較的易しいものであらう。これは教授者の指導が少くとも、ともかく児童の力だけでも相當には書得ることを目標とした。

九、「冬休。竹馬。雪兔。」——冬休に於ける児童の遊びの中から取材した。竹馬は男兒、雪兔は主として女兒の遊びのつもりである。

十、「都會。工場。黒煙。」——工業日本の姿を髣髴せしめようとしたもの。都會も工場も何處のものでもかまはぬが、これを選んだ時には、私は小倉、八幡あたり、あの物凄い活動が思ひ浮んでゐたのである。小倉とか八幡とかいふことは、私一人の問題であるから、教室で取扱つてもらふことは望まないが、ともかく、工業日本の躍進的な、力強い感じを出したかつたのである。

十一、「文字。読む。書く。」——これは「む」をもう一度練習させることを第一において選んだものと見て差支へない。

十二、「梅ばち。天神様。」——二月の教材のつもりである。前課の「文字云々」から天神様に思ひ及んだもので、梅花の馥郁たるかをりも、漂はせたつもりである。

十三、「ひな祭。桃。白酒。」——いふまでもなく三月の節供を目あてにしたも

ので、女子教材のつもりである。桃や白酒は、雑壇にそなへるものであるから、この場面は、女の子が雛をかざつて嬉戯してゐる情景を描いたものと見ていたゞければ好都合である。

十四、「戦争。軍旗。大砲。」——前課に對して男兒教材のつもりである。三月十日前後に配當せられることを豫想した。勿論、これは戦場の光景として、軍旗が進み、大砲が盛に打出されてゐるやうな、勇敢な趣を想像しつゝ選んだのであつた。

十五、「朝風。若草。小鳥。」——初春の屋外風景で、長い冬を脱して漸く春を迎へ、さうして將に四年に進まうとする頃の児童の、爽やかな希望に満ちた情趣に適應させるつもりで採つた。

以上、概略を述べたに過ぎないが、かうした話も或は教授上の御参考にはならうと思つてゐるのである。

なほ教材に關聯して、一教材毎に點畫の上で考慮したのも述べるべきであるが、あまり長くなるから、これは省略することにする。教授者は一字々々を、三年用上までの分と照合してみても、どの點畫を主として授くべきかを御判断願ひたい。



(三) 字 體

これも教材の一部分にはならうから、特に切離して申上げるのも如何かと思ふが、漢字の字體は、例によつて書寫體をかなり取入れた。今、讀本所載のものを字典體として見て、それと手本の字體とを比較すると、甲種に於ては、遠田島鳴男、木葉屋根、庭霜、商賣、買日、富休、雪都會場、黒祭、讀書、梅神、様桃、白、酒、戰軍、旗砲、朝草、鳥の如きは、讀本とは多かれ少かれ趣を異にするものであり、就中、遠鳴、葉屋、庭商、雪都會場、黒煙、讀書、神酒、朝鳥などを著しいものがある。乙種に於ては、遠鳴、葉屋、雪都會場、黒祭、讀神、酒朝、鳥などを著しいものとして、他に田島男、木取根、霜賣、買日本、富休、書梅、様桃、白、戰軍、旗砲、草なども、讀本とは異なるところのあるものである。けだし讀本は讀む字であつて、書くことを本體とするものでない。それに反して、手本の文字は、書くことを本體とするものである。長い年月をかけて、次第に書寫に便利なものに變化發達して來たものである。字典體に依據しようとする讀本の字體と、書寫を目的として、書寫體に依據すべき手本の字體とが、かうした相違を見たのも當然のことといはなければならぬ。かやうな書寫體を手本に採用することは、小學書方手

本の根本方針で、學年の進むにつれて漸次實施して來たもので、これは上學年に至るに従つて、更に／＼本來の面目を發揮するやうにしてゆく豫定である。この書字體を手本に採入れることに就いて、從來は讀本のみを教授する人々の方面から、とかく批難されたのであつたが、近來はさうした批難も跡を絶つに至つた。當然のことではあるけれども、かやうな情態になつて來たことは、文字の發達といふ點からいつても、喜びに堪へないところである。たゞ頃日某師範學校の附屬小學校から、提出された意見報告書の中に、字體のみか字形までも、讀本と手本と一致させよと述べ、しかもそれが讀本を本體とせよとあつたことは、誠に意外とすべきで、むしろその陋見は噴飯に價するものがある。さういふ意見に従ふならば、手本は不要にならう。讀本の文字を書く筆耕に、一つの字母を書かせて、それを寫眞で擴大したり縮小したりして、或は讀本に用ゐ、或は手本に用ゐたらよいわけである。昭和十年の教育界に、さやうな意見のあることを思へば、しかもそれが附屬小學校の名に於て、文部省に提出された公文書に示されたところであることを思へば、まだ／＼わが書學も、十分行渡つてゐないことを痛感しなければならぬのである。



## 四、手本の採用と其取扱ひについて

新手本は甲乙二種發行されてゐて採用は縣知事が採定したものについて、學校長が自由に決定出来る。文部省が始めて二種の手本を發行したのは、明治の末期から大正のなかば迄であつた。それ以後は今度が始めてある。斯様に二種作る理由は、「書」に色々な流派があり、また「書」に對して好き嫌ひがあるからで、甲種の筆者は漢字を基礎とし、乙種の筆者は平假名を基礎として、それ／＼一家を爲す人である。されば甲種と乙種とはかなり異なつてゐるから、教授者はこの書風の由つて來るところを明にして、手本の取扱に留意せねばならぬ。

處が近頃兎角耳にする事は、甲種手本の用筆法がよくわからないといふ事である。じつと手本を見つめてをれば、用筆がどうなつてゐるかといふやうなことは、大體わかる筈であるけれども、そこに中鋒説がからまる爲に、恐らくそこから天下の迷が起つてゐるのではないかと思ふ。中鋒といふことを字義どほりに解釋して、あらゆる點畫も中鋒であるべきものといふやうに、極端に考へるべき性質のもではなからうと思ふ。さういふ極端な解釋をすることが、甲種の用筆法をわか

らなくする原因ではあるまいか。

尙古來書法として唱へられた問題には、中鋒の他に藏鋒と露鋒とがあるが、これらの説明にも異りたる解釋があるから、書法の處に譲る事とする。何にしてもい／＼な議論があつても、その世論に惑ふことなく、自己の信念を確かなものにしておいて戴きたい。

次に文部省の手本を使用してゐない人があるといふ事であるが、書方手本は國定教科書であるから、小學校令施行規則第五十三條の規定によつて、小學校の書方教科書は、國定以外のものを使用し得ないのである。(無論師範學校附屬の如き例外はある)ところが中には、徒に自己の好むところに従つて、民間發行のいかゞはしいものを、練習帳其の他の名目によつて兒童に購入せしめ、却つて國定のもので使用しない教授者、乃至校長もかなりあるといふ事である。その著しい例は硬筆手本を使用させて、これを國定のものに代へてゐることである。これはおほよそ施行規則に違反するものといつても過言ではなさうである。

國定制度の精神や、施行規則の精神からいふと、今日に於ては、尋常一年後期から



は書方としては必ず毛筆を課すべきものであり、その毛筆手本は、教授者が肉筆を  
與へる以外には、必ず文部省發行のものを使用せしめなければならぬ筈である。  
尙新手本の取扱ひにつき、私が平素考へてゐる事は、改定手本の文字は古法に準  
據してゐる爲、用筆法が純古で、結體が整然とし韻致が高いので、一寸兒童には寄り  
着き難い感がする事である。(立派な手本になる程さうなるであらうが)之に對  
する態度として、兒童には一度に高きを求めず、又多きを望まぬ事である。手本の  
文字は筆者が多年書道に精進して、練磨の結果到達されし結晶であるから、これを  
其通り兒童に要求する事は不可能であらう。指導者は常に一段一段と高く導き、  
一歩づゝ前に進めるべく努力せねばならぬ。これを若し一度に手本通りの字を  
書かせようなどとすると、角を矯めて牛を殺す事となり、兒童に無理な注文の結果は、  
書方を嫌ふ様になるであらう。心すべき事である。此事は今度の平假名指導に  
於て特に留意したい。又教材にしても、全部指導せねばならぬなどと、窮屈に考へ  
ないで、適宜取捨し、與へられた時間を最も有効にせねばならぬ。

## 五、餘言

申述べたいことはまだ澤山にある。けれども既に相當贅言を費したのである  
から、今はこれ以上多くいふことを避けたい。さうして最後に一言附添へておき  
たいことは、讀本の教授者が、案外書方に疎いことに就いてである。讀本は讀本、手  
本は手本、私は私人は人といふやうな態度で、手本の編纂趣意とか書といふものが  
如何なる本質的的使命を有するものであるかに關する、知見も認識も不十分、狹隘な  
ものの多いことである。文部省として、讀本の文字も認め、手本の文字も認め、字典  
體も認め、書寫體も認めてゐる以上は、この文部省の態度なり方針なりに、十分の理  
會を進めてもらひたいのである。さうして十分の用意をもつて、教室に臨んでも  
らひたいのである。私自身は手本を編纂してゐる。同時に讀本の編纂にも與つ  
てゐる。その私から見ると、世間一般の讀本教授者の態度に遺憾が多いのである。  
なほ、もう一つ附加へたいことは、手本の態度を高踏的とか藝術的とかいふ、一面  
に於て批難しようとする人々が、今でも多少はあるかも知れないと思ふのである  
が、一體に私は文部省で出すものは、俗論に煩はされてはならぬと信じてゐる。俗論  
を超越して、世俗よりも一段と高い所にあつて、指導的態度を持続しなければなら



ぬものと信じてゐる。手本の編纂に於ても、常に世間より一步先んじたところを歩くことを忘れてはゐないつもりである。今日の教育といふよりは、明日の教育を目ざして進んでゐるつもりである。今日批難する人々も、明日は恐らく同感し、賛同して下さるにちがひないことを確信してゐるのである。

## 第六章 書方指導者としての教養

近時書道の復興に伴ひて、一般に鑑識技術が向上し、殊に書方手本の改定によりて、其韻致を高め程度を上げたから、之が指導の任に當る者は更に一段の修養を要する事となつた。

### 一、書方教育不振の原因

凡そ何れの教科でも教壇に立つ以上は、其科に對して相當な見識を持ち、其教材に對して自信を持つて臨まねばならぬ。若し之を缺けば教師としての權威を失ふと共に、嚴密な意味に於ける資格をも缺く事となるので、各學科とも平素から、教材の調査は勿論、指導方法、學習過程等に就き、充分な研究を積み又準備を怠らない

筈であるが、其中には著しい差異は無いだらうか。赤裸々に申述べると僅少數の特志家を除き、一般には書方科に對し必要な研究が、他教科同様に行はれてゐるか、どうか私は之に大なる疑問を抱く者である。

勿論教授者其人の趣味に相違もあり、各科研究の程度に逕庭ある事は認めねばならぬが、國民教育者として全人陶冶の立前からすれば、其差は厚薄の程度にして必して等閑に附すなどいふ事は許さるべきでない。即ち書方科には手本があるから見て書かせさへすればよい、誰でも指導出来ると思ひ、平素から教材に對し研究するでも無く、練習するでも無く、教授法を考へるでも無く、甚だしきは骨休めの時間位に考へてゐる者がありはしなかつたかといふ事である。若し斯様な者があつたら、それは本科に對する態度の不眞面目を物語る事となり、其成績の不振は素より國民教育指導者として恥づべき事ではあるまいか。私は一般に從來の書方成績が不振であつた原因の一は、斯様な處にあるのでは無かつたかと考へてゐる。

## 二、書方科研究の必要



顧ふに明治以前の舊教育では一般に習字に力を注いだ爲、學問をしたと稱する者は一様に書に對する練磨の功を積み、隨つて自信もあつたので、此等の人々は書方の指導に特別の研究を要しなかつたであらうが、明治以後の教育では、書方はホンの其一部分に過ぎなくなり、中等教育、専門教育を卒へた者でも、書に對する素養は特殊の者を除き、一般には低下して來たので、指導者は豫め相當の準備を要する事となつた。

殊に技能科の性質を多分に持ち、特殊な手腕を要するので、本科に於ては他教科に劣らぬ努力を拂はねば、所期の目的を達成する事は到底望み得ないのである。然し其反面教師の努力は靦面に酬ひられ、熱心で優秀な指導者が受持てば、兒童の成績が顯著な進歩を遂げる事は周知の事實である。斯様な立場からすれば、本科も亦圖畫、手工、唱歌乃至は體操等と同様、特殊な手腕を有する専科教員を以つて當らしめるのが最も有効な方法であるともいへる。

### 三、古法帖の研究

殊に改正手本は書風が古法帖を背景とした高級なものであるから、相當な準備

を怠るならば其指導は困難であらう。従つて手本の文字をよく研究せんとするには、勢其根底を爲す先覺者の傑作を學ばねばならぬ。反面から考へれば、書方手本のみを學んだのでは、何時まで経つてもそれ以上にはられぬ。更に其手本の手本たる古法帖を研究すれば、筆者と兄弟になれるわけで、更に一段の進境を見る事となるのである。尙古來の名蹟を研究すれば、自己の手腕を高めるのみならず、鑑識力をも養ふ事ともなるから、代表的ものに就いては出来るだけ目を通す様にしたいものである。尙一步進めて書道史の一般や書論や、代表的先哲の逸話等を調べれば、自己の學識を豊富にし、直接間接、教授上裨益する處が大である。

### 四、學書の方法

世間に食はず嫌ひといふ事があるが、やつてみれば大抵のものは面白くなるものである。ここに字の下手な人があつて、習字が嫌ひであるとしても、少し押しして勉強すれば、其内に上手になり、興味も出て好きになるものである。

人の趣味には色々あるが、習字などは古來士君子の技とされてゐて高尙であり、實用にも役立つ、そして弊害もないから皆さんにお奨めしたい。殊に相手が手本



であるから自分の都合で何時でも出来、又相手の感情を害する様な事のない清い遊びである。

學書の方法は先づよい師を選ぶ事だ。そして師の風を會得する迄はあまり傍見をせぬがよい。練習は少し宛でも毎日がよい。これ程堅實で捷徑はない。

師の風を會得したら古法帖に入るがよい。實をいふと私は可なり長く現代人の書は師匠(海鶴先生)以外は見ぬ事にしてゐた。そして支那なら唐以前、日本なら平安朝のものばかり觀てゐた。其爲現代にどんな書家が居るのか一向知らないで過した。これの善悪は別として私の實際はそうであつた。

古法帖に興味が出るとうろしめたものだ。際限なく高く深いから、生涯の仕事となり楽しみとなる。丁度高い山に登る様なもので、自己の手腕が進めば、同時に鑑識力が高くなつて眼界が廣くなる。千古の傑作を見ても始めは一向上手に見えぬが、自分の力が進むにつれだん／＼其妙味が分つて来る。

練習は用筆法の研究から始めたい。そしてよく習ふ事、よく觀る事、よく聽く事が上述の秘訣である。

手本を習ふにも始は自己を空うしてかゝらねばならぬが、或程度迄進めば自己の信念で押通してよい。然しこゝまで來るのは容易ではない。然しこの邊まで來たら書道程面白いものはなくなるだらう。

目と手と耳の根底を養ふ方法として書道史が必要であるから第七章に略述した次第である。

### 五、手本とすべき代表的法帖

楷書 孟法師碑 褚遂良書

雁塔聖教序碑 同

九成宮碑 歐陽詢書

皇甫君碑 同

孔子廟堂碑 虞世南書

行書 蘭亭序 王羲之書

集字聖教序 同

褚遂良臨書

行書 千字文 褚遂良書



草書 寶墨軒千字本 智永書

書譜 孫過庭書

十七帖 王羲之書

平假名 寸松庵色紙 紀貫之書

高野切 同

御物朗詠集 藤原行成書

## 第七章 書道史概説

### 第一節 支那書道史

#### 一、太古時代

世界最古の文明が發祥した支那黄河の流域には、今から約五千年前、漢族が西北から移住して苗族を驅逐し、土着して次第に發展した。この時最も勢力あり徳望

ありしものが天子となつた。即三皇（伏羲、神農、黃帝）五帝（少昊、顓頊、帝嚳、唐堯、虞舜）である。

この頃黃帝の史官蒼頡は神明に通じ、仰いで星辰を觀俯して龜文、鳥跡の象を察し、博く衆美を采つて始めて文字を作つたといふ。これが古文である。此時天粟を雨ふらし、鬼夜哭すといつて大變であつた事が想像される。

古文は漆にて竹簡に書かれたから、其狀おたまじやくしに似てゐるので、文字の事を蝌蚪、或は鳥跡ともいはれ、其後千數百年間周の宣王の頃まで行はれたが、現存せるものは無い。

尙後人（後漢の許慎）が文字成立の方法を研究して、象形、指事、形勢、會意、轉注、假借の六義（一名六書）を説明してゐる。

#### 二、夏殷周時代

此時代の終りには政治、教育も稍整ひ、小學にては日用の事を授け、大學にては己を修め人を治める道を教へ、禮樂、射御、書數の六藝を授けたといはれてゐる。

この頃の卜に用ひられた文字が龜甲獸骨文として、近頃殷の古都河南省から澤



(文古) 文骨獸



山發掘された。

總版文に次いでは鐘鼎等に残る古銅器の銘が古い。これらも追々土中から發見されてゐる。

周の宣王の時(約二千七百年前)大史の籀シュウが古文を損益して大篆十五篇を著した。北京の孔子廟に在つた石鼓は彼の書といはれてゐる。

(篆大) 文篆石



### 三、秦時代

周亡びて秦起り、始皇帝天下を統一するに及び、書道の上にも大變化を來した。即丞相李斯は大篆を省略して小篆を作り、始皇が名山大川に巡遊せし紀念碑に書した。其中秦山石碑は現存してゐる。

此頃程趨なる者罪を得て獄中に在りしが、其十年間に大、小篆を改造して書寫に便なる隸書三千字を作つて上つた。始皇帝大いに喜び獄中の徒隸(小役人)に用ひさせた。



(篆小) 碑石山秦

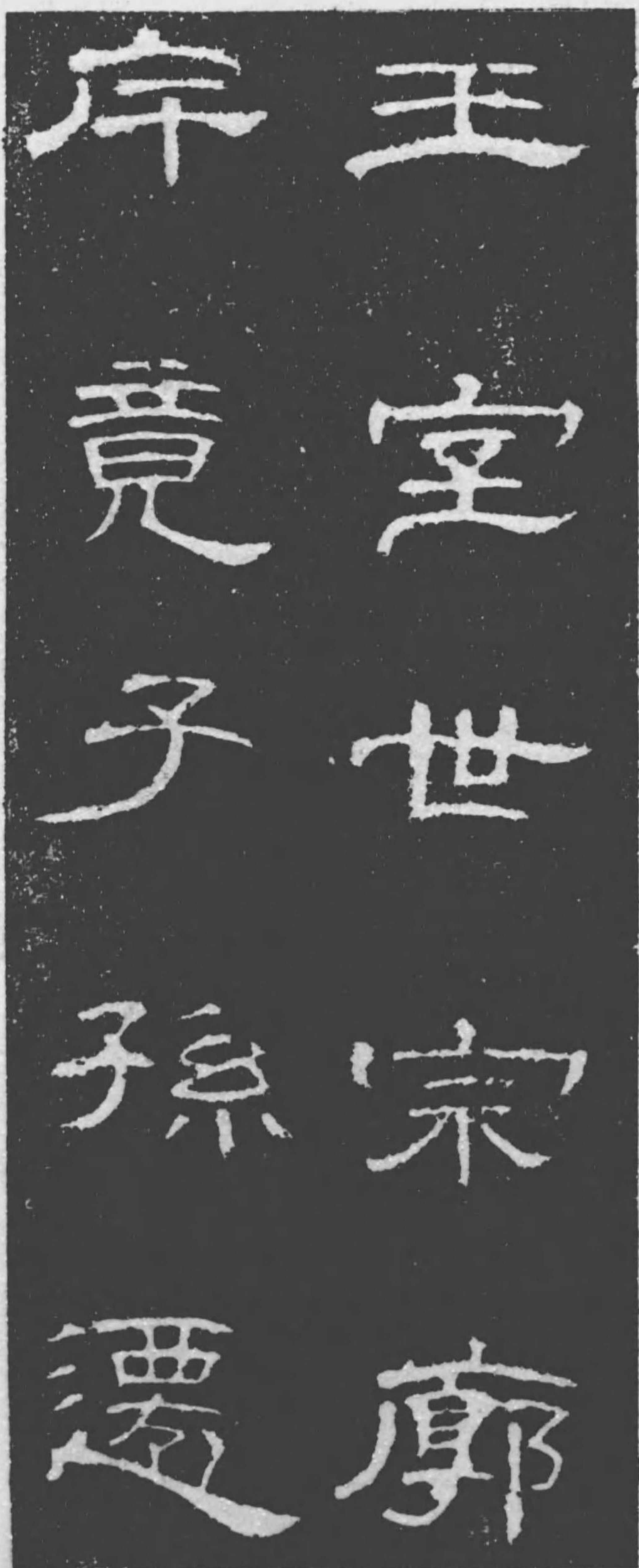


又王次仲は草書の源たる八分を創作したといはれてゐるが、共に其書は現存してゐない。秦は僅十五年にして滅んだけれども、書道史上には一新紀元を劃した大切な時代である。

四、漢時代

漢時代とは西漢(前漢)東漢(後漢)を通じての四百二十六年間で、隸書の全盛時代である。殊に後漢二百年は建碑盛にして、現存のものでも百に餘り、中でも石門

(書隸) 碑全曹



頌乙瑛碑、禮器碑、孔宙碑、史晨碑、西狹頌曹全碑、張遷碑等は代表的ものである。

この頃から字形が現代の楷書に著しく接近して來た。

又前漢の元帝の世に史游が速書に便な章草を案出した。この章草に巧な者に後漢の張芝があるが、現代の草書は張芝から出てゐるといはれてゐる。



張芝書

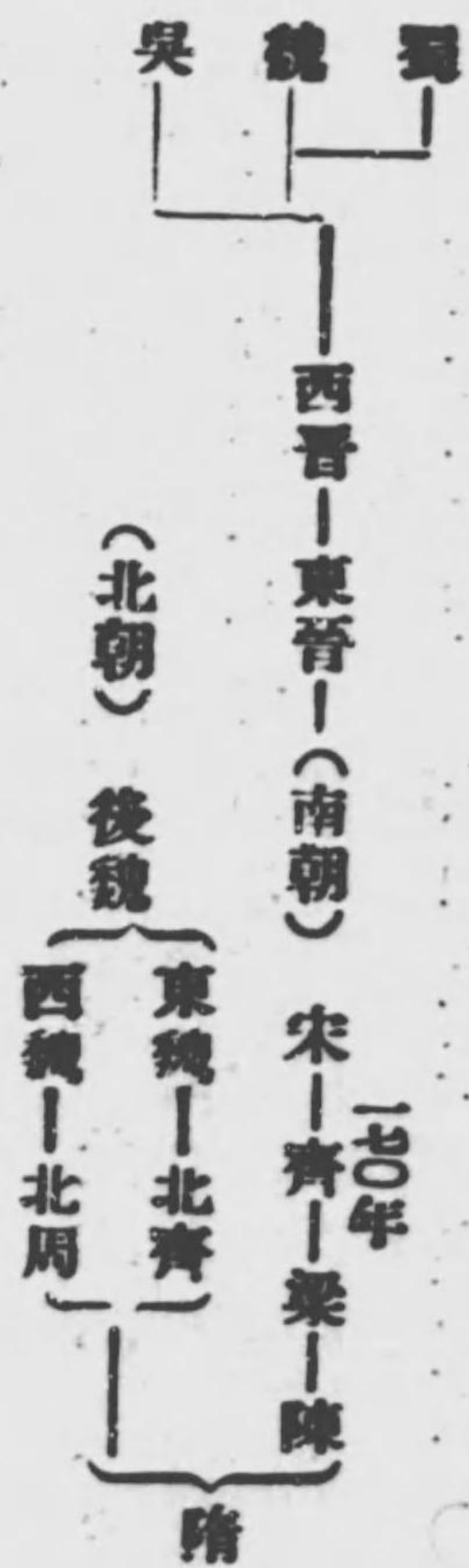
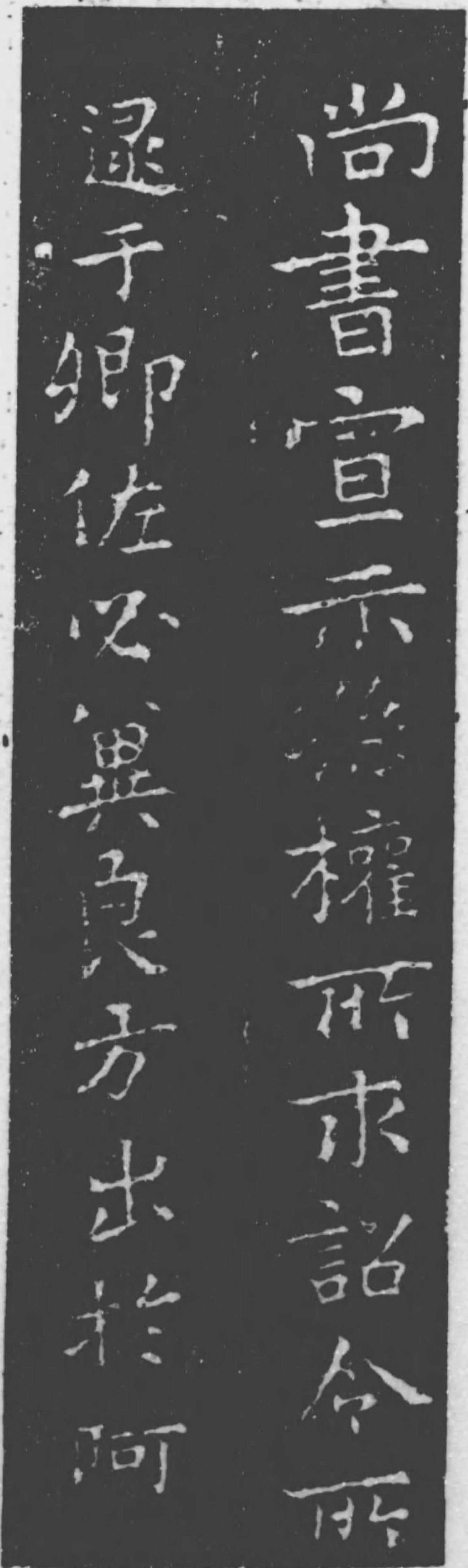


五、三國及六朝時代

この時代は戦亂絶えぬ時代であつたが、其間にありて獨り書道は異常な發達をなし、現代の楷行草が大成した時代である。

先づ第一に擧ぐべきは魏の鍾繇である。其書は章程書といはれ、宣示帖、鷹季直表等は、後世覆刻に覆刻を重ねたので、どの程度迄彼の眞面目を發揮してゐるか不明なれども、兎に角品位と情趣とありて楷書の基を爲すものである。

鍾繇書宣示表



漢末蔡邕に發した書法は鍾繇、衛瓘、索靖、衛夫人等の大家を経て、この時代の東晉になると書聖王羲之が現れた。當時書は帝王、士大夫必修の學問であつたので、朝



野擧げて隆盛に赴き、殊に南朝に於ては優雅にして秀麗なる書道藝術を展開し、其品位其妙趣實に古今獨歩の觀がある。

王羲之の子王獻之も亦父に似て書を善くし、併稱して二王といふ。其他王氏の一族には多數の名手を輩出した。此等の人々が書いたのは多く行草書にして、法帖となりて今も傳來してゐる。

蘭亭序 晉王羲之書 永和九年 皇紀一〇一三年 仁徳帝の頃

永和九年暮春の初(三月三日)、王羲之は當時の文人墨客四十餘人と、會稽山陰の蘭亭に會して、清遊を試み、曲水の宴を張り、詩を吟じて、其序を羲之自ら書いた。山水の佳境に在りし爲か、興湧いて、神品と稱せらる、傑作が出来た。右軍も生涯これ以上のものが書けなかつたので、自ら極愛し子孫に傳へたが、七世の孫智永を経て、其弟子辨才之を梁上に秘藏せしを、唐太宗垂涎三尺、蕭翼を遣はし謀を以て手に入れた。太宗常に座右に置いて愛玩し、死に臨み命じて昭陵に共葬せしめた。今あるものは當時の大家歐陽詢、褚遂良等が臨摹せしものにして、開皇本、定武本、張金界奴本、神龍半印本、顧井本、賜藩姫本、珍袖本等數十本あり、行書の代表的劇蹟である。

王羲之書 蘭亭序

永和九年 歲在癸丑暮  
子會稽山陰之蘭亭  
也羣賢畢至少長咸



集字聖教序 王羲之書

唐の僧懷仁が、則天武后の命により、二十年の歳月を費して、王羲之の行書を其尺牘中より集字せしものにして、右軍の神彩を盡ふに足るものである。只集字せし爲連続に不自然の虞あれども、蘭亭と共に、行書の最高級のものであらう。

王羲之書 集字聖教序



王羲之書 九月十七日帖

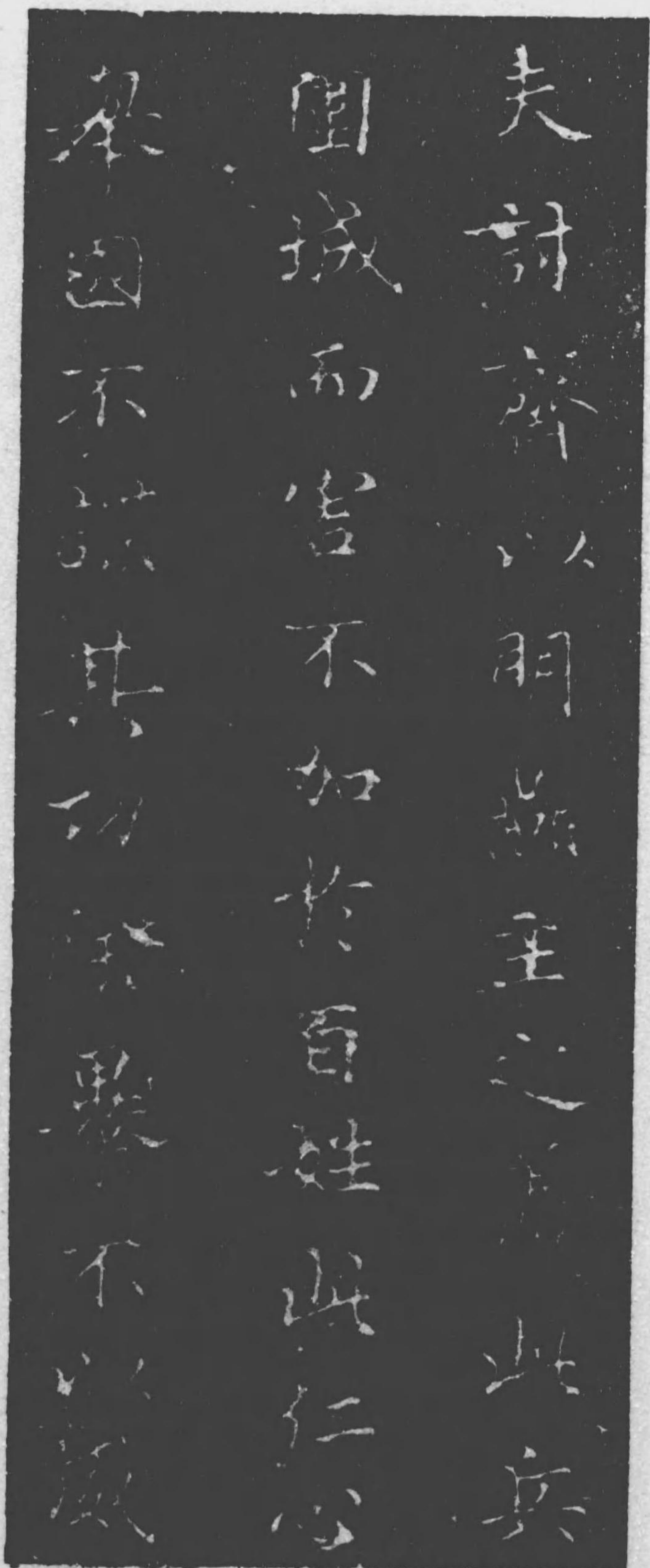
九月十七日 羲之報且因  
孔侍中信書志必至不  
る領軍疾後心

右は唐の頃羲之の眞蹟の上に紙を當て、籠字にとり、中に墨を入れた所謂雙鉤填墨で、精妙なる書聖の用筆が實によく現れてゐる。即眞筆が一枚も現存しない今日では、最高級の羲之の手本である。日下部鳴鶴翁は硝子に入れて書齋に掲げ、日夕觀賞して居られたといふ事である。

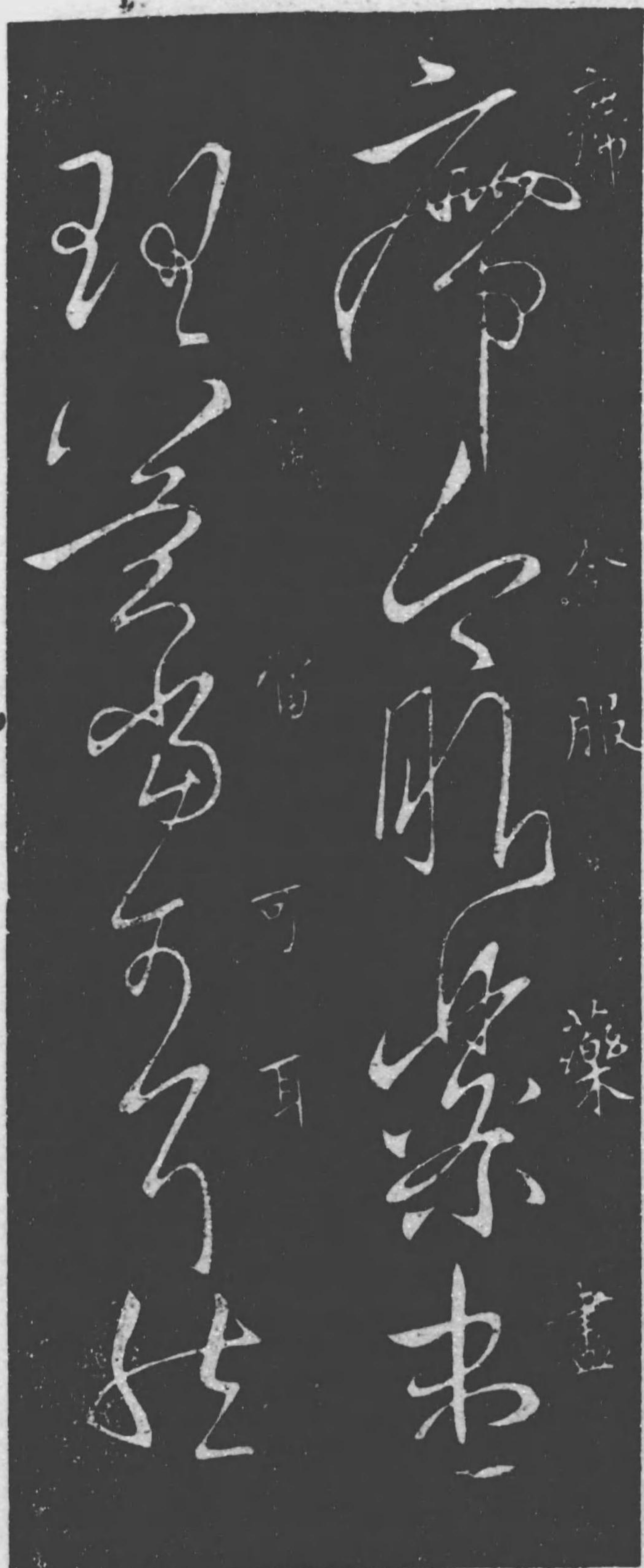


王羲之書 樂毅論

樂毅論は羲之が王家の書法を子獻之に示す爲に書いた細楷で、筆力の盛なものである。我朝光明皇后がこれを臨書遊ばされてゐるが、筆勢峻拔にして、元本の面影躍如たる傑作である。



王獻之書



此外王羲之のものでは細楷の東方朔畫贊・黃庭經・行草に興福寺斷碑・喪亂帖・率橘帖・十七帖等が有名であり、王獻之のものでは細楷の洛神賦十三行・行草の辭中令帖・東山帖・地黃湯帖等が著名である。



二王以外では王珣の伯遠帖など傑作である。北朝に於ては殺伐剛健の氣象をうけて、所謂六朝風と稱する峻拔毫宕の書が尊ばれた。

當時佛教の隆盛につれ、造像刻經等流行したが、其頃の遺物が多數現存してゐる。其代表的のものに、北魏の鄭道昭が書いた鄭義下碑、雲峯山、天柱山等の摩崖碑（巖石に碑文を刻せしもの）、四十餘種を始め、牛嶽造像記（約一四四〇年前）、張猛龍碑（約一四一〇年前）、高貞碑、張玄墓誌、敬使君碑、根法師碑、善薩處胎經（欽明帝の頃）等がある。

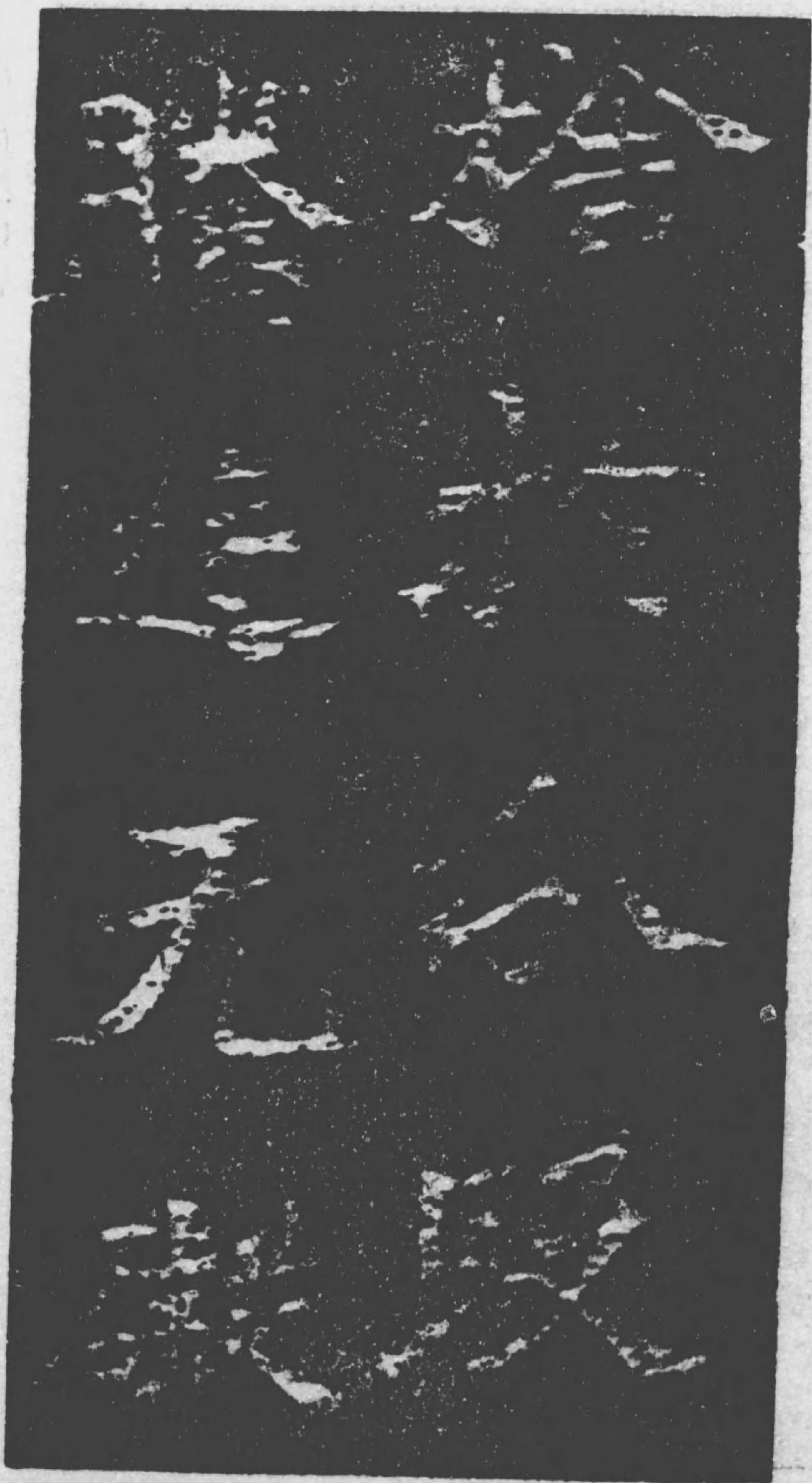
六朝風とは此等の書風をさすので、明治初年清國の金石學者楊守敬によりて我國に傳へられ、日下部鳴鶴、巖谷一六等の盛に提唱する處となり、當時迄我國の朝野を風靡せし軟弱なお家流を一掃して、峻拔勁健なる唐様の時代を招來した。所謂鳴鶴流の根源は前記の北朝諸碑に發してゐるのである。

鄭義下碑 鄭道昭書





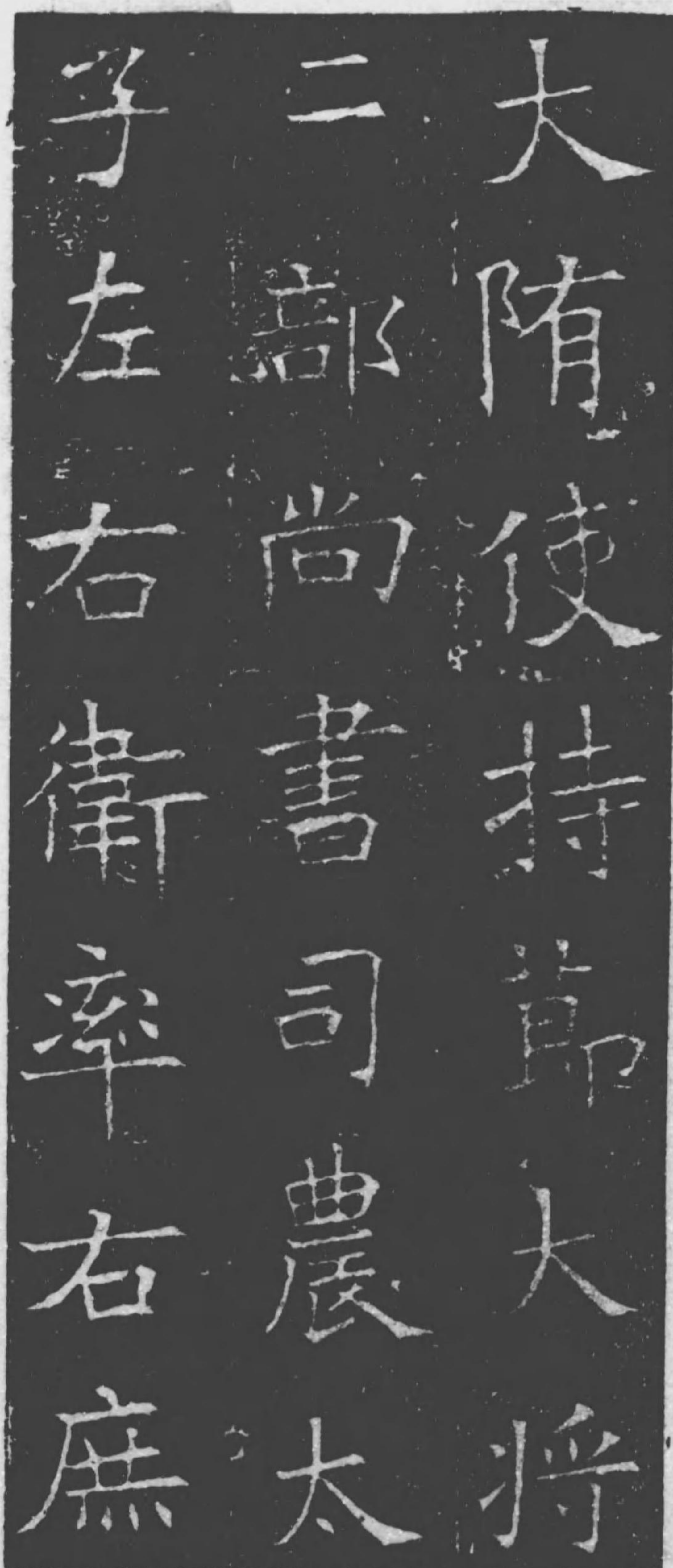
牛概造像記



### 六、隋唐時代

隋は三代三十七年で滅んだので偉大な人物は現れなかつたが其間に六朝風の峻拔にして雄健なる北方刻石の楷書と南方穩健にして秀麗な法帖の行草書とを統一し、整正雅健なる書風を形成した。即碑では龍藏寺碑、蘇孝慈墓誌銘、大侯卿夫人墓誌、啓法寺碑、寧贗碑等が著名である。

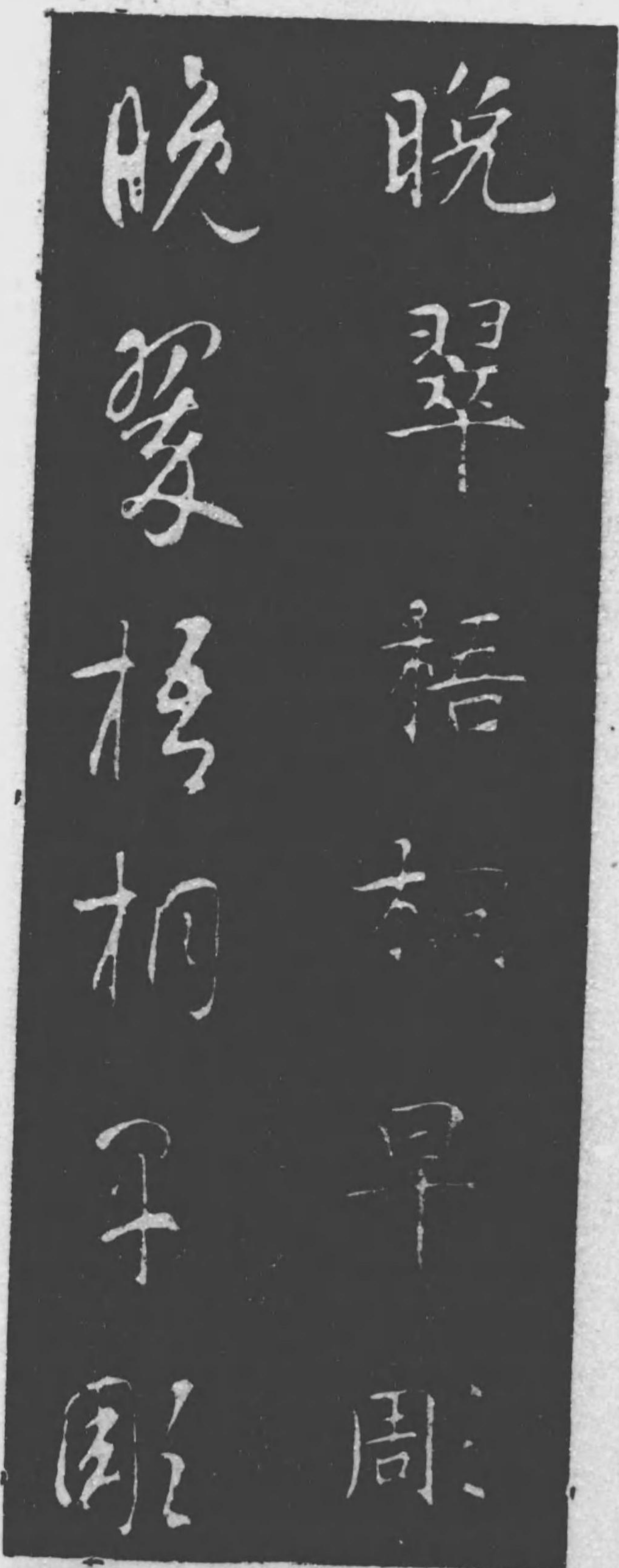
蘇孝慈墓誌





隋時代の代表的名手は王羲之七世の孫の智永である。彼は江南永欣寺に住し永禪師と號した。智永樓上に籠りて手習する事三十年、禿筆が大竹籠に五杯も出来た。この間に眞草千字文を八百本寫し、江南の諸寺へ一本宛施したといふ事である。業成りて樓を下るや、書を求める者門前に市を爲し、穴を穿つて闖入するので、鐵で塞いだから、時人之を鐵門限といつた。其書は羲之の美韻を得て品位高く、溫和な書風である。

智永眞草千字文



唐は書道の黄金時代で規格正しく品位高く、書道藝術の完成された時である。太宗は英邁にして房玄齡等の賢臣を用ひ、よく唐室二百九十年の基礎を固め、政治學問藝術宗教何れも未曾有の發達を遂げた。帝は書も堪能で、温泉銘、晉祠銘等の名作を残されてゐるが、生來王羲之の書を好み、天下に令して書聖の眞蹟三千紙を得たといふ程である。

この明君の下には幾多の天才が孚くまれた。太宗の師の虞世南は書を智永に學び、典麗道媚な書風を爲し、一代の傑作孔子廟堂碑は品位を以つて唐代に君臨し虞世南書 孔子廟堂碑

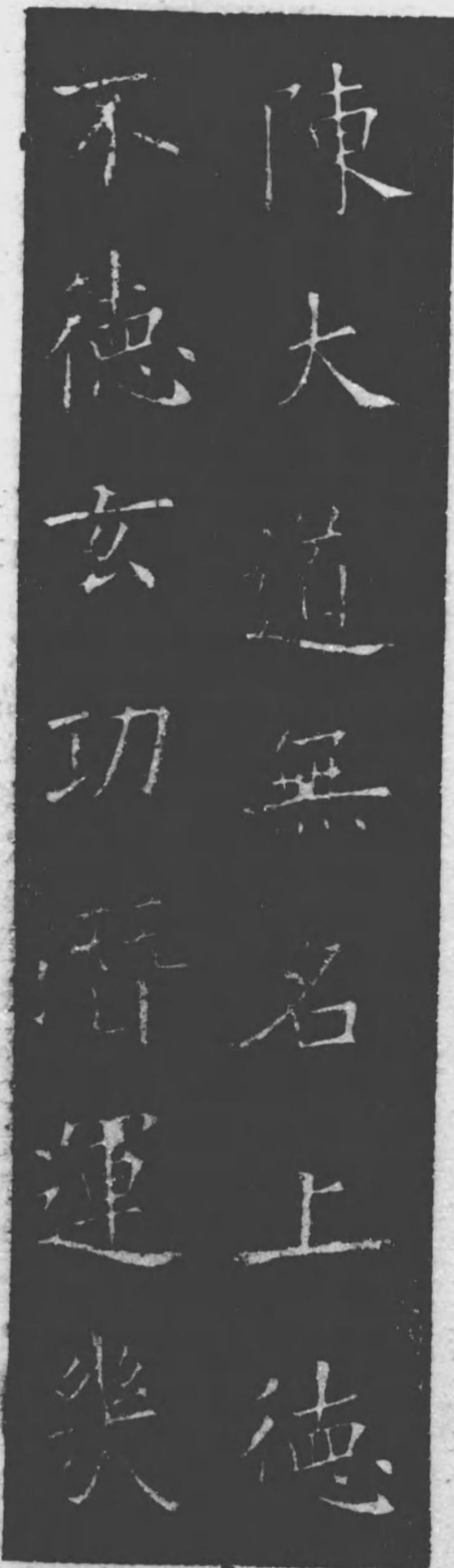




てゐる。太宗嘗て曰く、「世南に五絶あり。一に德行、二に忠直、三に博學、四に文辭、五に書簡」と、以て其爲人を知る事が出来る。

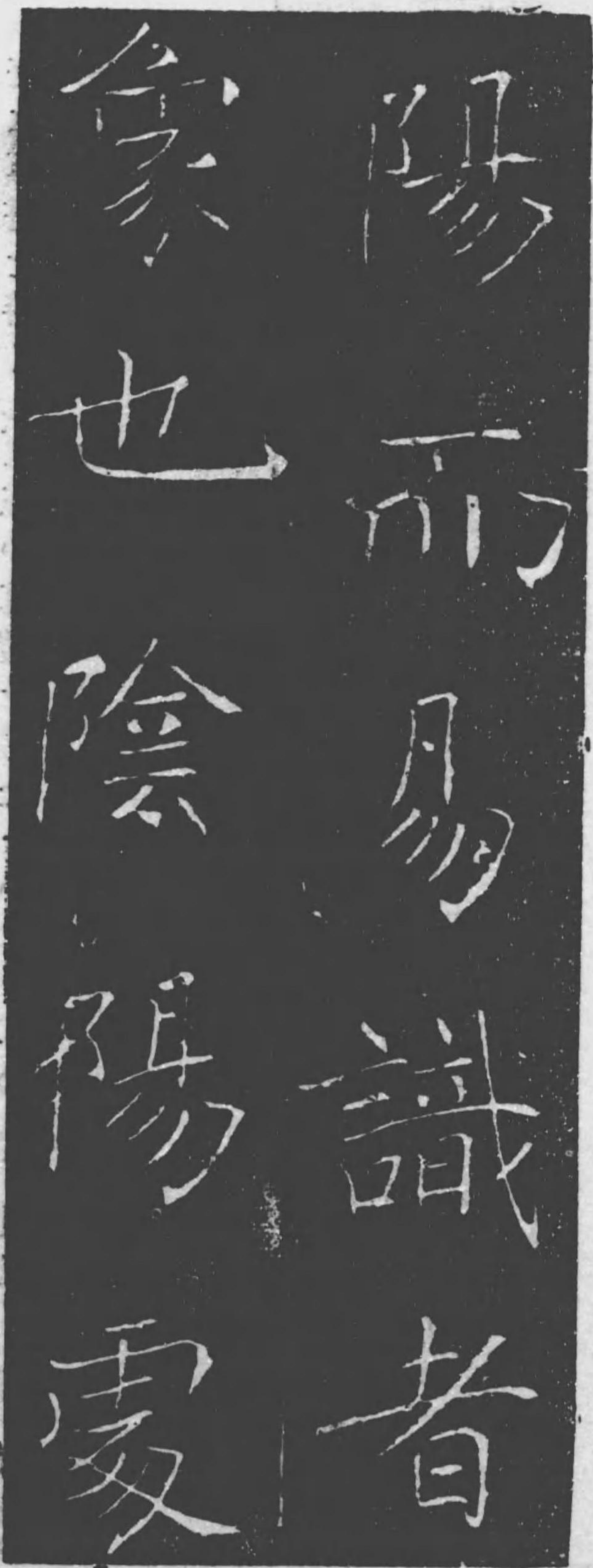
歐陽詢は羲之の骨力を得、峻拔な事は六朝の餘韻を帯びてゐるが、整然として規格正しき事は、流石楷法の極則と稱せられるだけある。正書最も工にして、結體の作り方は彼の右に出づる者はあるまい。九成宮醴泉銘、皇甫府君碑、化度寺碑、虞恭公碑等の劇作を残し、行草に卜商帖、夢奠帖、草書千字文等がある。嘗て出遊中索靖の碑を見、傍に三日も宿したといふ逸話のある程書には熱心であつた。

歐陽詢書 九成宮醴泉銘



褚遂良字は登善、河南郡公に封ぜらる。少にして書を虞世南に學び、後王右軍を研究して其意を得、用筆法の妙諦を會得した。後世彼の書を學ぶ者多く、殊に晩年の傑作雁塔聖教序は用筆法研究の指針である。同州聖教序、孟法師碑、倪寬贊、伊闕佛龕碑、房玄齡碑等は楷書、枯樹賦、哀冊文、千字文等は行書で、何れも名作たるを失はぬ。

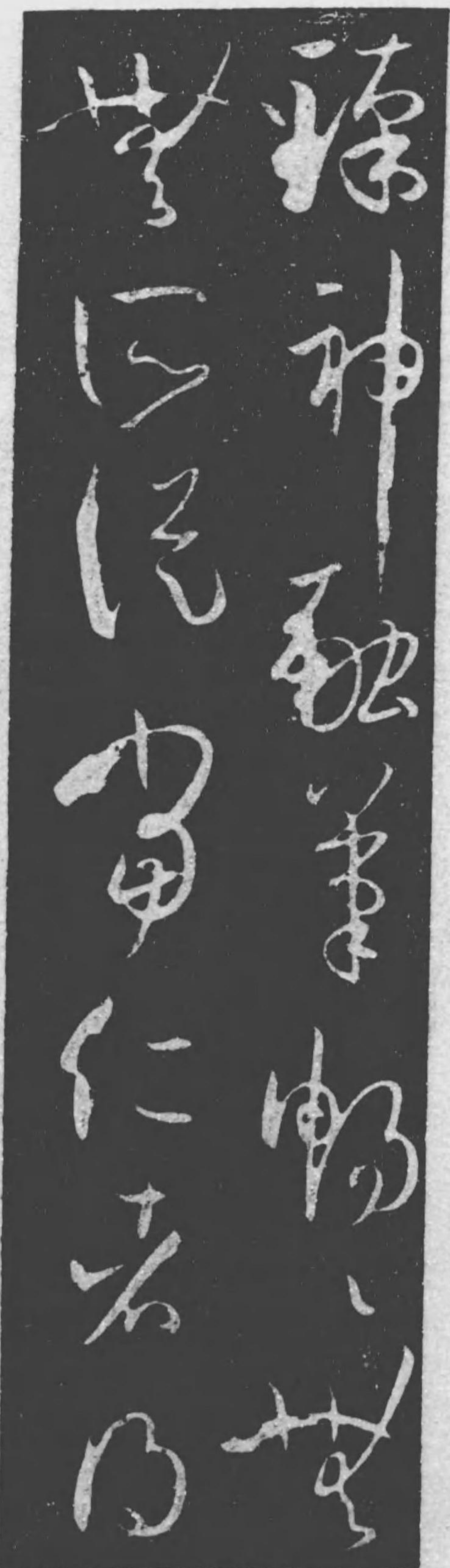
褚遂良書 雁塔聖教序





孫過庭は草書を善くし、二王の眞髓を得たといはれてゐる。其著「書譜」は草書にして、彼の書道に關する意見を述べたものである。

孫過庭書 書譜



顏眞卿は唐代隨一の大將軍にして、義兵を起し安祿山の亂を平げ、後魯郡開國公に封ぜられた。幼時家貧にして筆紙に乏しかつたので黄土に習字したといふ。王羲之より出でて別に一派を爲し、楷行草何れも妙趣を打開し、渾樸雄偉にして字體豐潤、氣象博大なる書風を大成した。多寶塔碑、麻姑仙壇碑、家廟碑、東方朔畫贊、元

次山碑、中興頌、李元靖碑、建中帖等は楷書、行草に爭坐位帖、祭姪稿等あり、破體に裴將軍詩がある。何れも風情を異にしてゐる。

顏眞卿書 建中帖



此外唐代の名作には殷令名、裴鏡民、李懷琳の絶交書、歐陽通の道因法師碑、王知敬の衛景武公碑、張旭の草書千字文、賀知章の孝經、李北海の雲麾將軍碑及李思訓



碑、徐浩の不空三藏碑、柳公權の支那塔碑、懷素の自叙帖、千金帖、聖母帖等がある。

### 七、宗以後

唐は書の極盛時代で其後は次第に格調が下つて來た。然し宋の時代は清新な氣分が横溢したので、晚唐の型に捉はれたものよりは爽快な感がある。即宋人は

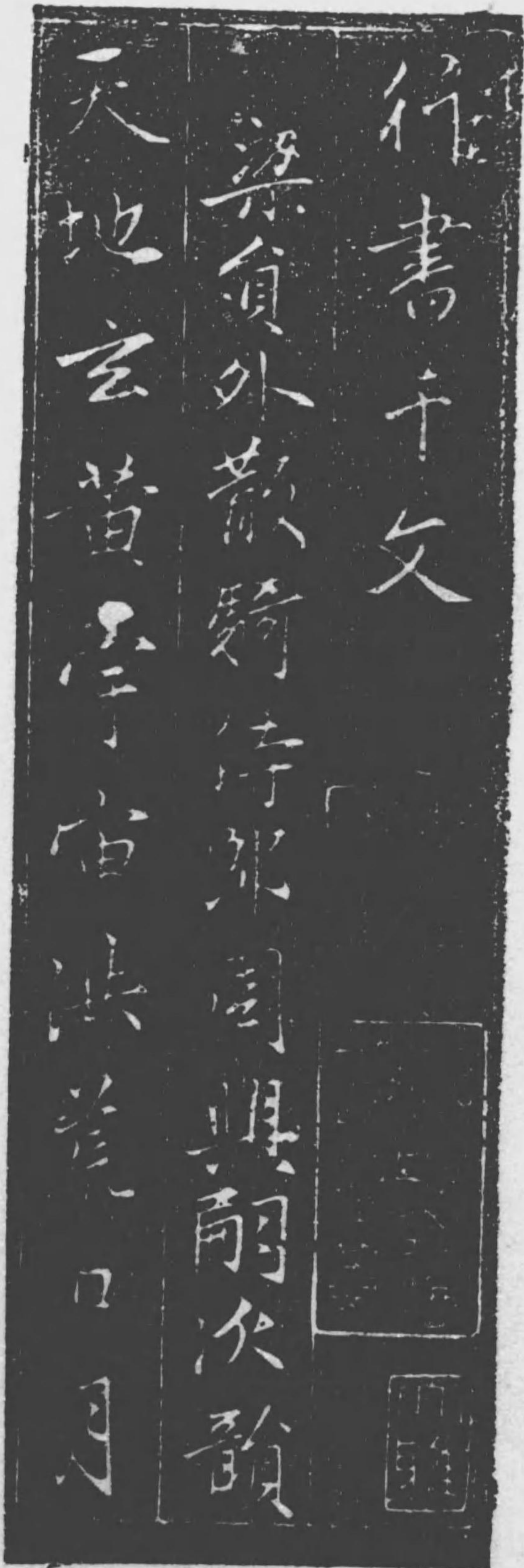
蘇東坡書 嘉池廟碑



法に捉はるゝ事無く、自己の個性を思ふまゝに伸し、自由の天地を求めて法を脱し、型を破りて、魂を打込んだ生々した書を作つた。當時の大家は蘇東坡、黃庭堅、蔡襄、米芾の四人であるが、其中文豪の蘇東坡と、畫家の米元章が書に於ても著名である。又太宗の時古今の書を集めて淳化閣帖十卷の法帖を作り、徽宗の大觀年中大觀帖十二卷が出来た。

元時代の代表的書家は趙子昂である。彼は宋時代に亂れた書法を復古せしめて純正穩健な書を作つた。鮮于樞も亦よくした。

行書千文 趙子昂書





明時代では祝允明・文徵明・董其昌等著れ、何れも我國書道に影響を與へたが、然し格調は大分下る様である。

清朝で名高いのは、王鐸・劉石庵・伊墨卿・鄧石如・何紹基・潘存等で、揚守敬・吳昌碩等も近代の名手である。

## 第二節 日本書道史

### 一、上代

私は上代を大體奈良朝前と致したい。

我國の書道は要するに支那書道の延長であり傍系である。即後には日本獨特の書道藝術を展開したが、出發の當初は遺憾乍ら支那書道の模倣に過ぎなかつたといはねばなるまい。

我國に於ては國字は即漢字であつて、應神天皇の十六年（昭和十年より一千六百五十年前）百濟の使者王仁が論語と千字文を献上した事に始ると考へるのが至當であらう。尤もそれ以前にも文字はあつたとは思ふが、恐らく鐘繇の千字文

であらうと思はるゝこの書道の傳來は實に日本文化に一新紀元を劃したのである。其後約四百年間はさしたる變化も無く、文字は只言語の符號として實用に使用されたるに止まり、然も上流社會にのみ限られてゐた事であらう。

處が天智天皇の御代になると、つゝ藝術としての書道が發展した。續日本記にも「淡海朝の書法一百卷を崇福寺に施入す」とあるから、此頃では書道が相當重んぜられたのであらう。續いて欽明天皇の十三年に佛教が傳來してからは、佛法華經義疏傳聖徳太子御書

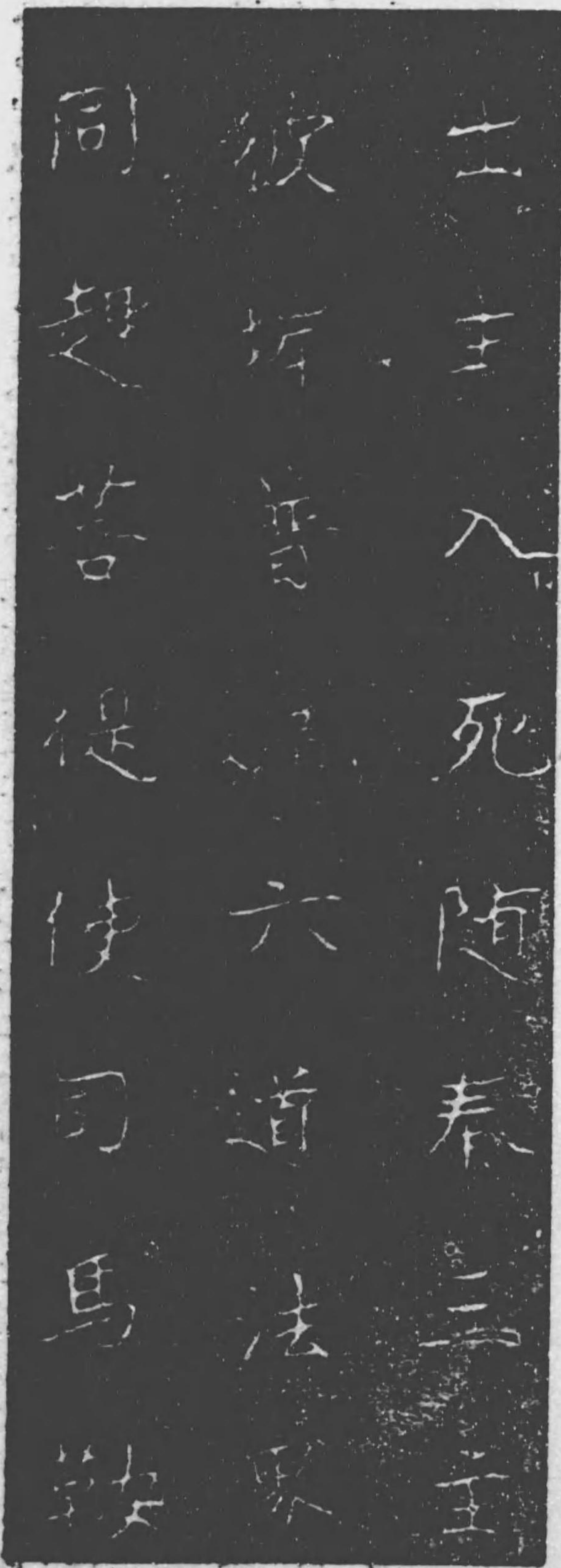




典の書寫が盛になつたが、聖德太子は殊の外佛法を尊信し給ひ、御筆の法華經義疏は現存する我朝最初の眞跡であるばかりでなく、我國佛典註釋の嚆矢として貴重なるものである。

其後天武天皇の朝には、大和國川原寺で一切經を書生に寫させられた事があり、持統天皇の御代には、書博士百濟末子善信等に白銀二十兩を賜うた事が日本書記にあるから、大寶令以前既に書博士、書生を置かれた事がわかる。

釋迦佛光背銘



又文武天皇の大寶令には、書博士、書生の外に寫書手の名も見え、當時の名蹟が今日も猶正倉院に保存されてゐる。

當時の金石文は少いが、造像に法隆寺の「藥師像光背銘」「釋迦佛光背銘」「藥師寺東塔標」等がある。何れも六朝風の剛健な用筆の中に瀟散な風趣があり、高古な含蓄が吾人の眼を引きつける。

## 二、奈良朝

奈良時代の書道は佛教と共に隆盛に赴いた。當時は總て佛教中心で、書道も亦彫刻、建築等の藝術と共に著しく進展した。上に聖武天皇、光明皇后等の名手を戴き、下に良辨僧正、紀古佐美、吉備眞備、惠美押勝、中將姫等の能書家が輩出した。

寫經は奈良時代書道の特色であつて、優秀なものが多い。聖武天皇御筆と稱せられる賢愚經など、實に筆力雄健で寫經中の白眉である。

此外に聖武天皇の御宸筆としては、正倉院に宸翰雜集一卷と銅板勅書がある。



施之報十世受福  
返十倒猶故不知

光明皇后は藤原不比等の三女で才色兼備に渡らせられ、御歳十六にして聖武天皇の妃となられ、後臣下としては始めての皇后に冊立遊ばされた方である。厚く佛教を信ぜられ、救恤の爲悲田院、施薬院等を設けられた事は歴史に見えてゐるが、書道上より眺めても忘る可からざる偉大な存在である。

皇后の御書「樂教論」は王羲之の臨書であるが、筆力遒勁にして用筆精妙な事は

古今獨歩で、恐らく書聖の刺蹟をこれ程巧に臨書せしものは支那にもあるまい。此外皇后の御筆に杜家立成雜書要略がある。

光明皇后御筆樂教論 正倉院御物

夫未古賢之意宜以大者遠者先  
而難通然後已焉可也今樂氏之趣  
未盡乎而多方之是使前賢失  
不心惜我觀樂生遺教惠王書

奈良時代に於ける碑文には、山城に宇治橋斷碑、下野に那須碑、上野に多胡郡碑、陸



前に多賀城碑等あるが、皆六朝風の雅健にして風韻高き書である。

### 三、平安時代

平安朝時代は吾國書道の黄金時代である。漢字は傳來以來漸次に發達し、奈良朝の頃には六朝書道に迄到達したが、今や一大飛躍を爲し、花咲き鳥歌ふ爛漫の春に巡り遭へるが如き心持さえする。即桓武帝が都を平安京に遷されてから、文物制度は更に整然となり、遣唐留學の舉が頻繁となるにつれ、彼土の書道はズン／＼直接に傳へられて一般の研究が盛となり、随つて大手腕家が續出した。

上には數明なる桓武嵯峨の兩帝の立たれるあり、下に空海、逸勢、最澄等の名手現れ、茲に我國書道の最高峯を形成したのである。今此時代を初期、中期、後期に分けて考察しよう。

初期に現れまし、嵯峨天皇は、御親ら深い研鑽を積まれ、空海と共に我朝書道の二聖と尊ばれる程の大手腕家であらせられる。御筆李嶠詩は唐の歐陽詢の用筆法により、峻拔遒勁限り無く、行草の妙趣を打開されたものである。

嵯峨天皇宸翰李嶠詩

會公之夢筆漢市  
有丹山霧玲瓏素



この君にしてこの臣あり。かゝる明君の下に争くまれし僧空海は、實に我朝書道の最高峯たるのみならず、之を支那に求めても果して幾人あるであらうか。私は遙に王羲之に對してゐるのではあるまいかとも思ふ。幾多の傑作を残した中に、長友最澄に送りし手紙風信帖は、今猶三通東寺に現存してゐるが、高渾雅健、清麗、純正にして、行草の妙云ふべからず、王羲之の傑作喪亂帖、孔侍中帖等に雁行せるものと思はる。



風信帖 空海書

十日拂若將多入  
留立未待是河見  
山城石川雨大徳源

この風信帖と併稱される彼の傑作に灌頂記がある。之は大師が唐より歸りて六年後の弘仁三年十一月と十二月の兩度、京都郊外高雄山に於いて、當時の名僧を集めて灌頂せし時の名簿で、卒意の間に書かれたものであるが、其渾朴にして韻致の高き事は、大唐の名手顔真卿の争坐位帖に相對してゐる。

灌頂記 空海書

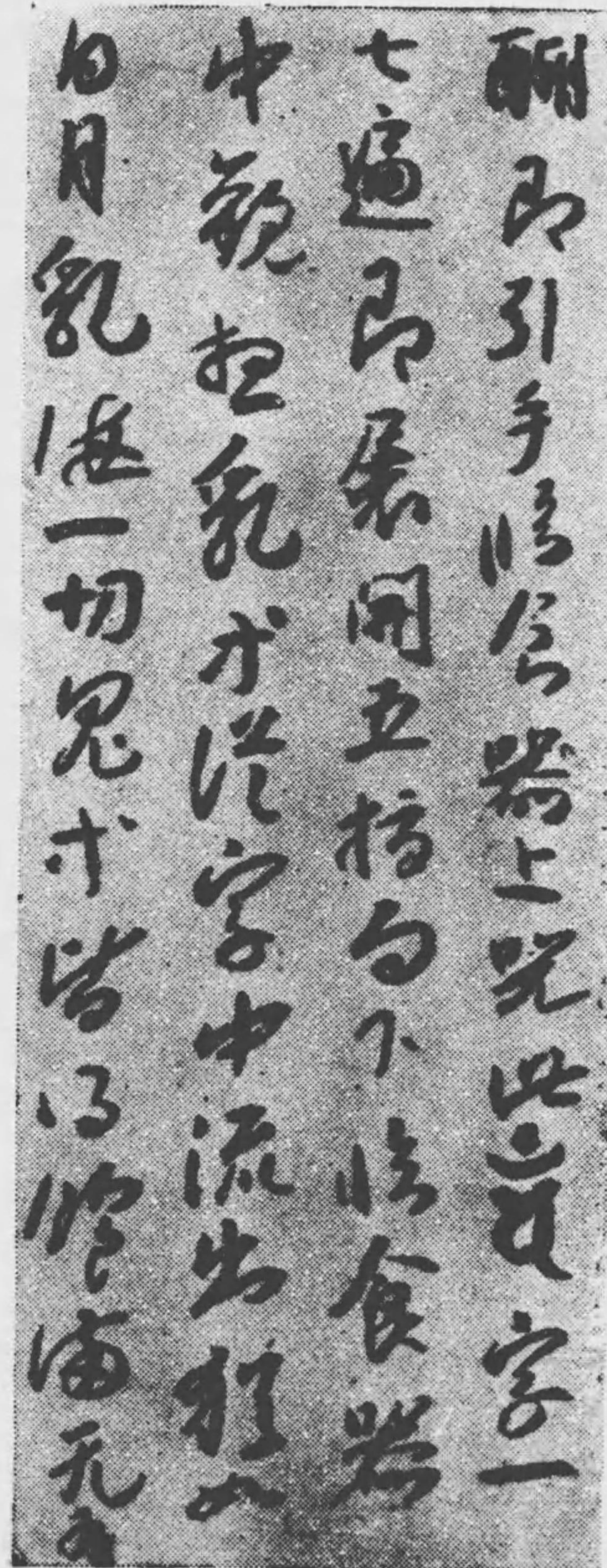
弘仁三年十一月十五日於  
寺文金剛多灌頂令  
得軍澄日 播磨大

尙大師の傑作とすべきものに三十帖策子がある。之は大師の在唐時代の書で、歸朝に際し橋逸勢や寫經生等と共に、匆忙の間に金剛頂等の祕經を書寫せしもので、多くは行草體で速書してあるが、金玉の如き點畫は一千年後の今日も猶燦然と



して輝いてゐる。落筆輕妙で實用書としても絶好の手本であらう。

三十帖策子 空海書



其他所謂大師流と稱する用筆の變幻極り無き藝術書に、益田池碑があり座右銘がある。之は偉大なる大師の一面にして、彼が其靈腕を揮ひて毛筆書道の極意を表現せしものといふべく、時に又かゝる大師の遊戯三昧の境地があつた事を窺ふ

座右銘 空海書



事が出来る。

其他大師の劇蹟を擧げれば七祖像の賛がある。之も雄渾にして用筆の妙筆舌に絶するもので、惠果阿闍梨耶一行阿闍梨耶の賛の如きは鐵柱の天より下り、奔流の滔々たる如き筆勢である。之亦師の畫像に對し敬虔の情湧き起り人間業とも思はれぬ劇作を生じたのであらう。





斯様に大師の書の現存せるものは一々趣を異にしてゐて、其變化極りなき藝術は、偉大なる才能を物語るに充分である。此他に著名なるものを挙げれば、孫過庭書譜、金剛般若經解題、聖賢指歸、狸毛筆奉獻表、請來目錄等がある。

三筆の一人の橘逸勢は、入唐中柳宗元から書法を受けたと稱せられてゐるが、書と共に文に秀で、唐人橘秀才と呼ばれたといふ程である。彼の代表的作品に伊都内

親王願文がある。全巻を貫ける精妙勇勁な筆勢は、沈着痛快にして筆端火を吐き、正宗の名刀にて亂麻を断つと思ひあらしむ。空海の風信帖、嵯峨帝の李嶠詩と共に、日本書道の三絶であらう。

伊都内親王願文 橘逸勢書





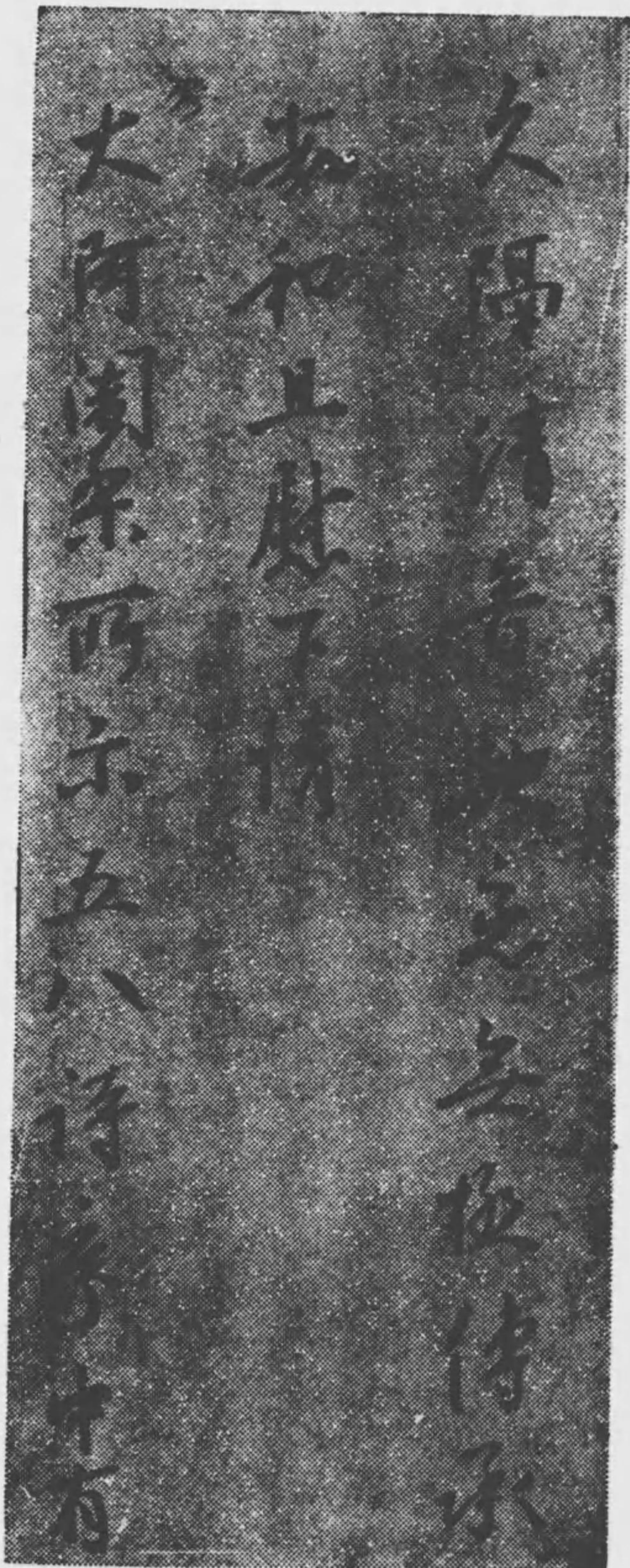
此他逸勢の書として傳はるものに、興福寺南圓堂銅燈臺銘がある。謹嚴な楷書で雄渾且秀潤である。

銅燈臺扉銘 橋逸勢書



平安朝初期に於て三筆に並ぶ名手は僧最澄であらう。事實最澄の書が空海と稱せられて傳はるものもある位である。次に掲げたのは空海に送りし尺牘の一部であるが、高雅な趣は唐の虞世南の面影があり、清純な温容は高嶺に澄める月を仰ぐ感がする。

尺牘 最澄書





最澄の書には此他に、請來目錄・入唐牒・天台法華宗年分縁起等がある。

此時代から平安朝の中期にかけて、三筆三蹟の中繼を爲すものに、藤原敏行の神護寺鐘銘と菅原道真卿の書と傳へられる百練鐘詩があるが、漸次和様への特色が濃厚となつてゐる。

中期を代表する者は小野道風・藤原佐理・藤原行成の三蹟で、日本書道が唐様を脱して、純然たる和様を確立した時代である。當時廟堂に於ては藤原氏權を専らにし、大官人を中心として絢爛たる文化が展開したのである。

三蹟は何れも晉唐を基調とし、王羲之を祖述してゐるけれども、時代の好尚は圭角稜々たる峻拔な唐様よりも、豊圓にして優麗な書風を愛したので、三蹟の書は格調からいへば或は三筆に一步を譲るかも知れないが、繊細な技巧は勝るとも劣らず、所謂和様の極致たる典麗な日本書道を形造つた。

殊に特筆すべきは平假名の完成で、支那に發祥せし漢字は、彼土で古文より篆・隸・楷・行・草と進化したが、日本に於いて更に一段の進歩を爲し、草書よりも更に簡易にして優美なる平假名を創作したのである。平假名は空海の作といはれてゐるか

ら、平安朝の初期に出來たと思はるゝが、此時代に至りて始めて大成したのである。

三蹟は何れも漢字の大家であるから、非凡な手腕で特色ある傑れた草假名を書いたが、行成は殊に有名で、上代様假名の典型を作り上げた人である。

紀貫之は土佐日記の筆者として、又古今和歌集の撰者としてあまりにも有名であるが、假名書道に於ても亦當代の大家で、貫之書と稱せらるゝものが澤山に現存してゐる。これ等は或は其後の能書家の手に爲れるものではないかと思はれるが、兎に角假名書道として傑出せるものが多い。

貫之書と稱せらるゝ高野切は、一種・二種・三種とあり、何れも趣を異にし、一種は才氣縱横して濃淡潤渴の變化あり、二種は練勁古厚、三種は流麗溫雅の名作である。

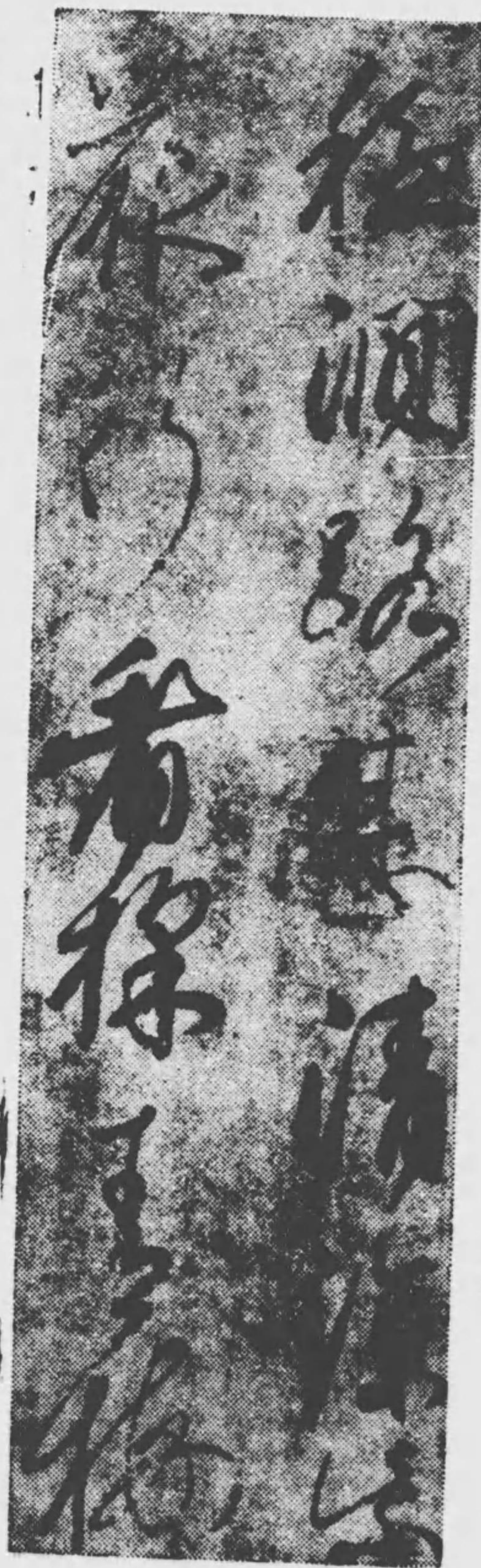
此外に色紙散し方の根源を爲す寸松庵色紙、桂宮萬葉集等の傑作がある。前者は雄健な筆致で一氣に貫注し、且圓轉洒脫の妙趣深く、後者は裝飾的な用筆で美しくし。







書風道野小 帖泉玉



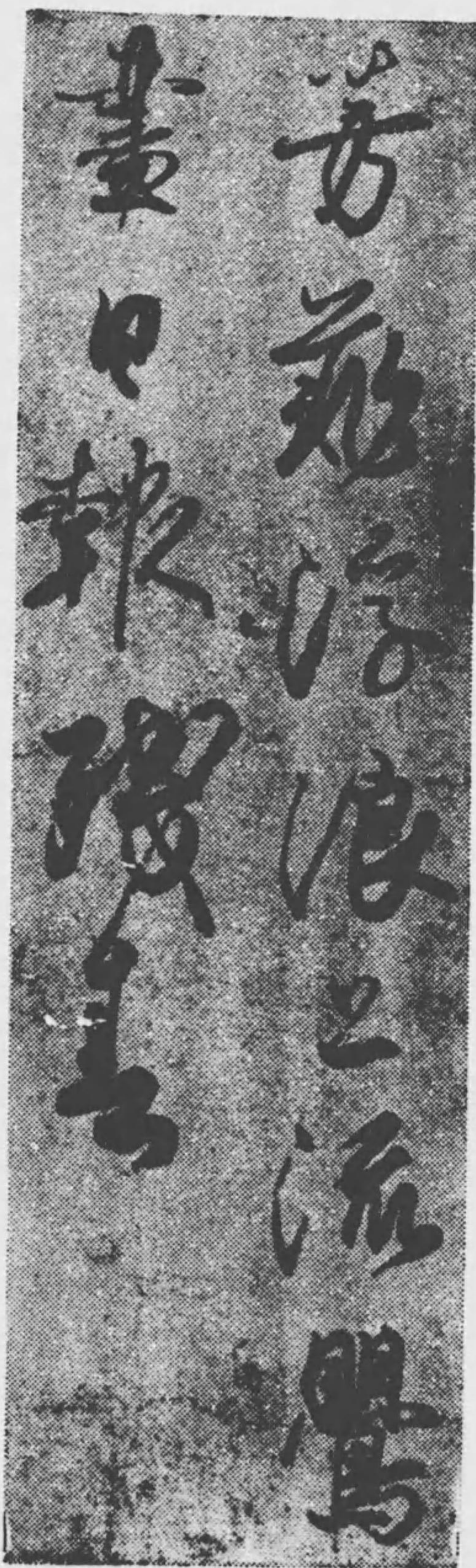
書風道野小 傳帖秋萩



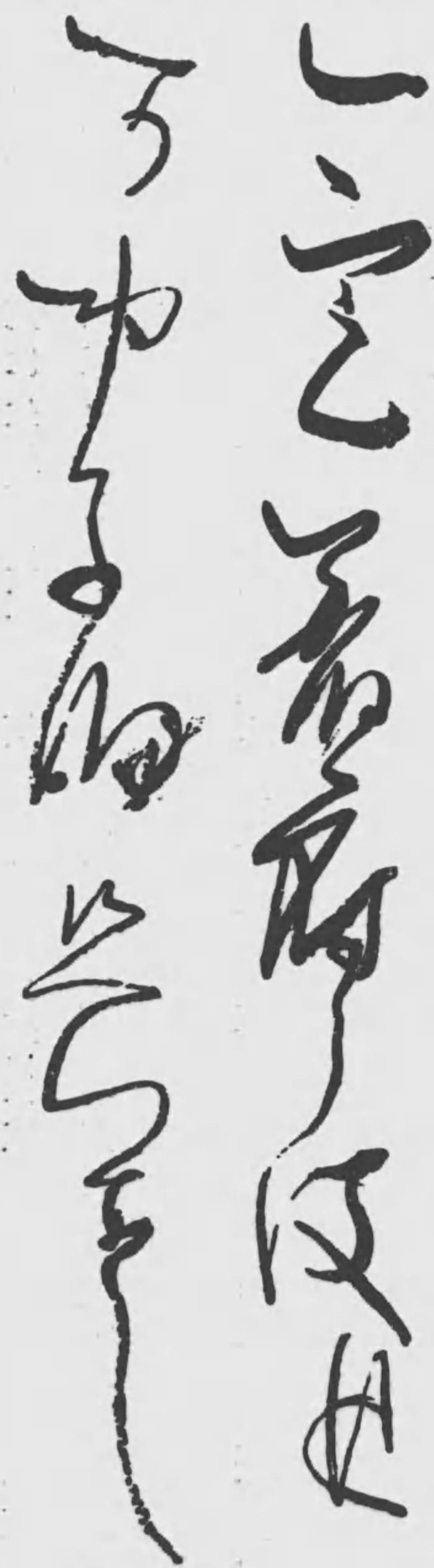
佐理卿の書は三蹟中最も三筆に近く筆勢峻拔にして書品高古其手紙の如きは大師の風信帖と共に我國尺牘の雙璧である。假名も亦老蒼にして賀の歌筋切通

切紙捻切等が名高い。

書理佐原藤 紙懐詩



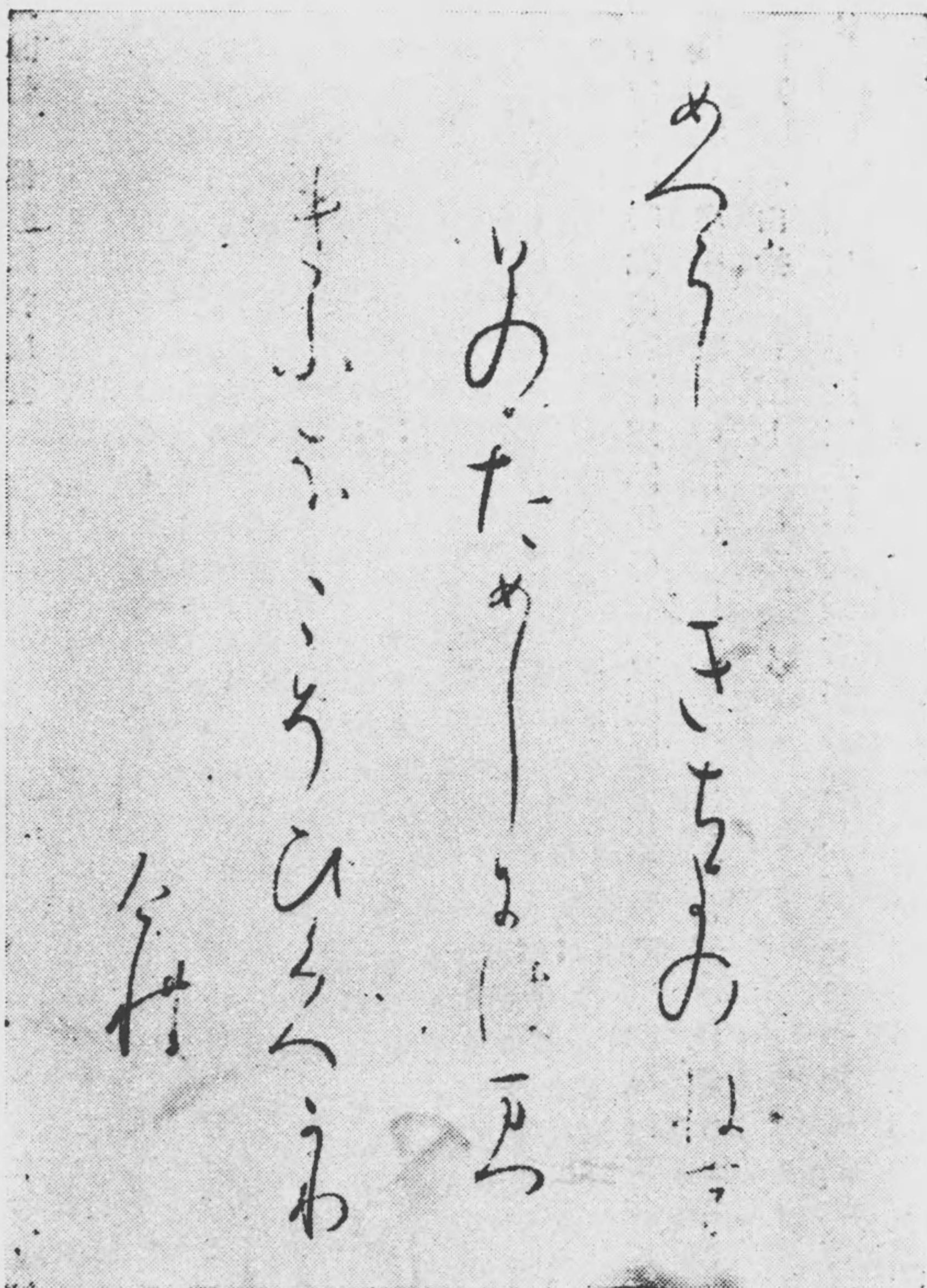
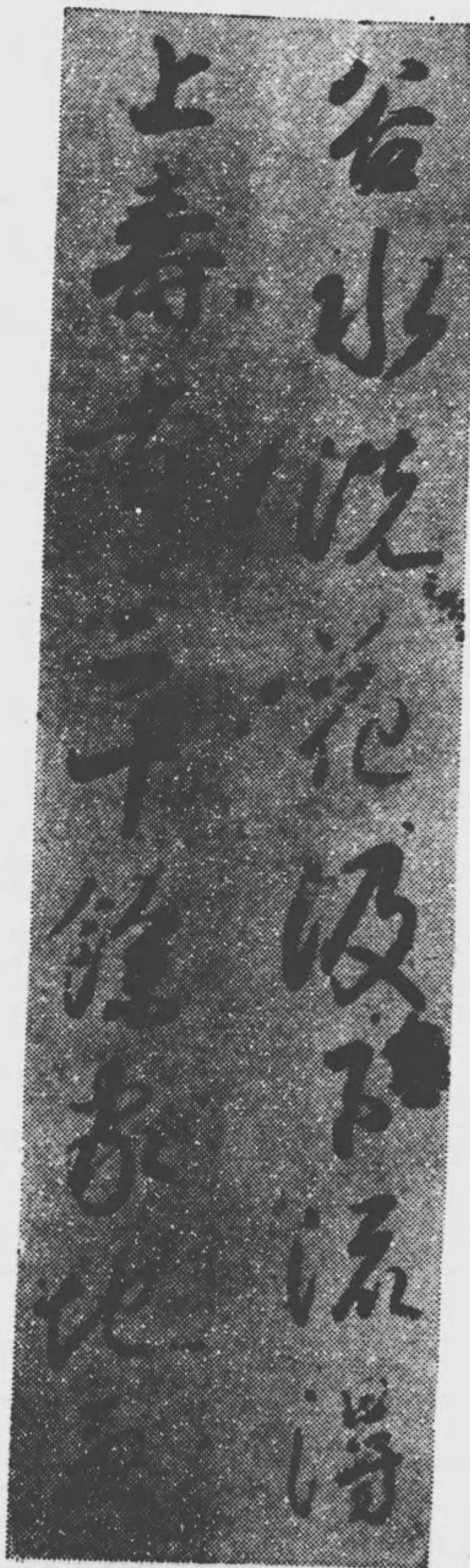
書理佐原藤 帖洛離





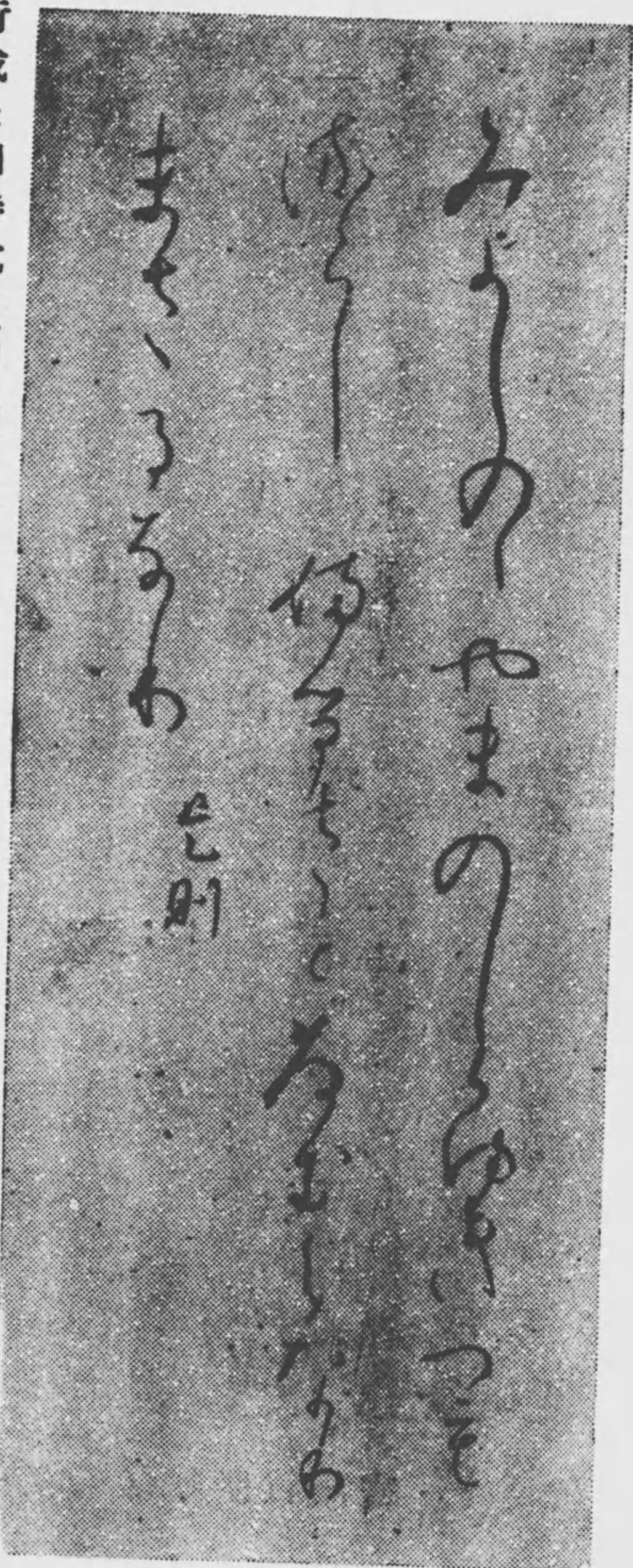
藤原行成卿は權門に生れ位は正二位大納言迄進み書は王羲之から出て和様を大成し世尊寺流の始祖を爲した人である。漢字は温潤明朝にして假名は典雅優雅である。共に大宮人の風貌を具へ貴公子の書たるを憶はしむ。  
本能寺切・白樂天詩卷・和漢朗詠集・古今集切・升色紙・五首一首等著名なものが澤山ある。

本能寺切 藤原行成書



書成行原藤傳 紙一首五





尙行成と同時代に、和漢朗詠集の撰者藤原公任がある。和歌詩文共に秀で、書も又三蹟に次ぐ名手で、數々の傑作（朗詠集・精色紙・大色紙・小色紙・十五番歌合・藍紙萬葉・金澤萬葉・北山抄）を残してゐる。

平安朝の後期は、多年藤原氏が遊樂奢侈に耽り、政治を怠つた結果、地方に動亂起りて、武士が擡頭し、人々は何時しか文を忘れて、武を重んずる様になり、書も亦峻拔

とはなつたが、品位は下つて來た。此時代の能手は、源俊賴（古今集切元・永古今集・民部切朗詠・繼色紙）を筆頭とし、藤原基俊・藤原忠通・藤原定信・西行等である。

#### 四、鎌倉時代以後

我國の書道が平安朝を最高として、漸次下り坂となつた事は、支那の唐以後格調が下つたと同様で、彼此對照して、誠に面白い現象である。

鎌倉以後には、三筆三蹟に比すべき大家は現れなかつたが、それでも鎌倉には藤原定家（小倉色紙・紀貫之土佐日記臨書）・宗尊親王（寛平歌合・深窓秘抄）・伏見天皇（讀漢詩書・新樂府・筑後切）等の純良なる大家があつた。

室町時代を代表する方は、御家流の始祖尊圓親王（結夏衆名單・御消息）である。

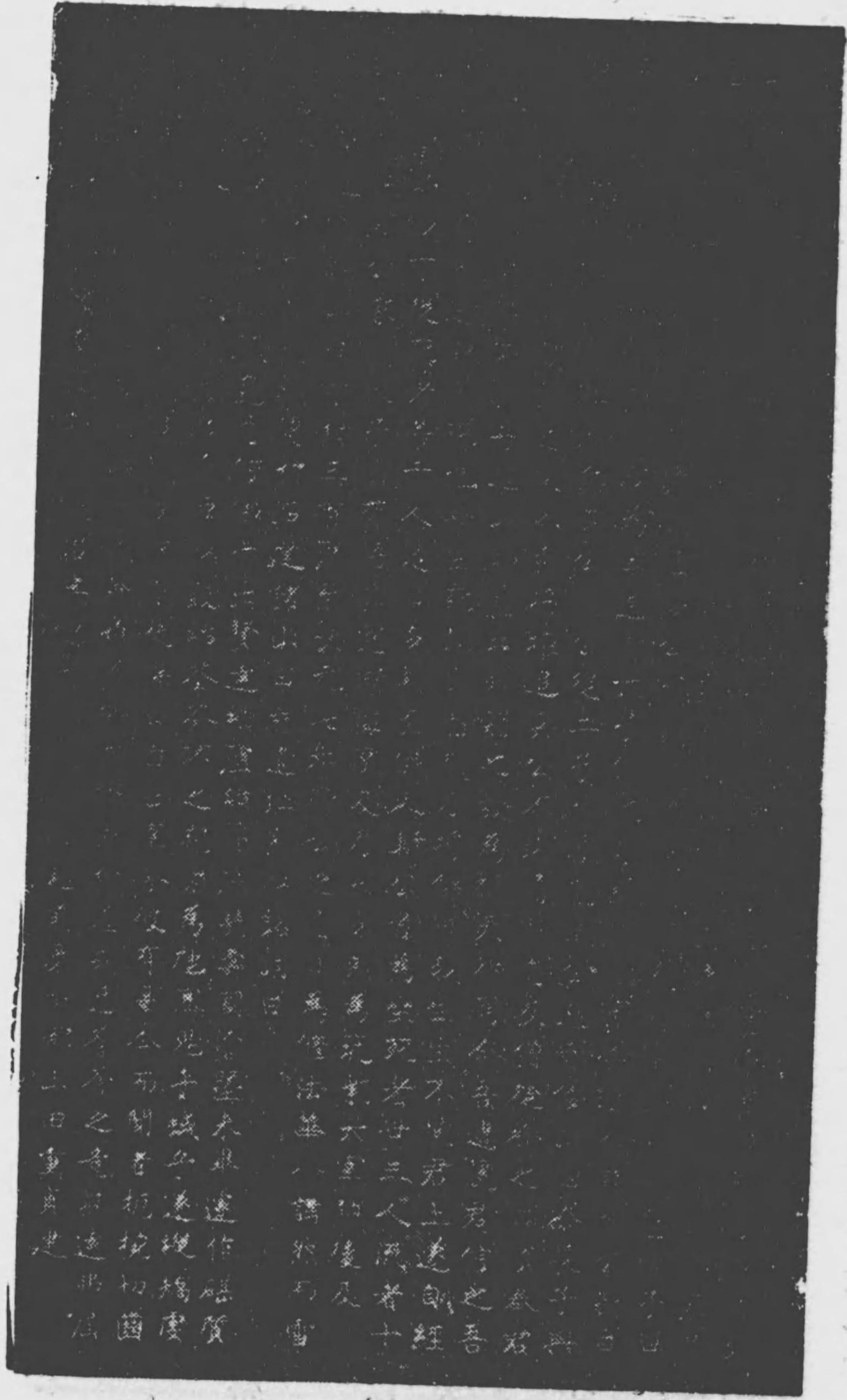
江戸時代に入りては、近衛信尹・本阿彌光悅・松花堂烏丸光廣・隱元・北島雪山・荻生徂來・近衛家熙・細井廣澤・僧良寛・橋千蔭・頼山陽・市川米庵・卷菱湖・貫名菘翁等が輩出したが、私は漢字の貫名（松居遊見・叟碑・山田公雪・冤碑・左輔叙・白玉井銘・赤壁賦）と假名の近衛予樂院公（秀歌大體和歌萬代帖）及漢字假名共に高古な良寛とを推したい。この三人は、確に上代に迫り、純正にして品位ある書を残してゐる。或は三蹟以來



尋三書方の新指導 下

の人ではないかと思ふ。

山田公雪宛碑 貫名海屋書



九四

近衛予樂院書 飛白



明治以後の手腕ありし書家は、副島蒼海・巖谷一六・日下部鳴鶴・中林梧竹・渡邊沙歐・丹羽海鶴等であらう。

其他長三洲・金井之恭・村田海石・西川春洞・前田點鳳・小野鷲堂等も著名である。



## 第八章 書法

### 一、書法の價值

書法とは文字揮毫の際に於ける法則のことで、書の根本生命である。従つて書法に叶つてゐる字は立派な字で、之に叶はぬ字はよい字とはいへない。例へば第七章中に現れた古人の字を見れば、何れも一樣によい字であるが、これは書法に叶つてゐるからである。書法上から眺めれば、支那では唐以前、日本では平安朝以前は正しく、それ以後は概して亂れてゐる。(勿論例外はあるが)斯様な意味から私は書道史を説くに、支那は唐以前、日本は平安朝迄を細説し、以下を略述した次第である。然らば書法とは何であるかと問はるゝと、簡明に説明する事は出来ない。恐らく之は誰にも出来ないであらう。よいものを澤山観て自ら悟る事が何よりである。さればこそ本書中に名蹟を澤山出して、讀者諸氏の御参考に供した次第である。これらのものをよく御覽なさい。そして御悟り下さう。

書法を説明したものは古來澤山ある。然しどれも漠然としてゐて、幾何學の定

理の様に説明したものはない。然し其中で一番やかましいのは永字八法であらう。之は東漢の蔡邕が、石室の中で神人から授かり、魏の鍾繇、晋の王羲之、隋の智永等を経て、唐の四大家に傳はり、今も猶書を口にする時は必ず擧げる程の問題のものである。

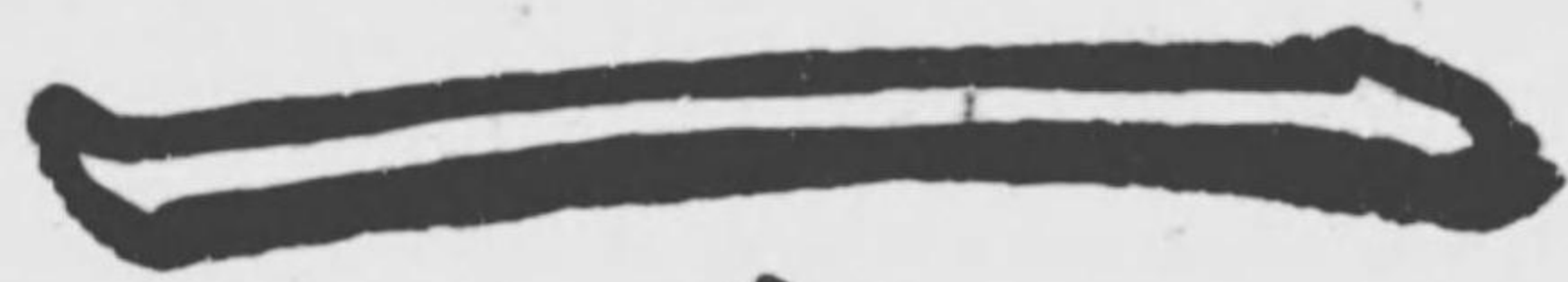
即ち八法とは側勑、努、趯、策、掠、啄、磔の八つの用筆の事で、この變化が「永字」の中に含まれてゐるのである。古來「永字は書法の綱目なり、萬字俱に全し」とか、「古人筆を用ふるの術、多く永字に求めて法を取る。其八法の勢能く一切の字に通ずるを以てなり」とかいはれて大切な字とされてゐる。

そして永字八法を基として各變化を考へ、二十四法とか三十六法とか七十二法とかいふが、斯様な數は何でもよいと思ふ。早く其根本を悟る事が要諦である。殊に小學兒童に色々複雑な名稱等授ける必要は無い。知らず識らずの内に其意を得て、法則に叶ふ様になればそれでよいと思ふ。

### 二、用筆法と結構法

書法を大別すると用筆法と結構法とになると思ふ。永字八法は用筆を主とし





勒



側



垂針



努



掠



曲尺

趯



磔

(法筆用本手種甲)



(法筆用本手種甲)



て説明してゐるが、毛筆書方の根底は用筆であるから、これを第一とし、次に結構法を指導せねばならぬ。文字は點と畫とから出来てゐて、之を揮運するに當りては、第一に正しき用筆に従ひ、第二に美しき結體に據らねばよい字は出来ぬわけである。然し始の間は、表に露れてゐる形に目がつき易く、内に潜んでゐる用筆に及ばぬ事が多いから、この點に注意して、手本文字の眞髓に觸れる様にしたいものである。尙用筆法は大體前記の永字八法につき御研究を願ひ、次に結構法の大要を列記してゐる事とする。

一、間架（分位法）

- (一) 縦分位法 豎畫の間隔を等しくするもの 川・明・則
- (二) 横分位法 横畫の間隔を等しくするもの 三・書・高
- (三) 斜分位法 斜畫の間隔を等しくするもの 多・勿・杉
- (四) 一般分位法 各點畫の間隔を等しくするもの 必・雪・赤

二、結構（對位法）

- (一) 向勢 左右を向ひに作るもの 俗・湯・館

- (二) 背勢 左右を反して作るもの 洗・院・城
- (三) 直勢 左右を直く作るもの 則・淡・測
- (四) 圓形 字形を圓く作るもの 永・寺・尋
- (五) 方形 字形を四角に作るもの 閑・剛・始
- (六) 三角形 字形を三角に作るもの 威・品・直
- (七) 菱形 字形を菱形に作るもの 帝・市・南
- (八) 梯形 字形を梯形に作るもの 絶・風・茂

三、藏鋒と露鋒

永字八法以外に書法として古來やかましいものは、藏鋒と露鋒とである。字義通り解釋すれば、藏鋒とは鋒則筆の穂先を包んで、點畫の外側に出さない事となり、露鋒は其反對に、穂先を點畫の外側に露はす事となる。其爲藏鋒に據るならば、字が圓味を帯びて角立たぬ事となる。

さて書は古來藏鋒を尊ぶといはれてゐるが、大家の名筆に接すると、鋒鉞披露してゐて、藏鋒の面影なく、却つて露鋒に據る様にみえる。明治時代の大家日下部鳴



鶴翁は、眞名菘翁並に楊守敬の説を聞いて大いに悟られ、藏鋒説につき字義による解釋をすて、鋒の沈着してゐることだといふ説を立てられたが、私どもはこれに共鳴する者である。嘗て藏鋒につき述べられた言に、

藏鋒説につき古名人の眞蹟及古刻精拓（古く刻した精巧な石すり）の碑帖等を熟覽研究してみると、其字は鋒鋳披露して、決して筆鋒を包み藏してゐない。實に矛戟森嚴迫り見るべからざるものがある。私は壯年の時から此邊の消息について大いに疑を存し、往年菘翁の高足であつた越智仙心といふ人に、菘翁の藏鋒説を質した所が、仙心の答に「翁より我々が聞いた藏鋒説は、世人の解釋とは大いに相違してをる。「藏鋒」といふ語は沈着と解せねばならぬ。毛先を包み藏する義ではない。」といはれた」と話してくれた。又楊守敬（支那近世の大家にして明治十四年頃日本に来る）に聞いた潘孺初（楊守敬の師）の藏鋒説は、「藏鋒とは沈着にして筆力紙背に透るの謂である。譬へば直道の士の深沈にして露骨ならず、其中に藏する所測るべからざる如く、又深山大澤中に龍虎を藏して、人をして一望して知らしめぬやうなものである。」といはれてゐるが、和漢兩

大家の説が不思議にも一致して、如何にも高尚な説であるので、私はこの説が古人の稱した藏鋒説の眞意であると解する。

といふのが、これは實に卓見である。従つて露鋒とは淺薄な浮滑な、深味の無い書といふことになる。

#### 四、中鋒説

書は中鋒でなければならぬといふが、中鋒といふことは古來書家の間で仲々議論があることである。一説には

中鋒とは筆の鋒先が常に文字の點畫の眞中を通ることである。いつも其様に筆を使はねばならぬと申して、その例に中唐の大家顔眞卿の字を取り、この人の字は畫の眞中を一筋の糸の様なものを通つてゐる。これは鋒が中を通つてゐる證據で、斯様にせねばならぬ。

といふのであるが、これも一寸考へると如何にも尤なやうで、これを信する人が多く、今日でも中鋒とはこの事であると思つてゐる人もあるが、又次の様な意見の人も可なり多い。





(法筆用本手種乙)

乙種手本用筆法

これは筆の表裏を明瞭に現す爲に、特に淡墨にて揮毫したもので、濃き方は表即穂先の通りし跡で、特に黒き部分は、筆の重なつた處である。

この寫眞は起筆、收筆は勿論、轉折の部分等、線の中に隠れてゐる用筆を明白に暴露してゐるので、毛筆書法上多大の参考になると思ふ。従つて一々の説明は必要がないから省略する。





(法筆用本手種乙)

中鋒とは鋒が何れの方にも偏して用ひられることなく、或は上部に、或は下部に、或は左に、或は右にといふやうに、四方八面に鋒を出すことである。さうでないならば面白い文字は出来ない。顔真卿の文字も、常に鋒が畫の中心を通るのではなく、或は上部を通り、又時によると下部を通つたものもある。王羲之は「書は八面出鋒でなければならぬ」といつてゐるが、これが中鋒の事である。

川谷尙亭氏はこの説の方が妥當の様に思ふと説かれてゐるが、要するにあまり窮屈に考へないで、兩者の精神を尊重して、自然に自由に書かねばよい字は出来まい。

## 第九章 毛筆書方の指導

### 一、姿 勢

「心正則筆正」と唐の柳公權が言つた様に、立派な字を書くには先づ心を落着けねばならぬ。心を落着けるには體則姿勢を正しくせねばならぬ。姿勢が崩れると進歩の遅いのは勿論、やがて不良の習慣がつくから、始から注意して正しい姿勢堂々たる態度の良習慣を養ひたい。



学校で行ふ毛筆書方は、大抵腰掛の姿勢であるが、この場合私の経験では、あまり深く腰を掛けぬ様にし、稍胸を張り、下腹に少し力を入れ、兩足を少し開きて足先に體重を移す様にすると、上體は自然に少し前に倒れる様になるが、之が一番よいと思つてゐる。

坐した時の姿勢は、先づ正座して下腹部に少し力を入れ、上體を正して少し前に倒す様にすれば、眼と紙面との距離が三、四十糎となり、精神も自ら集中されて、習字に適した姿勢となる。然し一般には上體を眞直にし、頭だけ前に屈げるのも多いやうであるから、此點は各自の好きにしたらよいと思ふ。唯机はなるべく低いのがよくて、臍よりあまり高いのは書方としては適當でない。

## 二、毛筆の執筆法

執筆法は大體毛質の剛柔によりて異なる。新手本は共に稍剛鋒に屬し、舊來の手本は軟毫に屬してゐる。白い毛は、大抵羊毛で軟いが、之は明の董其昌以後の事で、それ以前の元、宋、唐、隋、晉等は、多く狸や鹿や馬等の剛毛が用ひられ、日本でも維新以前は卷心のシツカリした筆が使用されてゐた。日下部鳴鶴翁の様に、純羊毛長鋒

筆を用ひられた方は、廻腕法と稱して、四本の指を揃へ母指とで圓形を作り、筆の軸を垂直に指先に支へて、揮運する様な不自然な方法を用ひられたが、之は鋒が軟である爲に、逆筆により筆力を出すに都合よくする爲で古法ではない。又一般に懸腕直筆と稱し、軸を垂直にすべき様に言はれてゐるが、之も軟毛の爲の執筆法で古法では無い。

古來多く用ひられた方法であり、新手本の筆者も爲されてゐるのは、單鈎又は雙鈎と稱し、食指又は食指と中指を前に出し、他の指は後に廻して筆を支へ、鋒を稍左前に傾け、掌を空にし、指先でしつかりと筆管を持つ方法である。總じて執筆法には古來定則無く、不自然な方法でも慣れれば上手に書けるものであるが、兒童の指導に際しては、成るべく模式的な方法によらしめ、よい習慣を作らしめたい。管を持つ位置は、楷書では穂から約三、四糎、行草書は更に少し上部を持つのが普通である。

## 三、毛筆と腕法

腕法とは右腕の働き方の事で、懸腕、提腕、枕腕、着腕と前記の廻腕等がある。懸腕



は臂を舉げ腕を空に懸けて書く仕方、大字の學習に於ては之によらねば勢ある字は書けない。之は又速書に適してゐるので、練習して細字に迄及ぼすと、實用書に便利である。名前等の細字を書く場合は枕腕により、左手を机上に横へ、之を枕として書いてもよいが、私は着腕法により、鉛筆書の時の様に、右腕や手頭を机上に固定せぬ程度に軽く置き、指先を使つて揮洒せしめたらよいと思ふ。

#### 四、潤筆

墨を穂先に含ませるのに、鋒の元迄潤す者と、半分位固めて、先の半分位に含ませるものがあるが、一般に前者は後世に屬し、後者は古法の様である。新らしき手本も後者である。兒童も筆を半ば固め、穂先五六分を下して用ひさせると、鋒の腰が強くなり、使用が容易で筆力も得易く、運筆が平易となる。

此爲には、筆は使用後一々穂の元迄洗はさないで、墨を雑布又は練習用紙等で拭ひ置かしめ、あまり固くなつた時は穂先だけ水で洗はせる様にさせたい。

#### 五、運筆

書方の時は先づ心を落着け、正しき用筆法に従ひて一點一畫を疎にせず、焦らず

噪かず緩急宜しきを得させ、自然にして筆脈が切れぬ様、筆と手と心が一如になつて揮運する様に指導せねばならぬ。

#### 六、手本の學習方法

手本の學習は臨書が普通で、これは手本を傍に置いて見て習ふ方法で、筆力を練り用筆法を學ぶに都合がよい。本學年に於ては大體之により、文字に骨力を作り暢達を計りたい。其他摹書と稱し、手本の上から紙を載せて寫して習ふのや、骨書と稱して、骨法を示せる上を習ふのもある。

背臨は臨書や摹書の後に、手本を見ないで揮毫する事で、この爲には手本の字をよく暗記せねばならないので、練習の際實が入り、實力を養ふのに都合がよいから、時々行ふのがよいと思ふ。

上達の捷徑は、廣く淺く習ふよりも、狭く深く勉強する事であるから、手本の教材全部を済ませねばならぬなど考へて素通りせず、少々残るとも、習ふ字は反覆練習して徹底さす方がよい。同一教材を繰返す事は、兒童の學習興味を減じ易いが、指導目的を明にして、一歩々々それに近よらす事になれば、進歩の過程に興味を持ち、



同一の教材でも飽かずに熱心に習ふものである。要は其方法である。

### 七、指導方法と批評

先づ兒童に書方學習は面白いものだといふ印象を與へる事は、其生涯にどれだけの良い影響を及ぼす事か知れない。本科では常に兒童の長所を認めて、賞讃してやる事が必要だ。下手な字でも全部拙では無く、何處かに美點があるから其所を賞してやり、缺點は成るべく叱らぬ様に寛大にみて、一歩づつ正してゆくのがよい。批評に於ても、指導した要點に對する結果を重んじて二三に止め、且部分添削とし、採點の標準も指導事項を重んじ、成績の評語にはあまり優劣をつけず、努力も認めて失望自棄させぬ様に留意せねばならぬ。常に優秀な兒童のみ讃めて他を顧みぬと、一は天性上手と思つて努めず、一は生來人に及ばずと思つて自棄する様になる。

### 八、示範と練習

書方は規範的教科であるから模倣を基調とし、示範と練習とを交互に重ねてゆくべきである。勿論間架結構等は兒童に工夫させてよいが、用筆法は書の本質で、

字の根柢を爲すものであるから、正しいものを反覆練習し、應用出来る迄導かねばならぬ。而して一派の筆癖を用筆法と誤解させてはならぬ。

示範説明では、要點を簡明に指導し、主要點畫は大筆、チョーク等で大書し、明瞭丁寧に示範して、急所を會得させねばならぬ。總じて説明を簡にして練習を多くし、練習も目的を認識せる自覺練習であらしめたい。

### 九、書方指導目標の段階

始は運筆の暢達を計りたい。暢達な揮運には性情が流露して、兒童に快感を與へ興味を起させるものである。次第に用筆法を正し、大切な處は教師の示範につれ、兒童も一緒に空間に大きく揮運せしめ、起筆、收筆、轉折、跳ね等の具合や、緩急、停頓の要領を會得させ、以つて筆力を養ひたい。筆力を得れば興味が湧くので、これは上達の秘鍵である。一般には間架結構に就いては行届いた指導が行はれてゐるが、肝心な筆力に及ばぬ者が多い。成績物も先づ剛健俊拔な處を賞する様にした

### 十、基本練習と初書



教材中大切な點畫の基本練習を先に行ふ事は効果が大きい。又初書を行ひ、之により第一指導を爲して第一練習に移り、之を材料として第二指導を加へ、更に第二練習に入るといふ様な順序正しい指導を行ふのがよい。

### 十一、毛筆書方と用具

筆は毛筆書方で一番大切な用具であるが、之に就いては既に詳述した通りである。大體稍剛目の筆を五・六分程下して用ひるのがよい。

硯は古來文房四寶中の隨一に數へられてゐるが、之は専門書家の用ゐる端溪硯や歙州硯キョウジウの事で、兒童用のものは安價な粗末なものであるから、磨墨に時間を要し、却つて氣分を損ひ、又練習時間を縮少せしむるので、私は寧ろ墨汁がよいと思ふ。其爲には硯は石でも瓦でも、筆の穂を揃へるのに都合よきものであれば何でもよい。只罐や瓶は穂先を揃へ難く、毛筆書方の氣分を害するのでよくない。

墨も墨汁によれば必要ない事となる。

文鎮は紙を押へる爲是非必要である。要は重くて細長いものであれば、金屬製のものでも石でも何でも宜い。

下敷も是非欲しい。一番よいのは羅紗であるから、半紙判より少し大きい形のもの、古洋服の廢物利用でも何でもよい使用したい。羅紗の上には紙がよく落着き、且滲み出た墨が着かない爲に、次の紙を穢す事が無い。一度作れば何年でも用ひられるから、成るべくこれが欲しい。よく厚紙など敷いたのがあつたが、これはよくない。寧ろ「ネル」の布の方がましである。

筆巻も用意したい。筆は使用後はよく拭つて、竹製の筆巻に包み置きたい。竹の鞘に入れるのは穂を損じ易いからよくない。

紙は一般には白色のツル／＼した半紙が用ひられてゐるが、之は筆が沁りてよくない。殊に剛目の筆は一層沁るから、ルーラーをあまり當てない、和唐紙の類がよいと思ふ。値段も普通の半紙より高くないものが出来てゐる。之を學級なり學校なりで仕入れて、適當に四字なり六字なりの罫を入れ、或は練習前に兒童に折らして使ふ様にしたい。



## 第十章 硬筆書方の指導

### 一、鉛筆書方の手本と指導時間

兒童の各種學習作業中、鉛筆の使用は絶えず行はれてゐるから、其使用方法を會得させ、且習熟させる事は勿論必要な筈である。然し文部省から發行された書方手本中には鉛筆書方は加へてない。されば鉛筆書方は全然等閑に附してもよいといふ意圖であるかといふにそうでも無い。鉛筆を使用する以上は、読み易く、速く、且美しく書寫するに越した事は無く、又是非かくあらしめたい。

然らば何故鉛筆の手本が無いかといへば、其必要が無いからである。即鉛筆書方は必要であるが、鉛筆手本を出す程の必要が無いからである。これは鉛筆の使用は毛筆の如く困難でなく、且讀本を中心として適宜行ひ得るからである。

斯様な意味から、私は小學校下學年に於ける硬筆書方は、特定の書方時間を設けなくとも、國語の讀方綴方等の時間に併せて行ふ考へで進みたいと思ふ。然し鉛筆の使用方の説明や、基礎的練習位は、書方の時間の一部を割愛して行つたらよ

いと思ふ。

以上の見地から、本書には文部省の手本通り、毛筆書方の指導を解説し、鉛筆書方の方は、讀方綴方等の時間に特に其つもりで注意する位な考へから、特定の時間を設けて指導する事は豫定しなかつた。只これ等の場合に行ふ参考として、大體の注意を次に附加した次第である。

### 二、硬筆の種類と其特質

硬筆とは毛筆の軟なるに對して云ふ總稱で、一般に用ゐられてゐるのは、鉛筆、ペン、硝子ペン、萬年筆等である。各々特徴はあるが、何れも先が硬いから使用が輕便で、實用には最も多く用ゐられてゐる。元來硬筆は西洋に發達した書寫器具で、圓形な横文字を揮運するに適し、平面的運動を爲すべき様に造られてゐる。之に反し、漢字は概して方形で、毛筆にて立體的に縦書する様に出來てゐる文字である。されば硬筆で漢字、假名等を揮洒する時に毛筆の如くなし、點畫の起筆部、收筆部或は轉折の部分に特に筆壓を加へると、紙面に凹凸を作つたり破れたりし、又文字の鮮明さも失ひ、美觀を殺ぐ事となるから、硬筆独自の平面的運筆法に據らねばなら



ぬ。

### 三、鉛筆細字の目的

筆寫器具中最も輕便で簡易な鉛筆は、又最も普及せる文明の利器であるから、この使用に習熟せしむる事は、實用として價值あるばかりでなく、ペン細字の基礎を作るものである。而して讀方の書取、綴方の記述、其他各種の學校に於ける鉛筆書方總ての向上を目的とせねばならぬ。

### 四、硬筆書方の姿勢

兒童學習中絶えず起る鉛筆書寫の姿勢であるから、身體養護の上からも充分注意して、正しい姿勢の基礎を作らねばならぬ。

腰掛けた姿勢は、毛筆書方の時と略々同じで、膝から下を垂直にして、前後左右に屈伸したり組合せたりせず、足先は平に床に着け、上體は姿勢を正して其儘少し前に倒し、腹部を机から少し離し、頸を引く様にし、眼は紙面から約三十厘米位に保つのがよい。

### 五、鉛筆の選定と其取扱

使用の目的により軟硬種々あるが、筆記鉛筆は大體中庸を得た田口、或はそれより少し軟なものを選ぶべきである。則ち軟に過ぎれば線が太くなり易く、硬に失すれば不鮮明となる。鉛筆は二三本削れるものを用意せしめ、心が折れ又は太くなれば直に取替へ、時間中には成るべく削らぬ様にしたい。又鉛筆を落したり打ちつけたりすると、内部で心が折れるから、其取扱にも注意せしめたい。

### 六、鉛筆の執筆法及腕法

單鉤着腕の毛筆細字と略々同一でよいと思ふ。即ち食指を軸頭の上部に當て、拇指の腹の先と中指の爪根の左側で持ち、他の二指は軽く屈けて中指に着けるのである。

軸は左前約四十五度に傾け、右腕は机面に軽く支へて固定せぬ様にし、左掌面で用紙を軽く押へるのがよい。

### 七、鉛筆書方の用筆法と練習法

用筆法は平面運動を骨子としてゐるから、力が大體平均して運動する爲に、毛筆の如き筆意を失ひて性情は乏しくなるが、間架結構は毛筆の場合と全然同一でよ



次に鉛筆書方では配字に注意して、全體としての美を保たしめ、読み易い様に揮洒させる事に留意せねばならぬ。教材は國語讀本中より選び、始は摹書によりて指導し、次に方眼の罫ある用紙に臨書させて練習するのがよい。

#### 八、鉛筆書方指導上の注意

硬筆書方の目的は、一字々々を美しく書くよりも、全體としての美麗さ、整然さ、明瞭さを目瞭とするものである以上、鉛筆書方に於ても同様、第一にキチント読み易く、次に美しくあるべき事を目標とせねばならぬ。

其方法として、第一目標では個々の文字の鮮明さを冀求し、第二次には全體としての整然さを企圖すべきであると思ふ。此意味から、私は鉛筆書方の指導を、摹書より入らしめたいと思ふ。即讀本を手本とし且教材として、讀本中の適當な場所を選び、先づ摹書せしめたい。摹書とは敷寫しの事で、薄手の半紙或はパラフィン紙等を、直接讀本の教材の上に載せ、上から丁寧に間架結構を寫させるのであるが、之によれば各文字の形體を學ぶのに最も便利である。唯考ふべきは其爲に、讀本

に凹凸を作る患ある事で、それを防ぐ方法として、私は讀方帳などに用ふる丈夫な硬い下敷を、讀本の頁の下にシツカリ當てさせてある。この摹書は毛筆書方の學習に於いても、随分古くから行はれてゐる方法で、唐時代に既に爲されてゐた事が、當時の雙鉤廓填の現存によりて、立派に證據立てられる。

第二次の練習には方眼の罫紙に臨書させ、これの習熟を待ちて漸次白紙の指導に移るのである。尤も尋常三年としては罫紙の練習のみで充分であるが、學年の進むにつれ白紙に練習させて、鉛筆書方の指導を徹底させねばならぬ。

白紙に練習させる時は、上下の文字をつめ、漢字は假名より稍大に作り、各行の頭を描へ、又通りを直くし、行と行との間を廣く開けさすと、全體が整然として読み易く且美しくなる。私は追々斯様な方面に迄導きたいと思ふ。勿論かゝる指導は、特定の鉛筆書方の場合以外、課外に宿題として課しても、相當な成績を擧げるものである。



## 第二篇 細 說

### 〔甲〕 甲種手本による指導案

#### 第二學期

(豫定凡十週 一週二時 約十九時間)

#### 第七週 第一時

- 一、 題目 新手本學習についての諸注意と書話
- 二、 要旨 小學書方手本尋常科第三學年用上に續き、下卷の指導を爲すに當り、今迄の學習過程を回顧すると共に、新手本の眼目である漢字につきて説話し、その歴史と書風の一般を知らしめ、尙ほ手本文字の根柢を爲す諸大家につき書



話を行ひ、新書本學習の態度を作りたい。

三、時間 一時間

四、準備 兒童 新書方手本、硯、墨汁、入小罐（或は墨）筆（大小二本）紙、文鎮、下敷筆、卷、雜布等

教師

書方手本（尋一、尋二、上下、尋三、上下）示範用大筆、示範用紙、硯、墨汁等、出來れば孟法師碑、雁塔聖教序碑、孔子廟堂碑等の拓本、或は寫眞、擴大本、尙原本を臨書せるもの、寸松庵色紙、本阿彌切等

五、指導過程

1. 書方學習の回顧（尋一、尋二並に尋三前期）
2. 毛筆書方の楽しさを語り、其目的につき問答す。
3. 書方の好きな者を舉手せしむ。
4. 今週から三年用上卷に引續き、下卷を學習する事を指示す。
5. 新書本を開いて教材を一覽せしむ。
6. 新書本は漢字の學習が主である事を知らしむ。

7. 三年前期用は平假名學習が主であつたが、後期用は漢字を主とし、これに平假名を交へて、學習すべきことを知らしむ。

8. 漢字は五千年前支那に創り、約一千六百五十年前應神天皇の御代に朝鮮を経て日本に傳はり、國字となつた。一番の大家は支那では王羲之、日本では弘法大師で、唐及平安時代が最も盛であつた。

9. 新書本の漢字は、唐の褚遂良、虞世南、歐陽詢等を基礎として揮毫してある事につき知らしむ。又平假名は、平安朝の紀貫之の寸松庵色紙、小野道風の本阿彌切等を基礎として揮毫してある。

褚遂良の書は尋三下書方手本漢字の骨子を爲すものであつて、殊に孟法師碑、雁塔聖教序碑等の文字が参考され、次に虞世南の孔子廟堂碑が参考される。この時これ等の碑の拓本、寫眞、擴大本、或は教師の臨書せるもの等あれば兒童に指示して説明す。

10. 書方用具の點檢。

11. 書方用具の使用方法及に取扱上の諸注意につき問答す。

〔甲〕 甲種手本による指導案



一般的信條としては大切丁寧清潔の三點につき特に留意すべき事を知らしむ。

硯の持方は上から丘の部分をしツカリ握り、海を向ふにして稍低くする。硯に宿墨が出来ぬ様にする事。

墨汁は小罐から必要なだけ硯に出して用ふる事。

墨を使用する場合は磨墨の方法を指導し、又落して折らぬ様にする事を注意する。

筆の穂の下し方は、先づ穂先を半分程ほぐし、其部分だけ海に入れてよく浸し、次に丘で毛並を揃へ、墨汁がつき過ぎぬ程度に含ませる事。

筆は使用後よく墨を拭ひ、穂先を揃へて筆巻に巻いて置く。又穂先があまり堅くなつた時は先だけ水で洗ふ。

12、正しい姿勢につき問答す。

姿勢正しければ心正し

心正しければ筆正し。

13、執筆法並に腕法の指導。

14、漢字書法の大要につき説明し、示範用紙に永字を揮毫し、用筆法の指導をなす。

15、永字八法の練習をなさしむ。

16、手本等に名前を入れる事に注意す。

17、後片付け。

18、次の時間から愈々手本に依り漢字の學習を爲す事を豫告す。

## 第七週 第二時

一、教材 遠足。田。島。鳴子。

二、要旨 漢字六字の教材であるが、遠、鳴等の用筆結構上稍々困難な字があるから、之等の字については特に注意して指導せねばならぬ。特に姿勢、執筆、腕法、潤筆等については、常に正しき態度を持せしめ、よき習慣を養ひたい。文句は遠足を中心とした、田舎の秋景色を表したものである。

三、教材観 前巻末「十五夜枝まめ」「秋ばれ波の音」等の後を承けた秋の教材で



あるが、秋晴れの日に親しき友と連れだつて、田舎道を遠足する折の楽しさは又格別である。この頃になれば田圃には黄金の稻が波打ち、畠には眞青な大根の畝が長々と伸びて、鳴子の音も長閑に聞えて来る。

「遠」の字は讀本の形と違つて居るが、之は筆寫體の常形で、昔から書く時には多く此の形が用ひられて居る。従つて書方としては手本の字形が正しいわけである。

用筆上は、「遠」のシンネウにつき特に指導せねばならぬ。

四、教材解説

「遠」手本の字は虞世南、歐陽詢、褚遂良等の用筆を基として揮毫されてあるが、上の土は比較的小さく書き、第四畫は強く折込んでから左下に勢よく押出し、その儘グツと落着けて右に引き下から第五畫の起筆に強く當て、左下に勢よく拂ふ。

第六畫は上に抜いて、第七畫と八畫は筆を續け、收筆をキチンと止めて左に抜く。シンネウの第一畫の點は、高く品良く重く打ち、次は間を離して横から打込み、筆勢が衰へぬ様に



に角々に當て乍ら、次々と運び、左下の角では筆を一旦元に戻してから、右下に沈着しながら堂々と拂ふのである。

尙ほシンネウとの間を少し離してある爲に、字が寛つたりしてゐる。又終の波法は、丸印の處で沈着してゐる爲に、筆がよく落着き、穂先は畫の中を貫いてゐる。参考の字は、上が虞世南の孔子廟堂碑、中が歐陽詢の九成宮碑、下は褚遂



良の雁塔聖教序の文字であるが、何れも用筆正しく韻致高く、千古の劇蹟である。

「足」この字は孟法師碑の用筆で書いてあるが、字形は歐陽詢の九成宮碑から



出てゐる様である。上部の口は小さくしてよく締り、其終畫はキチント入念に作られ、最後の波法は暢達して實に氣持よく出来てゐる。尙ほ筆脈も續き、結構も整然とした立派な出来である。



参考の字は、上が褚遂良の孟法師碑の中の字であるが、筆寫體では多くはこの形に書かれてゐる。しかし下の歐陽詢九成宮碑のやうな形もあるので、手本の字は讀本の形と一致した、九成宮碑の字形に依つて書いてある。「田」の第一畫は、左上からグツと打込んで右下に引下げ、元に返して第二畫を紙を切るやうに、筆の右側面で引き、右角でグツと落着け、左下に稍々圓く引下



る。字形は大體下の狭い四角であるが、内部の空間は略々等しく作らねばならぬ。

参考の字は、歐陽詢の九成宮碑の文字で、結構整然とし筆力勁健な傑作である。

「白」は古人の物には無いが、手本の字は大體孟法師碑の筆意により、ユツタリと品良く書いてある。上部の白は稍々小さく、下部の田は稍々扁たく作る。尙ほ間架に付いては特に注意し、内部の空間が略々等しくなる様にせねばならぬ。



用筆上に付いては、堅書は強く太く作り、横書は細く鋭く書いてある。殊に横書の筆の運び方は、穂の右の腹で引く様にする。

「鳴」は結構のとりに難い字であるが、口扁を小さくして左肩に書き、右隣の鳥は大きく下げて書いてある。殊に鳥の第七畫の灣曲は、褚遂良の孟法師碑の用筆に依つて、穩やかにユツタリと書いてある。終の四點は強くキチンと作り、筆脈が切れぬやうにせねばならぬ。尙ほこの點は下らぬ様に打たねばならない。

鳴



中の字であるが、手本の字はこの形によく似てゐる。唯鳥の字の内部の横畫が一ツ多いが、古人のものにはこの形が多い。手本の字は讀本の形に一致させてある。

「子」第一畫を上からグツと強く打込み、右上りにスウト軽く引き、右角でグツ

子



と沈着し、左下に鋭く拗ふ氣持で拂ひて一寸當て、その儘右下に轉じ、三折の氣持で更に下より左下にグン／＼運び、下端でよく落着け、左に強く押出すのである。横畫は下らぬやう又餘り長くならぬ様に稍々覆して作り、左を右より長く爲す。尙○印の部分は廣くなる様にせねばならぬ。参考の字は、歐陽詢の九成宮碑中の字であるが、手本の文字と結構用筆を同じうしてゐる。

五、教材区分 第一時 「遠足、田」の指導（本時）

第二時 「鳥、鳴子」の指導

第三時 全體練習後清書

六、準備 兒童 手本、硯、墨汁、筆、筆巻、下敷、紙、文鎮、練布等

〔甲〕 甲種手本による指導案



教師 手本教材を消書せるもの示範用大筆・示範用紙（新聞紙四・五枚）  
ピン・朱筆及び朱墨（瓶入り）・色チョーク教材を表せる掛圖等

### 七、指導過程

#### 一、準備

1. 正しき姿勢をとらしめ心を落着けさす。
2. 用具の準備と整頓、之は前時間の終りに行はしめる様に習慣づけなければならぬが、本時は特に雑布・硯・墨汁・筆・下敷紙・文鎮・手本等の正しき位置を指導す。

教師は黑板に示範用紙を貼付す。

3. 墨汁を必要なだけ、少しづつ、罐から出さしめ、潤筆につき指導す。
4. 雙鉤懸腕の筆の持方、腕の構へ方を指導す。

#### 二、學習

1. 目的指示 示範用手本の提示。
2. 讀方の取扱ひと、内容につきての問答。此時掛圖を出す。

3. 手本を開きて「遠」の字を熟視せしむ。

4. 「遠」の試書 各自一字宛手本を視て書かしめ、上に挙げさせて全體の出來を概評し、其中一・二枚共通缺點あるものをとつて、全兒童に示し乍ら批評させ、共同批評を爲す。

5. 「遠」の示範 運筆につき説明し乍ら、大筆にて示範用紙に大書して示し、朱筆にて更に用筆法を説明す。

6. 運腕練習 今一度大筆にて示範し、兒童は右腕を舉げて之に倣ひ、運筆の要領を會得せしむ。

7. 潤筆に留意させ、姿勢執筆を正し、更に一字書かしむ。

8. 成績物を上に挙げさせて講評し、優れたるもの一・二點選び取りて、批評と鑑賞を行ふ。此時朱筆にて美點に圓を付け、又缺點を加朱して批評す。

9. 各自練習 此間机間を巡視して、姿勢執筆を正し、朱筆にて用筆結構につき個別指導を行ふ。

10. 「足」の字につき手本を觀察せしむ。

〔附〕 甲種手本による指導案



- 11 「足」の試書 各自一字宛書かしめ、舉げさせて講評し、其中一・二枚共通缺點あるものを選び取りて、結構用筆につき批評し、共同批評を爲す。
- 12 「足」の示範説明 此時兒童も一緒に運腕練習を行ふ。
- 13 各自練習 此間机間巡視個別指導を爲す。
- 14 共通缺點の批評 缺點の著しきものを全兒童に示して批評せしめ、朱筆にて批評す。
- 15 「田」に付きても同様の方法にて指導す。
- 16 最後に全紙に「遠足田」と二回通り練習させ、上に舉げさせて講評し、殊に優秀な作品二・三點を選びて鑑賞指導す。

三、整理

- 1 後片付 靜に丁寧に、且つ順序正しく用具を片付さす。残りの墨汁は各自こぼさぬ様に元の瓶に返さしめ、又は當番に命じて墨取りに集めさす。
- 2 學習事項の反省と次の豫告。

八、指導上の注意

- 1 本手本最初の取扱ひであるが、初からあまり難かしい註文をすると書方を嫌ふやうになるから、なるべく美點を賞揚して氣分を引立て、書方學習に興味を感じしむる様に導きたい。
- 2 鑑賞の方法は、筆使ひが正しいかどうか。形はよいか。力はあるか。墨のつけ方はよいか等を標準としたい。

第八週 第一時

- 一、教材 鳥、鳴子
- 二、要旨 前時の教材「遠足田」の復習を爲すと共に、新教材「鳥、鳴子」の指導を爲す。  
本教材に於ては、用筆上特に「子」の第一畫、第二畫の引き方を指導し、又「鳴」の結構及び第十畫の用筆、並びに最後の四點の打ち方の要領を會得さす。
- 三、準備 前時に同じ。
- 四、指導過程



四、準備

1. 着椅の正しき姿勢をとらしめ、暫時瞑目して精神を落ち着かす。
2. 用具の準備と整頓。此間に教師は示範用紙を黒板に貼る。
3. 潤筆並に執筆法魔法の指導。

二、學習

1. 前時に學習せし教材「遠足田」を手本を見て各自一度書かしめ、上に挙げさせて講評し、優れたるものと缺點あるものとを各一二枚宛選びて批評さす。
2. 「遠」の用筆結構について問答し、要點を復習してから大筆にて示範す。此時兒童は一緒に運腕練習を爲す。
3. 「遠」の字一字練習
4. 「足」の用筆結構につき問答してから大筆にて示範す。此時兒童も一緒に運腕練習を爲す。
5. 「足」の字を一字練習せしむ。
6. 同様の方法にて「田」の復習を爲す。

7. 本日の新教材を指示す。

8. 手本の觀察。

9. 「鳥」の試書。各自手本を見て一字書かしむ。

10. 試書せしものを上に挙げさせて講評し、一二枚共通缺點あるものを取り、朱筆にて批正す。

11. 「鳥」の示範。運筆につき説明しながら大筆にて示範し、朱筆にて更に用筆結構を解説す。

12. 運腕練習。教師と一緒に兒童も右腕を挙げ、空間に大きく運腕練習を爲さしむ。特に二畫から三畫、六畫から七畫への要領を指導す。

13. 潤筆に注意せしめ「鳥」を一字書かしむ。

14. 成績物を挙げさせて講評す。

一二枚點優秀なるものを取り、美點に圓を入れ、又缺點を朱筆にて批正す。

15. 各自練習。机間を巡視しながら、姿勢、執筆を正し、朱筆にて個別指導を爲す。

16. 「鳥」の手本觀察。

〔甲〕 甲種手本による指導案



17、「鳴」を各自一字宛試書せしむ。

此時二名程指名し、黒板にチョークにて大きく書かせ、共同批評を爲す。

18、示範説明 大筆にて教師が揮毫する際、児童も一緒に空間に運腕練習を爲さしむ。

19、各自練習 此間机間巡視を爲し個別指導を行ふ。

20、共通缺點の批評 共通缺點ある成績を一般に示して批評せしめ、之に朱筆を加へて修正す。

21、各自練習 机間巡視個別指導

22、「子」につきても同様の方法にて指導す。

23、最後に「鳥鳴子」と三字續けて一度書かしめ、優秀なもの一二點をとりて鑑賞す。

### 三、整理

1、後片付。

2、手の検査を行ひ、清潔につき調話を爲す。

2、學習事項の反省と次の豫告

### 五、指導上の注意

1、兎角無味單調に流れ易いから、なるべく學習に變化をつけて興味を多からしめ、児童の注意が集中するやうにせねばならぬ。又管理訓練に特に留意して、静肅、清潔等の良習慣を養ひたい。

2、なるべく自治的訓練を施し、用紙の配布や、墨汁始末等は當番にさせるやうにしたい。

## 第八週 第二時

一、教材 遠足田<sup>〇</sup>鳥<sup>〇</sup>鳴<sup>〇</sup>子

二、要旨 第一時並に第二時に指導した本教材の六文字につき、練習してから清書をさせる。

三、準備 同前

四、指導過程

〔甲〕 甲種手本による指導案



一、準備

1. 用具の準備と整頓
2. 姿勢を正し、暫時瞑目させて心を落着かしむ。

二、學習

1. 前二時に學習せし事項の問答による喚起
2. 目的指示 教材を清書し、落款の様式迄示せるものを提出して、本時の目的を指示す。
3. 「遠」の字を示範してから一字書かせる。
4. 兒童に舉げさせて講評し、その中から一・二點選びて相互批評を爲さしめ、且つ共通缺點に加朱して批正す。
5. 更に一字「遠」を練習せしむ。
6. 「足田島鳴子」につきても同様の方法にて指導し、二枚練習せしむ。
7. 第三枚目に小筆で落款を入れさす。

(例) 十月二十日 尋三 氏名

注意

1. 細楷は總て着腕單鈎、或は枕腕雙鈎にて記さしむ。
2. 潤筆は小筆を約半分程下し、墨をよく取り、穂先を描へてから書かせる。
3. 名前の位置に注意し、あまり下らぬ様に書かせる。
4. 配字は縦に直くし、字の間隔を等しく作る。
5. 姿勢が著しく前屈みにならぬ様に注意す。
8. 一字宛示範してから手本を視て清書せしむ。
9. 時間あれば更に一枚各自手本を臨書して清書を作らしむ。

三、整理

1. 後片附。
2. 清書を蒐む。
3. 優秀な作品を二・三點鑑賞さす。
4. 手の検査。
5. 次の時間の豫告。

〔甲〕 甲種手本による指導案



### 第九週 第一時

一、教材 町。村。家。國。男。女。  
 二、要旨 前教材の後を承け、漢字六字の練習を爲さしむ。

町。村。國。家。男。女は國を形作つてゐる要素にして、公民教材ともいふべく、日用用ひられてゐる所謂常用漢字のみである。漢字大字の指導であるから特に腕法に留意し、腕腕でグン／＼揮運させねばならぬ。

三、教材観 本教材は前教材の遠足と關係ある句で、遠足の際見たり或は想起したりした語であるが、今順序を變へると、男女が寄つて家を作り、家が聚つて町村となり、町村は又國をつくるといふ公民的教材とも考へられる。本教材に於て特に留意すべきは、キチンとした漢字の結構と用筆につきての指導で、手本の字は何れも峻拔整正な字である。又「國」「男」等には別に書寫體があるが、手本は讀本の字形と一致した字典體である。思ふに此程度の子童に於ては、なるべく讀本の形と一致させやうとした方針から出て居るものであらう。

四、教材解説 「町」此字は扁を小さくして左上に書き、旁を大きくして右下に書く字である。用筆上では收筆の豎畫及びそのハネにつき特に注意せねばならぬ。

結構上では、田の内部の間隔を等しく作り、右旁の横畫は田の内部の横畫より稍々高きところに位置せしめ、次の豎畫をこの真中よりも稍々左に寄るやうに打立て、腕の内部を廣く作らねばならぬ。

「村」此字は扁旁を同大に作り、木扁と「寸」は何れも豎長で、同じ大きさである。尙ほ木扁の豎畫は横畫の右方を貫き、收筆は止め、寸の豎畫も横畫の右寄りを貫き、收筆は左に鋭く撥ね、最後の點が低くならぬやうに打たねばならぬ。

「家」は畫が多いので稍々細目に書いてあるが、筆力の旺んな字である。ウ冠は第一畫の點が心持ち左に倚つてゐる。爲に横畫の右が稍々長くなつてゐる。用筆に於ては第二畫を左下に強く引下げ、收筆を元に戻し、第三畫は

町 村

【甲】 甲種手本による指導案



家



間を等しく作り、又左右の拂ひが下らぬやうに氣を注げねばならぬ。参考の字は歐陽詢九成宮碑中の字であるが、筆勢峻拔、結構整然たる名蹟である。

國



【國】には別に書き易い書寫體があるが、この字形は讀本の形と一致してゐる。之も本學年の兒童としては、なるべく讀本と一致させる方針のもとに書かれた爲である。手本の字は、用筆峻拔にし

て結構整然とし、尙ほ規模大きくて堂々としてゐる。殊に左右の豎畫がユツクリとし、内部を寛に作つてあるので、用筆は褚遂良であるが、規模は顔真卿の趣がある。此字で特に注意しなければならぬ事は、間架結構で、内部の間隔を均等にする事である。尙ほ用筆については、第二畫の右角をよく落着けること、終畫を入念にキチンと引く事である。参考の字は、歐陽詢の皇甫府君の碑の字であるが、筆寫體では斯様に口をムに作つたものが多い。

男



上に撥ね、内部を寛に作らねばならぬ。此字も筆寫體では、参考に出した智永の千字本中の形に作つたものが多いが、この方が形が良く、又書き易い爲に、一

【甲】 甲種手本による指導案



畫増したものである。

女



ノビく〜と引下げ、キチンと止めて元に返へす。第二畫は第一畫に近く並行して作り鋭く拂ふ。第三畫は長大に覆して引き、此字の横の中心を爲してゐる。

五、教材区分 第一時 「町村家」の指導(本時)

第二時 「國男女」の指導

第三時 全體練習後清書

六、準備 同前

七、指導過程

一、準備

1. 用具の準備と整頓

2. 前時の清書につきて講評し、優れたもの五、六點を鑑賞せしむ。此時美點並に缺點につき相互批評を爲さしむ。

3. 評語(甲乙或は美良)並に評號(◎○▽)を入れたるものを返却し、特に優秀なもの五、六點を揭示す。

4. 姿勢、執筆、腕法の指導。

二、學習

1. 目的指示 教材の内容につきて問答す。

2. 試書 手本を見て「町」の字を初書せしむ。

3. 初書せしものを上に舉げさせて概評し、其中共通缺點あるものを一二枚とり問答しながら朱筆にて批正す。

4. 示範と一斉運腕練習

(甲) 甲筆手本による指導案



5. 各自練習 机間巡視個別指導。
6. 「村」「家」につきても同様の方法にて指導す。
7. 最後に「町村家」と一同通り練習させ、之を舉げさせて講評し、特に優秀なるもの數點につき鑑賞せしむ。

三、整理

1. 後片付。
2. 本時學習事項の反省と次の時間の豫告。

八、

指導上の注意 筆の穂の下し方を適當にする事は大切な事であつて、手本の筆者は大體六分ぐらひ丁寧に下し、穂先を心持左前にして揮毫されてゐるが、兒童も之に倣ひ、入念に穂先を下さしめて、揮毫させる様に習慣づけたい。穂が全部下りるとグニャ／＼して書き難い。

第九週 第二時

教材 國。男。女。

二、

要旨 前時に續き「町」及「村」「家」の三字を復習してから、新教材「國」並に「男」「女」の用筆結構を指導し、且つ練習せしむ。

三、

準備 同前

四、指導大要

1. 用具の準備と整頓
2. 目的指示
3. 「町」の要點問答と示範並に運腕練習。
4. 「町」を二字練習せしむ。
5. 「村」の要點復習と示範並に運腕練習。
6. 「村」を二字練習せしむ。
7. 「家」も同様の方法にて復習す。
8. 「國」の手本文字觀察と一字試書。
9. 「國」の共通缺點批正。
10. 「國」の示範と運腕練習並に用筆結構の説明。

〔甲〕 甲種手本による指導案



- 11. 「國」の練習と個別指導。
- 12. 「男」「女」も「國」と同様の方法にて指導す。
- 13. 最後に「國男女」と一回通り練習させ、鑑賞と批評を行ふ。
- 14. 後片付。
- 51. 本時學習事項の反省と次の豫告。

### 第十週 第一時

- 一、教材 町。村。家。國。男。女。
- 二、要旨 本時は前二時間に指導せし「町村家國男女」の教材を總練習してから清書を作らしむ。清書に際しては個々の字に留意さすと共に、手本のやうに配字に注意して、全體を位置よく納めさせたい。落款の書方は前の清書の時にも指導したが、なかなか難かしいから、此度も大さ位置等につき特に注意して、綺麗に記させたい。

三、準備 同前

### 四、指導大要

- 1. 用具の準備と整頓。
- 2. 姿勢を正し、心を落着かしむ。
- 3. 目的指示 既習教材「町村家國男女」を始から總練習し、最後に清書を作らせる事を告ぐ。
- 4. 「町」から順次用筆結構につき、大切な點を問答しながら示範し、一字練習させては共通缺點の批正を爲し、更に二字練習せしむるやうにして、一回通り復習す。
- 5. 清書を爲すことを告げ、名前の書方につき問答してから、位置よく丁寧に記さしむ。
- 6. 一字づゝ示範してから、手本を見て清書せしむ。
- 7. 清書の提出。
- 8. 後片付。
- 9. 本時の學習事項の反省と、優秀作品の鑑賞。

〔甲〕 甲種手本による指導案



第十週 第二時

一、教材 木の葉が散る。

二、要旨 漢字三字・平假名三字の教材につき用筆並に結構を指導す。

三、教材観 此頃になれば秋も深くなり、落葉の季節となる。兒童の眼に映る、紅の楓や、黄の銀杏などが秋風に散りゆく姿は、大人の世界とは異つて面白く愉快なものである。本教材はこの意味であらう。手本の字の平假名は、寸松庵色紙の用筆により、漢字は褚遂良の雁塔聖教序の用筆にて、渾樸勁健な中に穏やかな落着のみえる、優れた調和體である。

運筆上留意すべきは、各文字の筆脈が切れぬ様に揮運し、各點畫が相呼應することである。

四、教材解説 「木」は雁塔聖教序の筆意により、雄勁な中にも暢達せる趣があつて、のびくとした感じのよい字である。結構も整然として、何處に隙間もな

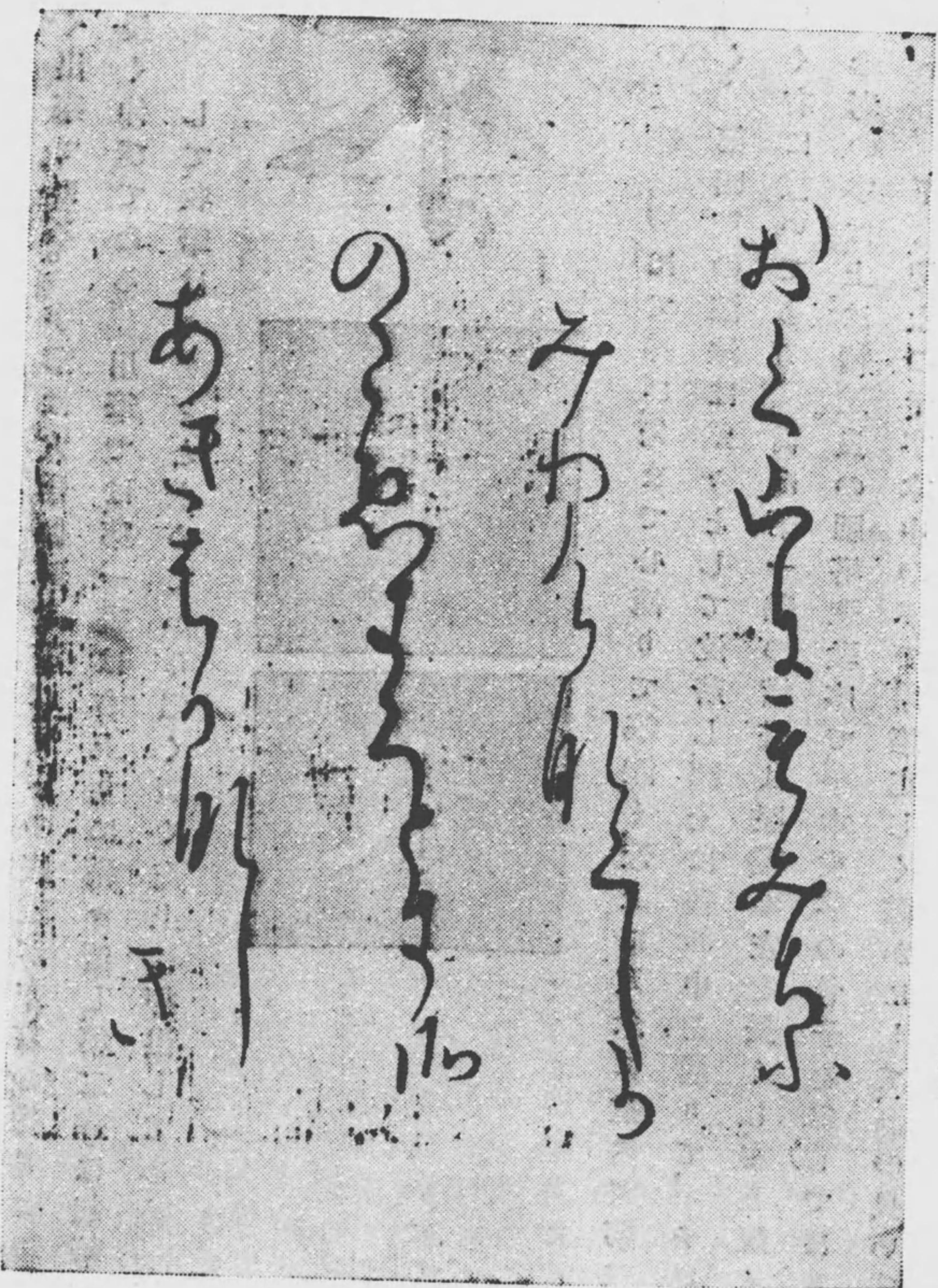
く良く出来てゐる。字形は大體圓味を帯びて、中の豎畫が左右の拂ひよりも下に長く伸びてゐる。用筆では第一畫は右上に稍々覆し、第二畫は起筆がシツカリして、收筆はキチンと止めてから強く短く左上に押出してゐる。第



三畫の左拂は腕にて拂ひ、先まで心籠りて筆深く、左上に入念に抜きて第四畫に續く。第四畫の波法は堂々として沈着し、穂先は畫の中を通りて、キチンと正しく右に抜いてゐる。尚ほ第一畫の横畫は豎畫の左を長くし、右を短く作る。参考の字は、上は褚遂良の雁塔聖教序で、手本文字の骨子を爲してゐるやうである。下は智永の千字本中の字で、用筆正しく穩かにして、品の良い字で

〔甲〕 甲種手本による指導案





ある。共に名筆と稱すべきであらう。

「の」は漢字「乃」の草體より生る。手本の字は草書の用筆により、暢達した筆で堂々と書いてある。字形は圓形を爲し、起筆にシツカリ力を入れ、その力が弛まぬやうに稍々圓く左下に引き、當てゝから左上に押上げ、沈着し乍ら右上りに圓く引き、大きく圓を描いて右下で一旦落着け、左下にスウツと拂ふのである。此時内部の空間があまり遠はぬ方がよい。尙ほ丸印のところでは筆を落着けるやうに運筆せねばならぬ。



「葉」は雁塔聖教序の用筆結構により、美事に書いてある。草冠の筆順は左の豎畫から始め、右の豎畫で終る。第五畫は長く暢達して覆し、此字の横の中心を爲してゐる。最後の二點



は重く強く、しかも品ありて全く参考の雁塔聖教序の字ツツクリである。斯様に畫の多い字は、稍々細目に作り内部の間隔が均霑するやうに留意せねばならぬ。此字は字典體であるが、筆寫體にも雁塔聖教序のやうに手本の形に作つたものが中にはある。

か

「か」「か」は漢字「加」の草體である。第一畫は穂先を中にして起筆を入念に打込み、右肩を圓く揮運して左下に強く引き、左上に押出す。第二畫は丁寧に上から入れて次第に力を加へ乍ら短かく引き、元に返す。第三畫は廣く離して長目の點を圓く打つ。最後の二點は、小さけれどもキチンとシツカリつくる。用筆上特に留意すべきは、平假名書方の通則である穂先を中にして入れることで、第一畫第二畫第三畫共に起筆が鋒を中にしてゐる。結構上注意すべきは右の點との間を廣く作ること、其爲左扁を中央よりも左に作らねばならぬ。

「散」は字典體に依つて書かれてゐる爲に、古法帖には此形は無いが、用筆は楷

る 散

途良の雁塔聖教序により峻拔勁健に書かれてゐる。筆順は左上の横畫から始め、字形は左扁を豎長につくり、右旁を短かく書き、扁旁を緊密に組合せてある。用筆上特に留意すべきは、左上の二横畫が仰覆を爲し、下の月の第一畫はキチンと止めてから上に返し、第二畫は下から受けて横畫を沈めて引き、右角で一旦落着け、堂々と引下げ、下端に凍と當て、強く左上に押出すことである。尙ほ右旁の左右の拂ひはシツカリとし、筆端まで心籠り稍々高く位置してゐる。

「る」は漢字「留」の草體より生まる。寸松庵色紙あたりから出で、雅健で韻致が高い。起筆は穂先を中にして斜に二段に引き、右上りにスウツと運んでグツト落着け、左下に稍々曲りて引下げ、突當つてから元に返へり、楕圓形に運んで右下で力を加へ、最後の結びをキチンと強く、草書用の筆で作つてある。尙ほ丸印のところでは筆をよく落着け、左下の口が開き



適きぬやうにせねばならぬ。

五、教材区分 第一時 「木の葉」の指導(本時)

第二時 「が散る」の指導

第三時 全體練習後清書

六、準備 同前

七、指導大要

1. 用具の準備。
2. 前時の清書中優秀なもの、鑑賞と批評。
3. 優秀なもの五、六點を掲示し、その他は返却す。
4. 本時の目的指示。
5. 教材の讀方及意義の取扱ひ、内容の問答。
6. 手本文字觀察。
7. 「木」の試書と共同批正。
8. 「木」の示範と朱書による解説。

9. 「木」の練習と個別指導並に共通缺點の批正。
10. 「の」及び「葉」も同様の方法にて指導す。
11. 最後に「木の葉」と二回通り練習させて講評し、佳作二、三點につき鑑賞並に批評を行ふ。
12. 後片付。
13. 本時學習事項の反省と次の豫告。

第十一週 第一時

一、教材 が散る

二、要旨 先づ前時の「木の葉」の復習を爲し、次に本時の「が散る」を指導す。

此中平假名は兩方とも既習文字であるが漢字「散」は新出文字で、結構用筆共に稍々難かしいから、特に丁寧に指導せねばならぬ。

三、準備 同前

四、指導大要

〔甲〕 甲種手本による指導案



1. 用具の準備。
2. 目的指示。
3. 「木」の要點問答と示範並に練習。
4. 「の」の要點問答と示範並に練習。
5. 「葉」の要點問答と示範並に練習。
6. 「が」の試書と共通缺點の批正。
7. 「が」の要點問答と示範並に説明。
8. 「が」の練習と個別指導。
9. 「散」の手本文字觀察と試書。
10. 「散」の共通缺點批正と示範並に運腕練習。
11. 「散」の用筆結構の解説と練習。
12. 「散」の個別指導と共通缺點の批正。
13. 「る」も右に準じて指導す。
14. 最後に「木の葉が散る」と一回通り書かせて鑑賞と批評を爲す。

15. 後片付。

16. 本時學習事項の反省と次の豫告。

### 第十一週 第二時

- 一、教材 木の葉が散る
- 二、要旨 前二時間に指導した「木の葉が散る」の六文字につき、用筆結構を復習してから清書を爲さしむ。  
清書に際しては特に潤筆に留意せしめ、且つ文字の大きさ、位置等につき注意せしむ。

三、準備 同前

四、指導大要

1. 用具の準備と整頓。
2. 目的指示。
3. 「木」より要點を問答しながら示範し、二字宛手本を見て一回通り練習さす。

〔甲〕 甲種手本による指導案